

女の言いたい放題誌

わいふ NO.237.

平成4年8月3日
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

特集 セックスレス夫婦
特別寄稿 わが青春の宝塚
特別寄稿 ホリックファミリー(依存症家族)

●日本書籍のこどもの本／

●九・十歳は飛躍台



小林信次著

★四六判
★200頁
●定価1,600円
■好評発売中！

★「少年期が失われている」今、「少年期」を復活させその飛躍の姿をあざやかに描く／



ワキシングマザー
ただいま、子育て
教師修業まつ最中

小野礼子著

★主婦であり母であり、子育て真っ最中の女性教師がつづる種教師修業術。働く婦人に贈る！
●目次より、主婦として二児の母親、研究会へ行く／教育実践を本に書く／育児休業中の2年間／他

★8月新刊！ ●予価1,500円

★自然環境保護のこころを育てるファンタジー写真絵本 刊行開始！
自然からのおくりもの

川ナツ 新刊『アユの四月十三日』 語り・加用辰美／写真・大塚高雄
森フミチ 新刊『クジラの海』小笠原 写真・文・望月昭伸
水アキラ 最新刊『出羽のフナ』の森 写真・文・太田 威
木アリス 7月刊『木のくに』日本 写真・文・丹地保晃
アリス 8月刊『知床の流水』 写真・文・岡田 昇
●8判上製 装幀力ハ！ 32頁 オールカラー 各巻別刷4頁解説付 ●定価各1,800円

★おあやらが好きな子どもたちへ ●85判40頁 4色+2色 ●定価各1,500円

お天気12か月 ●岸田好子文・さいとゆふじ・絵・廣瀬厚 監修
全12巻上・おでんさんと野山のどうぶつ会 下 近刊
●全巻上・おでんさんと野山のどうぶつ会 下 近刊

お魚まるごと写真館 中村真実写真・文 ●A4判・定価各1,800円
お魚の忍者たち お魚のじまん絵 オールカラー

宇宙からのおくりもの 佐田晴夫文・成瀬政博 絵 ●全5巻 B5上製
●定価各1,500円 箱入セット7冊7,500円



日本書籍

〒112 東京都文京区小石川14-14-24 ☎03(3813)8111 [定価は税込]

ジュネーブの国連人権委員会に参上した
元気印の主婦パワー——現職警察官電話
盗聴事件の真相究明に立ち上がったから
5年、当局の理不尽な対応にもめげず、
シロウトの運動は粘り強く続けられてい
る。そこまで彼女らを駆りたてるものは
何か？ クリスチャン主婦の感動の手記。

■菊地原美二子（歌詠主婦）著

海を渡った
盗聴事件

定価1,560円

- 第1部 父ふたり
- 第2部 町で起こった盗聴事件
- 第3部 海を渡った盗聴事件
- 第4部 素顔の要請団報告

●88年JCU奨励賞受賞！

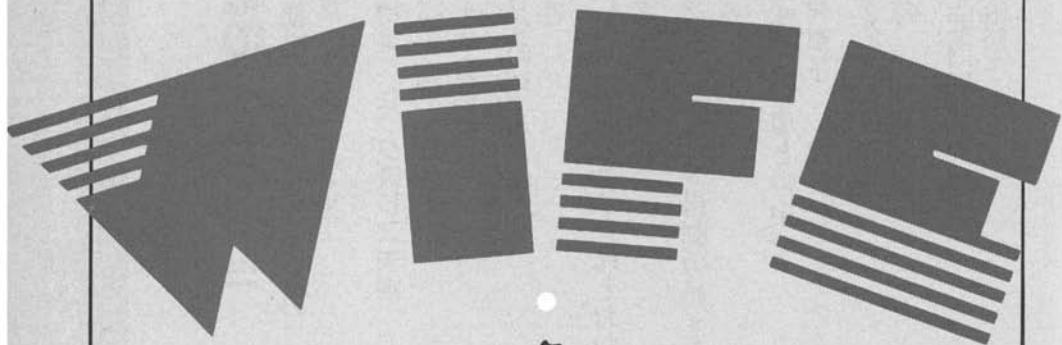
盗聴事件を考える住民の会編
町で起こった盗聴事件

定価1,236円



リベルタ出版

〒101 東京都千代田区神田神保町1-30
TEL.03(3293)2923 FAX.03(3293)3723
振替 東京8-14083



あなたのフリースペースです。

4 私のことと場 ④

京都市下京区・足立めぐみ
写真／文・足立めぐみ

10 ●特集 セックスレス夫婦

嫁から訴えられて
六十歳の姑

13 エロスの消えた後

匿名

17 私たちは、おとうさんとおかあさん

匿名

20 セックスレスは悲喜劇の始まり

匿名

24 軽蔑と嫌悪との中で

藤沢照子

26 セックスと自立

匿名

29 家庭内別居夫婦

浅田節子

31 夏は暑い、冬は寒い、だからダメ

匿名

34 わが家は未成熟？

匿名

36 「なぜか、その気になれない」と…

匿名

38 夫は変わった、けれど私は…

匿名

41 セックスは好き

匿名

43 エッセイスト・クラブ

岩田佳子・かなゆうこ

細谷登美・福地園子

53 サープレシープ

犬飼好子・村上恵子・上谷亜育

高松恭子・佐藤玲子

58 カナダの夕陽① 清水ふみ

65 平成おっさんまがーニング⑥ 西田淑子

★新連載★

66 わが青春の宝塚 豊城智子

72 オしたちのクラス異窓だよ
琴 天音

◎第五(回)子育て会議◎

76 これでは子供を生めない

木村澄子・河野道子・小林けさみ
福田幸子・三島梨香

85 ホリックファミリー(依存症家族) 橘 由子

97 わいふ文章講座(10) 副編集長・和田好子

連載8

100 私の愛する外国人 新井ひふみ

109 パイプのつまり 古沢涼子

114 コミック・痛快ノ一般人⑩ 栗田笑

情報コーナー

118 ブック情報

120 読んでみました
和田好子・田中喜美子

122 フリースペース

関根裕子・山本雅子・織田裕子・山田永子

連載小説④

130 契約結婚 山影冬彦

138 わいわいがやがや
餅原ひろ子・原真智子・加納礼子

次号投稿募集 141 投稿規定 142 編集だより 144

バックナンバー 42 自費出版は「わいふ」へどうぞノ 140
氏名・住所を秘密にしたい方・仕事をしたい方へ 141

私のしごと場

4

パットおじょうさん

足立めぐみ

京都市下京区



写真／文・足立めぐみ



パットおじょうさん

京都市下京区松原通堀川西入
Tel 075-801-9861

営業時間 11:00~5:30

- 不定休なので来られる前に電話してください
- 京都駅から9番バス
堀川松原下車徒歩1分



私の大好きなモンゴメリの本の
タイトルからとった店名「パット
おじょうさん」です。



1982年に商店街にある自宅を新築した折、せっかくだからと作った店のスペース。

’83の春に手作りの店「パットおじょうさん」として出発しました。

’85～’88の3年間は主人の仕事でアメリカ北西部のミネソタ州に住むことになり、いったん店をしめて行きました。

この時に会ったアメリカン・カントリー・クラフトの素朴な魅力にひかれ、帰国後はカントリー・クラフトの店をしようと在米中に沢山のクラフト店やショーを見てまわりました。

’88の春に店を再オープン。
今日に至ります。



▲お客様に送る誕生日カードとクリスマス・カードの写真は店の商品を入れて自分でとります。



◀品物が小さく数が多いので掃除は大変です。



商品の多くはアメリカからの直輸入。他の店にないものを置きたいと思っています。カタログで注文し、船便で届く荷物を開く時が一番わくわくして楽しい時です。よくお客様に「楽しいでしょう？」と聞かれますが、本当に好きな仕事なので素直に「はい」の返事です。これで儲かったら何も言うことはないのですが、これがむずかしい。



▲月2回、手話のサークルに参加しています。

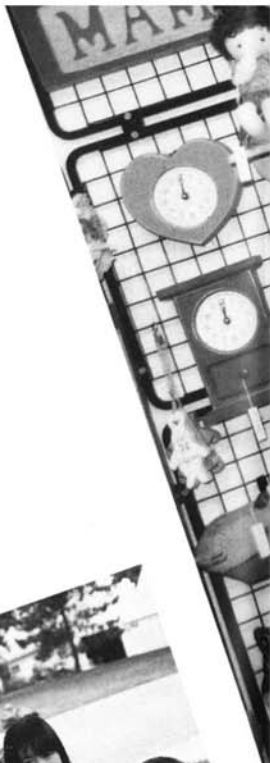


▲月に1回、大阪のトール・ペイント（古くなったノコギリやバケツ等にペイントして生活用品や家具のリフォームを楽しむ工作。アメリカの開拓時代に始まった）の教室へ通っています。

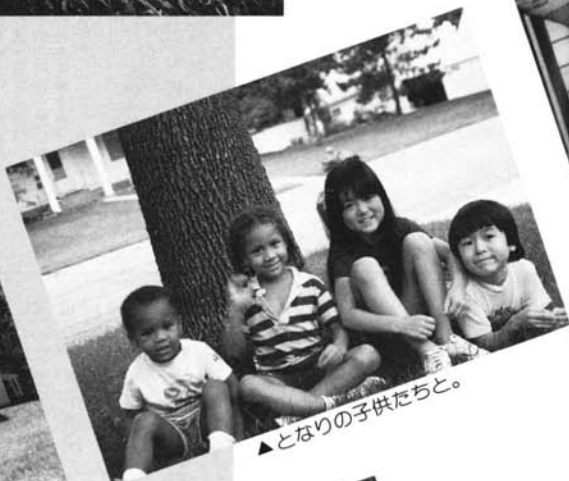
◀日曜日は長男の野球を見に行くことが多い。



▲モンゴメリと共にローラ・インガルス
の本も大好き。ミネソタではプラム・ク
リークの町ウオールナット・グローブか
ら車で2時間ほどのところに住んでいま
した。自然の美しさと厳しさを感じた3
年間でした。



▲フランス・エドワード島/パークコーナーにある
「銀の森」のモンゴメリの家。
「バットおじょうさん」のモデルになった家です。



▲となりの子供たちと。



▲友達が考えてくれた店のマーク。



▲ハローウィンの日に。

ひがしやま
東山書房

東京都中央区新川2-2-11-708
東京都右京区山ノ内大町5-3
03(3553)8358
05(841)9278



ティーンズボディQ&A
河野美代子 著
(広島・産婦人科医)

体の悩みにお答えします

・89エイボン 受賞
・女性教育賞

ベテラン婦人科医が、他人には相談しずらい「体」や「性」の悩みを誠実に答えます。ティーンはもちろん、父母・教師にも好評。性器/月経/産後/人工中絶/一環まぶたの手術/毛染/他*四六判/24頁*1300円(税込)

ティーンズボディQ&A

★好評6刷/

渥美雅子著 子どもは告発する

●雅子の事件簿から

いじめ、休学、家庭内暴力、リンチ、殺人、生命と宗教、女教師駆け落ち、チビッコ芸人、丸刈り訴訟、自死！



●弁護士としてかわった数々の事件から浮かびあがる真実は？
●2男の母としての子を想う熱い視線が、学校・管理社会を告発する。
*四六判/24頁*1650円(税込)



“人間と性”を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

[ヒューマン・セクシュアリティ]

●編集長 ●村瀬幸浩 ●
●企画編集 ●人間と性 教育研究協議会
●季刊 ●B5判・128頁 ●定価1400円(税込)

8号(新刊)《特集》性情報・性文化の現況と「表現の自由」と

編集長対談(ゲスト)奥平廣弘

(国際基督教大学教授・憲法学)

特集論文 性情報と性行動の心理……福島章

子どもの知る権利と性文化……増山均

●特集インタビュー レディース・コミックにみる

性表現……杉野美氏に聞く スウェーデンにおける

性表現……デューク王子氏に聞く

●特集レポート 広告ウォッチング……意識にの

びこむ性差別……岡久美子(フリーライター)

●特集ルポ 「有害コミック」規制問題をめぐって

三井高美代+草野いづみ(フリーライター)

●高校生の座談会(ホルノ・コミックをめぐって) 他

★その他 連載4 実践 海外レポート等誌面充実

7号 新教科書がもたらすもの

学校・家庭の性教育の新段階

6号 シルバーエイジの豊かな性と生

5号 ビル解禁を控え、いま避妊を問い直す

4号 エイズの現状と近未来

●直送定期購読者受付中 ●郵振 京都4-1067番
1年 5,600円 2年 11,200円(送料・税込みです)

母と子

8月号

定価三五〇円・千四六円

「自立」だけでは生きられない

視点の今月

- 子どもの自立・私の自立 池ヶ谷直美
- まともに「青春」しましょう 岡田なおこ
- 受験競争で身に付いてしまふもの 岡崎まさる
- 「人前になれ」という願い 稲垣勇一
- 人間にとって「自立」とは 山科三郎

不思議なPTA

「母と子」'92・9月臨増 定価一〇三〇円・千五六円

- PTAへの望み 青木一・永畑道子・山住正己
- 不思議なPTAの物語(七話) 後藤重三郎
- ある小学校PTAの一年 荻上菜子・沼田仁子
- PTAの民主化とは 宮坂広作・平湯一仁・芝実生子
- PTAに関するQ&A 徳永孝一・西村文夫・井上文雄・他

子どもの本っておもしろい

「母と子」'92・2月臨増・定価一〇三〇円・千五六円

父母からの問いかけ

「母と子」'91・9月臨増 定価一〇三〇円・千五六円

子どもと読む

「母と子」'91・1月臨増 定価一〇三〇円・千五六円

子どもの権利条約

千203 東久留米市中央町五-四-八
電話 〇四二四(七四)九二五

母と子社

特集

セックスレス夫婦



嫁から訴えられて

六十歳の姑

まがりなりにも私は彼女の姑である。民主主義の時代といっても彼女は私の息子の妻である。その嫁から自分の息子のセックスレスについての相談を受けるとは。

（しあわせを絵にかいたような夫婦）

息子とその妻との間には今三歳になる長男がいる。結婚して四年めに生まれた子である。

最初の一年間は彼女も結婚前の仕事を続けていた。そのとき息子は私に、自分の間子供ができないように、彼女は

ビールを飲んでいるとさうって言ってのけ、私のほうがドキッとしたことがあった。しかし、その後息子が転勤で二年間長野のほうへ行くことになり、彼女は仕事を辞めた。地方なので四LDKの二階家という杜宅での二人暮らしで、二度ほど訪ねた私の前に、専業主婦となった嫁はいつ母親になってもおかしくない世話女房ぶりであった。約束の二年はあっという間だった。東京へ帰ってくることになり、私たちの二階を改築して隣居という形で生活が始まった。

回りからそろそろ子供のことでもお世っかいが始めたであろうどそのとき、嫁の妊娠が分かった。一カ月ばかり早産だったからやや小振りだったが、元気な男の子がその年の暮れに誕生した。電車で一時間半ばかりの実家の両親にとっては初孫、私たちは外孫はすでに二人いたが、長男の初めての子供だったから、たくさんの人に祝福を受けてのおめでたであった。

しあわせを絵にかいたような二人だ

ったから、それから一年後にまさか嫁の口からセックスがない、という話を聞こうとは夢にも考えられなかった。



孫は生まれたときのハンディを見事に乗り切って元気に育ってくれた。ちやうどお誕生を少し過ぎたころであった。夕食の支度にちよっと間があるという夕方のことだった。

「おかあさん、これって少し変じゃありません?」「?」「ゆうべも彼と話し合ってたんだけど……」「?」思い切ったように彼女は話を続けた。

「〇〇が生まれてから、私たち一度もその一、セックスがないんです」

私は不意を食らって、何も言えなかった。何か言わなければいけない、という思いだけが広がり頭の中はあせるのだが、何もまとまってこないという混乱ぶりであった。

「えーっ、なんで」自分でもぶざまな反応であると情けない思いがするが、的確な言葉が見つからなかった。ただただ驚き、どうしていいのか分からなかった。

「最近そういう若者が増えてるって聞いていたけど、まさか△△がねー」なんてとんちんかん言葉しか出て来ないで頭の中は真っ白、我ながらうろたえているのが分かった。

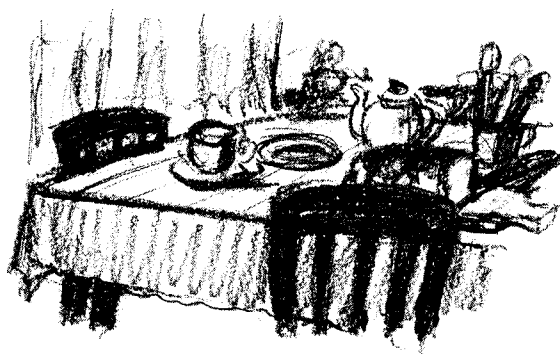
「それでゆうべも話したけど、全然話の手応えがなくて……」

「〇〇が生まれてから全然ないって言ったら、そうだったかなーってとぼけるんですよ。でもそれがほんとうに関心ないみたいで、言われて初めて気が付いたみたいなんです。これっておかし

いですよねー」

「へーっ、そう。よく分からないけど、それまではどうだったのかしら」と私もこの話からは逃げられない思いで、聞いてみようという気になってきた。

「私もよくは分からないけど、淡泊なほうだと思えます」「結婚した当初もごくたまにしかしていなかったと思います。だから妊娠もなかなかしなかったのだ



と思います」「きっとほかの人よりは少ないと思います」「彼はそういうことをあまりしたいと思わないって言うんです」「僕は君と子供がかわいいし好きだ。だけどセックスをしたいとは思わなくて」「それでもしも君がいやなら、逃げられても仕方がない。好きなようにしてくれて」「でも、もし君が出て行ったら、僕はもう一生結婚はしないだろうって。このままいてほしいと思うって。でもどうしてもいやだというなら、仕方がない。このままじゃいやと言われたら困るけど……って」

（薄氷を踏むような日々）

私は答えるすべを知らなかった。彼女に夫と相談したいけど、と許可を得て、その夜夫にも伝えた。彼もびっくりしていた。三十代前半の男盛りなのに考えられない、ということである。しかし、父親としての男の責任が大切、という点に問題を持って行ってしまい、しばらくは実家の両親に黙っていてほしい、と翌日嫁に話していた。嫁も了承、

自分も好きで一緒になった手前の意地もあり、今しばらくはこのままいたいということであった。

それからもう二年以上経つ。この間何回か二人で話し合つたらしいが、進展してはいないらしい。

途中で私は「子供じゃないんだから、女のほうからモーションかけたっていいんじゃないの」なんていう示唆を与えたりしているが、どうもそのままでということである。この間の話し合いの際、息子は妻を抱くよりも一人で射精したほうがまだいい、と言つたとか、あるときはカウンセリングへ行つたら変わるのかなーって言っていたとか、時々嫁は報告してくれる。

初めはただうろたえていたけれど、私は自分の子供へのひいきからか、一方的に男の問題と言つてしまうのもどうかと思うようになってきたのである。

理屈で妻に攻められては、できるものもできなくなってしまうのか、という懸念も湧くのである。もっと感情とか気持ちの交流があれば、とも嫁に

話すのだが、嫁はどうも言葉が通じないのだと言う。

従来心理学だったら、母親との関係が問題ということになりそうで、私も何となく自信がぐらついてきてしまつた。母子分離不全、マザコンなどの文字ばかり頭の中をよぎり、私も相当自分勝手だなーと反省したり、でも一瞬後にはこのままでまだ子供が小さいから嫁も子育てに紛れているけど、いつまでも続くはずはないだろう……、○
○だけでも生まれてよかった……、など色々浮かんでは消えてしまう。

性とは幻想に支えられている部分がある。科学的に割り切つたり客観的に見たらばおかしいしあるいはグロテスクなものかもしれない。しかし、自分の持つ幻想やイメージの助けを借りてこそ、二人だけの世界が成り立っているのだと思う。

息子は職業が医師である。これは異性の裸に幻想が持ちにくいということもあるかもしれないが、医者をしていても多くの夫婦はうまくいっているし、

中には女道楽に走るヤツもいる。

息子が休日に趣味にのめりこんでいることも問題かもしれない。山歩きが学生時代からの趣味で、暇があれば近郊の山へこもっている。子供のないころは彼女と一緒にいて行っていたが、体力の差もあり、だんだんと一人で出掛けることが多くなつていった。しかし仕事や趣味に夢中であっても家庭は家庭というのが一般の男たちのやり方であろう。やはり二階の夫婦二人の間には難しい何かがあるのだ。

息子は子守当番の日には、肩ぐるまをして近くの公園に出掛けたり、とも子供にはまめめめしいパパぶりである。





幼稚園の送り迎え、生協活動など、嫁は今は走り回っている。結局彼女の選択次第ということになるのであろうか。外見では子供もいて、平凡な夫婦に見えるに違いない。

私たちが彼らのセックスレスを知っていることを息子はまだ知らない。今のところ嫁と私たち夫婦の三人の秘密である。いつまでこのままか、薄氷の上を歩いている日々である。

エロスの消えた後

匿名

（結婚したとたん）

この人と一緒になれなければ死んでもいいとさえ思った。そこまで思いつめて結婚した夫との間に秋風が吹き始めたのはいつからだろう。

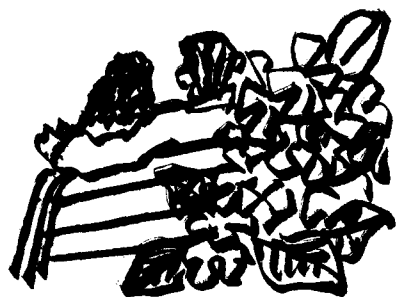
決して嫌いなわけではない。何か不満があるわけでもない。お互い悪い人間でもない。そもそも悪い人間なんて、そんなにいるものではない。それなのに恋人だったころのあの情熱や感動、ときめきがどこを探しても見付からない。おそらくそれは婚姻届けを区役所に出

したその日から始まっていたのだろう。もう外でデートする必要もない、親に隠れて連れ込みホテルに行く必要もない、その日のうちに別々の家に帰る必要もない、忙しくて会えない寂しさに泣く必要もない、これからはいつでもこの人と一緒にいられる。セックスだって、したいときにできる。しかも天下晴れて。そう思ってた瞬間、すでに倦怠が忍び込んでいたのだ。

結婚したその年はつわりで苦しみ、翌年子供が生まれた。夢中で子供を育てた。疲れてどうしようもなかったし、久しぶりのセックスは痛いだけだった。それでも私たち夫婦の絆は徐々に深まっていた。友情、信頼、尊敬、感謝、ときに「愛」という言葉で表現してもよいほどの密接なつながり。話しているとも楽しいし、二人で子供を育てているという連帯感は何物にもかえがたかった。

それは今でも変わらない。それなのに、それに比例するかのようにならなくなる欲望が減退していくのがわかった。

なんとかしなければと焦ったがどうすることもできなかった。きつと育児で疲れているのだと、自分をこまかくきとってきたのだから、私にははつきりとわかっていた。この人に対する恋心は確実に下降線をたどっている、と。相手が本当に好きな男なら、疲れていようが、痛がろうがでできるはずである。年月は人間に「忘却」という素晴らしい贈物をくれるかわりに、「倦怠」という残忍なおまけもつけてくれるのだ。



結婚五年目に私は他の男に恋をした。恋とはどういうものであるかよくわかっていたから、それが恋であることは明白だった。突然降って湧いたように訪れた恋。行動をつつしむことはできなかった。自分の心を縛ることはできなかった。不思議なもので肉体関係があろうとなかろうと、恋心を抱いた瞬間、その人に対して肉体的欲望を感じるものだ。そして相手が夫以外の人であれば、それはすでに「不倫」である。その人の目を見て話すと、私の体は熱くなった。陳腐な表現であるが、それ以外に何と言ってよいかわからない。夫と体を重ねているときにも、その人のイメージが脳裏をかすめる。と言うより、そのイメージを追いかけないことには、夫を受け入れることすらできなくなっていた。これは完全に不倫だ。その人とは半年交際し、苦しさに耐えきれなくなって会うのをやめた。私はつくづく思った。結婚生活とは、情熱の火をできるだけ長く絶やさないうようにする、たゆまぬ努力の積み重ね

であると。新たに火を焚き付けるマッチはない。不幸にして火が消えてしまったなら、その燃えがらを拾い集めて別の何かをせっせと作り上げるといって、地味でつらい作業が待っている。

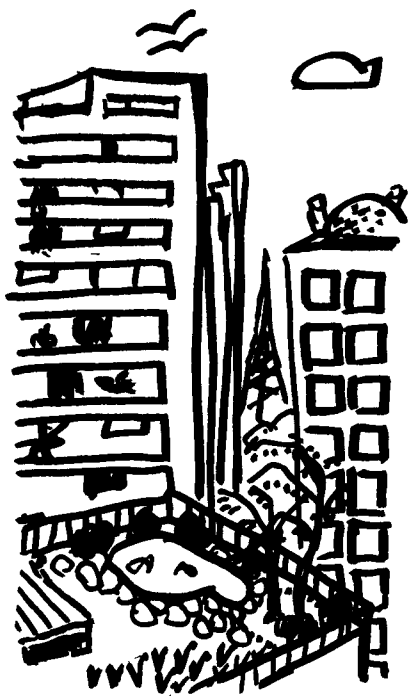
五年目に恋をするまでは、まだ夫に對する火はかすかではあるがともっていた。恋をしている最中は、あるいは罪悪感からかもしれないが、夫を受け入れることができた。これが小説であれば、恋人と別れた後、夫のよさを見直して、「ああ、これでよかった」とハッピーエンドになるところなのだろう。しかし現実とは違った。恋人を失ってから、むしろ本当の苦しみが始まったのである。恋のない生活。何と味気ない日々。もう一生恋をすることも、好きな男とセックスすることもないのだろうか。

（夫にだけは燃えない）

私の三十代、女盛りはこんな色褪せた状態で始まった。「女盛り」がどういうものか、言葉ではある程度わかって

いたが、自分がその年になってみて初めて「ああ、これか」と思った。

自分の中にある欲望は全然衰えていない、むしろ二十代よりも深まっている。それなのに、その欲望が夫に対してだけはまったく湧き起らないのだ。むしろ夫には肉体的な嫌悪感すら抱い



てしまう。夫は優しく、理解があつて、誰がみても非の打ちどころのない人だ。私にとっては、性的魅力以外のすべての魅力を備えていると言える。何気な

く友達に言うと、「それはぜいたくよ。相手のよいところを見なければ」という答えしか返ってこない。「ご主人に恋をすればいいじゃない」と言う人もいた。これは私にはほんとうに不思議な言葉だ。誰もみな、相手が申し分ない人であれば、そしてそれが公認の人で

あれば、必ずその人に欲望を感じるものなのだろうか。性欲とはそんなに計算的なものなのか。恋とはそうやって自分でコントロールできるものなのか。

夫に性的欲望が感じられなくなったとき、努力さえすれば元に戻るものなのか。そうであれば、その努力とは具体的にどういうものなのか。

私は三十代の初め、考えられる努力はすべてしてみた。自分で自分に「夫のよいところ」を言い聞かせてみた。言い聞かせるまでもなく、夫のよいところは他の誰よりも私が知っていたのであるが。

ときには外でデートもした。「いのちの電話」に相談もした。子供を親に預けて二人で旅行もした。プレゼントの交換、おしゃれ、話し合い。本もたくさん読んだ。こんなに努力する人も珍しいのではないかと思うほど、ありとあらゆる努力をした。一年間、毎週一回、セラピーにも通った。「夫を愛せない」と、毎回つぶやいた。そのうち自分が少しづつ見えてきたような気がした。性愛だけがすべてではないと思い始め、それと同時にもう一人子供が欲しいとさえ思うようになった。不安定な私を支えてくれるのは、安定した「家

庭」しかない。

そのとき、八年ぶりに自分から夫を求めた。たった一度だけ。けれどもそれはあくまでも「生殖」の欲望だった。そして二人目を身ごもると、また元の状態に戻ってしまった。

あれから四年。私は結婚十四年目に入る。結局三十歳のときから「恋」をしていない。そして激しい欲望を伴うセックスもしていない。もはや私にはセックスの対象となる人はいない。できるだけ他の男を見ないようにしているのだ。結婚する前は「恋」のない人生なんて考えられなかったというのに。けれど、決して自分の中に欲望がないわけではないことを、私はよく知っている。ときには欲求不満に苦しむこともある。「この人なら」と思える人に巡り会ってしまうこともある。私は人よりも多情なのだろう。

それなのに、夫に対してだけは、どうしても体を開くことができない。これ以上私はいかなる努力も、もはやできない。まったく欲望を伴わない性生

活を営みながら、私はひそかに涙を流す。私はもう、女としての悦楽を享受することは、絶対に許されないのだと。「もっと不幸な人もいるのに、あなたはぜいたくだ」とか「もっと夫のことを考えてあげなければ」とかいった、道徳的説教はもう聞きたくない。そんなふうにして、消えた恋心が戻ってくるというのなら、私は誰よりも早く幸せを取り戻せたはずである。

（あきらめの日々）

日本は法律によって、一夫一婦制が正しいとされている。私は婚姻届けを出した時点で、この法律を遵守することを誓った。法律の恩恵を被る道を選んだとも言える。夫とのセックスに飽きたからといって、婚姻継続中にその対象を外に求めることは「法的に」許されない。セックスのためだけに離婚するには、もはや抱え込んだものが、それゆえ犠牲にするものが大きすぎる。私の問題はもはや「道徳」ではなく、むしろ「法律」なのかもしれない。



三十八歳。枯れるにはまだ早いこの年で私はすっかりあきらめてしまった。おそろくこのまま欲望を抑えつけながら、それがすっかりなくなってしまう日まで、「一番欲しいものが手に入らない」というのも、まあ、いいか」とつぶやきながら、安定した、充実した、そしてまったく無機的な日々を送ることになるだろう。

エロスのなくなった家庭。外から見ると、人はこれを称して「幸福」と呼ぶんだろうな、とまるで他人ごとのように考える。

私たちは、おとう さんとおかあさん

匿名

私と夫は結婚してまもなく六年になる。いつからだろうか。月のうち生理を迎えている五日間、ほっとするようになったのは。その間は、言い訳をしなくても、セックスをする必要がない。

（いつからこうなったのか）

これはまずいことだと分かっている。結婚生活はまだまだこれからだ。ここ一、二年気にはなっていたが考えることを避けてきた。セックスっていうと、なぜか後ろ向きになってしまう。人間

として当然の行為なのに恥ずかしいことのように思えて、見つめることができない。今回ちよいどいい機会だと思ふ。書くことにより自分の心の中を探ってみよう。どうしてこうなってしまったのか。

私と夫は結婚する以前からセックスをする関係にあった。私はもともとセックスが嫌いではなかった。二週間に一度くらいの割合で行ない、心が暖まるすてきな行為だと考えていたような気がする。

結婚をした。当時、夫は二十七歳。その年齢のせいかわセックスは毎晩するものだと思っていたようだ。私は少し重荷だった。いや、というほどではなかったが、義務なのかな、と不満に思える日もあった。夫は毎晩早く帰ってくるわけではないのだ。深夜になる日も少なくなかった。

やがて第一子をみごもった。すぐに激しいつわりに襲われた。さすがにセックスどころではなかった。しかしつわりが終わりに差し掛かったころ、夫は

求めてきた。

今度ははつきり、いやだった。お腹の中の赤ちゃんに危険を及ぼすような気がした。お腹が大きくなるに従い、夫も強要はしなくなったのだが。今考えてみるとあのとき赤ちゃんが心配だっただけではいかもしれない。私はもともと自意識過剰な人間である。妊婦の大きなお腹を夫に見られることに屈辱のようなものを感じていたようにも思う。あのころはまだ結婚して月日も浅かったため、なかなか言いたいことがダイレクトに言えない自分だった。

子供が生まれた。夫はやっとお腹の中の危険物がいなくなったと喜んだ。しかし私は産後三カ月近くなってもなお傷口が開きそうで怖かった。初めての育児に疲れ、夜も少しでも早く眠りたかった。早く寝ないと、すぐに授乳の時間になってしまう。赤ん坊は昼夜構うことなく、三時間おきに乳をせがむのだ。

私の態度のせいかわ、新婚でなくなっただけかわ、毎晩ということではなかった

が週末になると誘ってきた。私は完全に受け身の態勢になっていた。夫婦間で出来上がった態勢である。

私がセックスをしたい気分のおかげで稀だったろうが、そのころはまだあったように思う。しかし態勢が出来上がっているとやっかいなものである。こちらから誘うのはなかなか勇気がいる。しかも先ほども述べたように私は人一倍自意識の強い人間なのだ。自分から雰囲気をつくるのは難しいことだった。そうするといよいよ私にとってセックスは義務でしかない。自分のしたいときにはできなくて、相手のしたいときにだけするのだから。

何とか毎晩が過ぎていった。二番目の子供も生まれた。相変わらず夫は週に一度くらいは誘ってくる。私のほうは義務感がますます積み重なり義務以外の何物でもないほどになっている。

二人の子供を生むと私も結構強くなる。言いたいことは口にする。誘ってくるたびにいやそうな素振りを見せるのだから、夫もいい気持ちにするわけ

がない。

口論となることもある。しかし最後のところで私が折れた。どうしてもセックスを受け入れられないのなら、それは離婚問題にまでつながることだと思ふから。そんな気はない。夫のことが嫌いになったわけではないのだから。が、今ここで夫を愛しているかと問われると答えに詰まってしまう。自分の気持ちに分からない。夫は同じ質問をされたなら即答してくれるのだろうか。

（貧しすぎる現実）

今の状態でいいと思っているわけ



はない。ときには申し訳がないような気がして夫が誘ってきたとき、その気があるふりをするときもある。結婚する前のように心を暖めてくれる行為とならないか。自分なりに努力することもある。が、そんなときにかぎって現実に引き戻される。寝室に問題がある。六畳間に親子四人が三つの布団で寝ているのである。子供はだれに似たのか二人ともすごい寝相である。その合間をぬって夫と向き合わなければならない。

どうにかスタートしてもそこに転がってやることもある。目を開けると夫

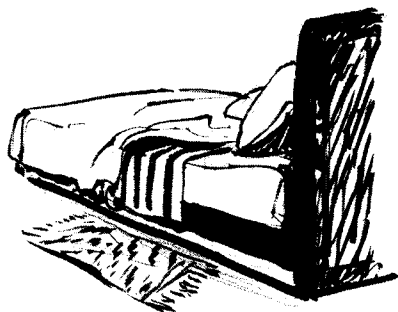
の顔の代わりに息子の顔がある。あるいは、私の脇腹をまさぐる手が夫のではなく娘の手であったりする。思い出しただけのため息がもれてしまう。もっとひどいのは、ここっていうところで子供が目を覚ましむくっときき上がる。どうにかことを終えても、腕枕でゆっくり話すこともない。やっと話題を見つけたとしても必ず子供のことがある。そういえば結婚前、私はセックスそのものよりも、その後に腕枕でたわいもないことを話すことが好きだった。

結婚して六年。恋愛時代のままでいられるわけもない。日常生活は現実そのもので、夢の世界ではないのだ。夫のすてきな部分よりおじんくさいところが目立ってくる。反対に夫にだって私のおばんくさいところが目についているにちがいない。当然のことだろう。せめてセックスするときだけでも恋人同士のようにすてきな男と女に戻れないものだろうか。可能かもしれない。書いているうちに少し見えてきた気

がする。セックスを楽しむためには、おとうさんとおかあさんではだめなのだ。セックスは男と女が行なうものなのだ。まずは子供たちと寝室を分ける必要があるだろう。まだまだ何十年も続く夫婦生活である。夫を愛しているんだ、愛されているんだ、と実感をもってすてきなセックスを積み重ねていくことができれば……幸せだろう。少なくとも生理がくるたびに、ほっとしているよりは数倍！ それともう一つ！ 二人の子供を生んだ私の体を何とかしなければ。

独身時代はスタイルのいい女だったのだ。見られて屈辱を感じてしまう体から、見せたい体に戻したいものである。言っておくが、屈辱を感じるというのは男に対する恥じらいとはまったく違う。それどころかこんな体型になったのはおまえのせいだぞ。と、いうような恨みが潜んでいるのかもしれない。今の私、夫を男と思っていない。こちらが思っていないのだから向こうだって私を女とは思っていないだろう。

おとうさんとおかあさんでしかない私たちが、セックスを楽しむわけがなかった。子供も随分手がかからなくなってきた。まずは私が女に戻ろう。そうすれば刺激されて夫も男に戻ってくれるかもしれない。夫が拒まれても拒まれても、私とのセックスに興味をなくさないでいてくれたことに感謝し



なければいけないのかもしれない。セックスレス夫婦なんてやっぱり変だと思ふ。

セックスレスは 悲喜劇の始まり

匿名

（二十二歳の激しい青春）

夫と別居して二カ月が過ぎた。別居の表向きの理由は夫に愛人ができたからである。しかしほんとうの理由は、まぎれもなくセックスレス。お互いのセックスに対する価値観の違いが大きい。夫に愛人ができるなんて、よっぽど長い間奥さんが拒み続けてきたのねえなんて言われそうだが、まるっきり逆である。

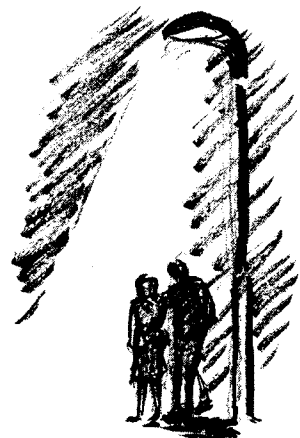
夫はその地域では名のある資産家の一人息子で、典型的なブライドの高い

わがままな、それでいて外づらはおとなしく良い人ねといった評価の人間で、私はといえばざっくばらんで調子がよく、たいいてい人の輪の中心でわあわあやっているタイプである。

そんなふたりが知り合ったのは十一年以上になる。当時私は四年制大学に通いながら、妻ある男性とのドラマのような恋に酔っていた。初めての大人の恋は強烈で、「三百万あれば女房と別れられる」との言葉を盲目的に信じこみ、金のために私は夜の仕事をアルバイトに選んだ。そのクラブに客として通っていたのが今の夫である。

私の毎日は華やかだった。熱く燃える恋もあり、チャホヤしてくれるたっさんの男性ができ、昼間のキャンパスもそれなりに充実していた。若くて、自信にあふれて、怖いものなど何もなくたつた。

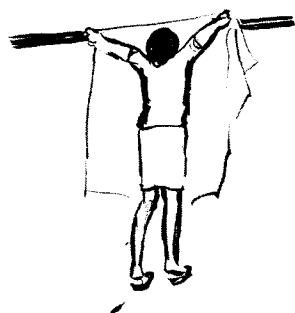
しかし私は少しずつ疲れていった。恋もセックスも火の玉のようにつつ走っていく日々に息が切れ始めた。客とホステスという関係だった夫を、個人



的な目で見えるようになった。夫は私より九歳年上の二十八歳だった。若いながら金遣いが非常にきれいで、ガツガツしたところがまったくない。

そのぬるま湯のような存在は、何年間かを激しく生きすぎた私にとって心地よく、目の当たりにした金銭的な豊かさも手伝って、結婚という選択を決意させた。出会ってから三年後、二十二歳の初夏だった。

夫の持つ生活環境は平凡とは言えなかった。資産家とはいえ、夫は実子ではなく、跡継ぎに恵まれないその家に赤ん坊のとき養子として来て以来、「お



家のため」といった感覚で育てられていた。

地代やテナントの賃料で生活は不自由なく、「無職」という立派な肩書きでもまかり通っている。

遊んで暮らせるのは結構なことだが、私のポリシーには反した。夫と相談し、自宅の敷地の一面に喫茶店を建て、ふたりで経営し始めた。忙しいながらも楽しい新婚生活が毎日続いた。

昼間も夜もふたりはずっと一緒にいる。食事もお風呂もベッドもスレ違いの時間などまったくない。夫の優しい人あたりと私の明るさで店も繁盛していた。ただ一つ、微妙にかつ重要な（後から気付いたことだが）ズレがあった。

セックスの不一致である。

【私を放つといて他の女と】

結婚イコールセックスではないと思う。しかし私にとってのセックスは、ときめきや安らぎの得られる大切な行為だ。火の玉のような何年間かで、私はセックスのすばらしさを多少なりとも知った。もちろん夫とのセックスにも喜び、安心、未来というものがあつた。それにしても夫のセックスは淡泊で、私もそれは一つの個性と納得していたが、欲を言えば優しさの中に激しさもほしい。五官をフルに使うセックス。相手の目、息遣い、ぬくもり、力強さ。そういうセックスで感じてきた私に、夫とのセックスは「こんなものかなあ」という割り切れなさを残す。

だが私はその感情を夫に見せることはできなかった。満足という演技と引き換えに、生活の安定を得られることを、どこかで知っていたからだ。夫婦としての安定を保ちながら、二年後長男が生まれた。

私は初めての子育てに追われるようになった。母としての喜びは大きい。女としての自分など忘れてしまいそうになる。そんな日々の中で、女に還る貴重なときがセックスだった。しかし夫はだんだんと求めてこなくなった。私は焦った。単に快楽を得られなくなったというより、男と女にとって大切なコミュニケーションの手段である（と思う）セックスから遠ざかっていく結婚生活が不安だったのだ。だがあからさまにそれを話題にはできない。

一人で悩んでどうにかなるものではないが、それでも私は悩んだ。待ってばかりではどうにもならないと悟ると、自分から求めた。夫は一応はその気になってくれるが、以前にも増して弱々しいそのセックスに、私はとうてい満足を得られなくなっていた。夫が離れ、寝息をたてるのを待って、私は自分で自分を慰めた。情けないやら、恥ずかしいやら、夫にも自分にも腹が立った。それでもなお求め続けて、次男を妊娠、出産した。結婚五年目のことである。

それ以降、私たちはセックスレス夫婦となった。

夫は決して身体的インポテンツではない。それなのになぜ、セックスを求めないのか？ 私のことが嫌いというわけでもないらしい。私の悩みは深まっていた。

世の中はバブル経済とやらがまかり通り、夫は働かずとも、倍々ゲームで資産は増えていく。それなりの人間たちがもみ手をして寄ってくる。

夫の夜遊びは再燃し、私が気付いたときには、愛人と呼ばれる女性のためにマンションを用意して数カ月が経っていた。私のショックは大きかった。足元がグラグラ揺れ、「なぜなの？」という言葉が反復されるばかりだ。夫が精力絶倫で、私だけではもの足りないというならまだ救われる。（それだって許されるものではないが）私をさんざん放つとして、他の女と何やってんのよ。バカにしないで！。とにかく夫に絶望という心境だ。

しばらくは悲嘆にくれた。自分の身

のもっていき場がないのだ。若くてきれいで華やかだった私が、今は三十の声を聞こうとし、来る日も来る日も子供のウンチを洗い、ぬくもりも安らぎもあきらめて、ただ金だけもらって年とっていけつていうのかよーと半年間、心の中で叫び続け、とうとう私は若い男と恋を楽しみ始めた。

乾いていた心と体は、素直に新しい恋に解けていく。泣いたカラスがもう笑うで、私はおしゃれをし、街に出掛け、お酒を飲んだ。その恋を夫に対し、ひた隠しにしようとも思わなかった。バレたって何だっていいや……と完全な開き直りである。むしろ私はあからさまになったときの夫の反応が楽しみだった。ほどなく夫は気付いたようだが、何も言わない。自分は自分で夜ごと愛人宅へ出掛けていく。夫婦バラバラなんてもんじゃない。もう悲劇を通り越して喜劇である。

ダブル不倫ゲームを半年続けて、とうとう私のほうが根負けした。家を出て行くという私の主張に夫は賛成して

くれた。お金まで出してくれるという。何とありがたく、おめでない人だろう。しかしそれは夫婦にとってやはり一大事。私たちは何度も話し合いを続けた。回を重ねるたびに、私は少しずつ、私たち夫婦を見つめなおすこととなった。

（互いの求めるものはすれ違い）

夫は言う。「セックスなんて下卑た人間のやることだ」と……。「俺はセックスが嫌いだ。だからそういうこと抜きに甘えられる年上の女がいいんだ」と……。しかしその言葉を、私は夫の本心とは思わない。それは夫の私に対するコンプレックスに裏打ちされたものではないかと思う。

自分を自慢するつもりはないが（下卑た人間と言われながら）世間の私についての評判はすこぶるよかった。夫は耳にタコができるほど「いい奥さんがいてうらやましい」と言われ続けたようだ。しかしこのいい奥さんがくせ者で、売れっ子女優と下り坂の亭主みたいな構図になってしまい、プライド

の高い夫は我慢ならなかったのではないだろうか。ましてや男として最後のトリデともいえるセックスにおいても、妻はかわいいどころか、どこかえげつない。そしてまた、何ごとにもガツガツと欲張りに上を狙う私に、坊ちゃん育ちで求めずとも与えられてきた夫は、初めこそその珍しく新鮮だったかもしれないが、やがて重荷を感じるようになったのではないか。

そう、夫は資産家に養子として来て以来、今日まで求めずとも与えられてきた人なのだ。金が金を生み、人を集め、信頼も、約束も、いい奥さんすら与えてくれたのだ。何ごととも求めない。だからセックスも求めない。むこうから与えてくれるのなら受け取るが、自分からは求めない。

夫のプライドは「求めたくても、求め方が分からない」といふ言葉で許さない。だから「下卑た行為」というオブラートで本心を包む。いや私が「下卑た行為」というセリフを本心とは思いたくないだけかもしれないが……。

私たちの悲喜劇は別居という形をもって、未だに続いている。セックスが苦痛な夫と、セックスストレスが苦痛の妻。もう一度私たちが夫婦として暮らすとしたら、互いの求めるものの抛りどころをどこへ探せばいいのか。

親切で波風を乗り越えてきた女性たちはしたり顔で私に言う。「だいじょうぶよ。男も四十過ぎるとあつちのほうも弱くなるから。奥さんはどーんと構えてればいいの」と……。違うんだよ、ホントはあつちのほうをしっかりと求めてほしかったんだよ……のセリフを飲みこんで、あいまいに笑う私。



若い彼の腕の中で、自分で自分を慰めていた何年間かがふとよぎる。ここには暖かいぬくもりと喜びがある。しかしこれが長くは続かないであろうことを私は知っている。また一つ苦しみを増やすだけの私。もう一度夫のもとへ戻れば、お金持ちの奥様の座が待っている。何不自由ない暮らしが広がっている。

いや、たった一つ不自由なものがあった。微妙でかつ重要で、だれにも言えない不自由があった。「セックスよ、さようなら」そう言える日が来るのか、来ないのか、私はまだ迷っている。

軽蔑と嫌悪と の中で

東京都小金井市
藤沢照子(60歳)

結婚というものは、まだ若く人生体験希薄だからできる行為だろうか。あるいは結婚しなければと強迫観念を意識下に持っていたせいだろうか。

若い女性は、職場や友人関係の中で、多数の異性の友人を持つ。文学や哲学を論じ、演劇や音楽を楽しみ、男性は同性とはまた違う感性や、考え方を教えてくれた。結婚したとたん、実際の自由度がなくなつて、儀礼的な形になつてしまったことにショックを受けた。

一九六〇年代、女の自立も、結婚観も風に揺れる章のようにたよりなく、男

は毫も変わらうとしていなかった。物質的なよい生活への志向が、キラキラと社会に溢れていた時代だった。

年の違う夫は、私をまるで掌中の珠のように、べたべたとかわいがった。新婚旅行の途次ちよつとお腹を痛くすると、むやみに心配して途中下車して、駅長室へ行き、薬をもらつてくるなんてことをする。少し食べすぎただけなのに。

（女と男のずれは大きい）

セックスも愛の表現と思つていたのだろうか、妻となつたばかりの若い女には、過剰な迫り方をする。出張が多く、突然昼間帰つてくると、寂しかったらうと抱きしめる。部屋を閉め切つて、冷房など一般的でなかったころの夏の暑い日などたまらない思いがした。家にいるときはいつも毎晩、そして朝起きようとするとときにまたと驚くべき精力家だった。私は次第に心が重くなつた。一日の始まりは、さわやかにきびきびと始めたかった。自分の体が、ぬ

るぬるとべとついた膜に覆われているようで嫌悪感がつのる。

仕事にも地位にも自信があふれ、油が乗り切つた男の魅力にあふれている



と思つていた夫が、仕事以外のことは何も知らないということを知るのに時間はかからなかった。妻が人間として自分と深いレベルでのかかわり合いを求めているとは夢にも思わなかったにちがいない。

出張先からみやげを抱えて帰り、どこよりもご馳走と私の手料理を喜んで食べ、私の友人が遊びに来ると、手一杯歓迎する。子供が生まれると、母そのけに面倒を見る。優しいよい夫だった。しかし、家事育児に追われる若い妻は寂しい。家庭を大切にしたい。やることは一杯ある。かつてのように異性を交えたグループで、夜を徹して論じ合うことも、仕事をするともなくなつた。そのぶん、ただ一人の異性である夫が、何を思い、何を考えているのかとことん話し合いたかつた。しかし夫は表面的なかかわりに満足し、意見が合わなくても、手取り早くセックスで結論づけるのを常とした。世の中でセックスが嫌いな人がいるとは、夫には想像できなかったにちがいない。「一日の最後の務め」と堪えようとしてゐる妻の心が分かるはずもない。そして私も、相手の気持ちをじっくりと聞き出し、受けとめる深さも、技術も知らなかつた。

新しい生命が、体の中で育っていく



のを知つたときの感動は鮮烈である。この子を大切にしたいと熱い思いに満ちていた私は、はっきりと夫の要求を拒んだ。「ばかだなあ、いろんな方法があるんだよ」と夫はお腹の赤ちゃんを圧迫しないでと叫ぶ私を、四つんばいにさせて背後から迫ってくる。私は涙をにじませていた。

三年後、年子で生まれた二人の子の養育に追われているとき、夫は脱サラして事業を始めた。いかに世が高度成長期の中にあるといつても、大企業の傘の中にいた人が簡単に成功するほど世の中甘くはない。たちまち失敗し、家は借金のかたに取られて住むところもなくなつた。残務整理のための夫を残

して、私は子供と、解放感とともに熊本の実家に帰つた。

体と体は触れ合っている、心と心は離ればなれの生活を送っていた私は、はっきりと自立の道を求めようと決心していた。熊本の実家では、すぐ近くに住む姉や妹の子供たちはみな年が近く、よい遊び相手、私の母も元氣であつたので、のびのびと子育てができた。午前中は栄養学を学ぶため学校へ行き、夕方から夜中までレストランの調理場で私が働いていても、子供たちは楽しそうだった。

（元氣のなくなつた夫）

主人は、昔の上司の世話でもとの会社の熊本支店の囑託となつてやつて来た。実家を建て増してまた家族の顔がそろふ。妻が働いて家計を支える。それは仕事に失敗した夫の大きな目であつたかもしれない。女に働かせるのは男の恥とする夫の悩み、かなしみをきちんと向き合つて話し合う努力を私はしなかつた。「生活ってだれが支えて

もいいの。男だからって肩ひじ張ることないでしょう」と私は帰りが遅いのを意に介しなかった。

一日の仕事に心身ともに疲れて「今日はだめ」と背を向けると、彼は何も言わなくなった。急に年をとってほんとうに何も言わなくなった。

三年後、私は資格をとって、料理学校の教師になった。夫は東京の子会社に転出して、単身赴任した。仕事、子供の学校、地域活動など、ふるさとでの人間関係は緊密で、私は共に行くのを拒んだのである。しかし子煩悩な夫のことはやはり気になる。回りの人への体面もある。一年後、上京して一緒にになった。

五年近くも私たちはセックスのない夫婦だった。すっかり様変わりした夫



婦生活も、私が働くということ、意識的にせよ、無意識的にせよ相手との間に距離をおき、それによって危機を回避してきたことが多い。夫と心の触れ合うことを避けてきたのだろうか。

性生活が頻繁であったときは、夫のほうから心の触れ合いを逃れるための手段にしていたのではないか。動物的な行為の中に、自我を放棄し、人間の弱みをさらけ出す。自分の恥部がそのままの姿で受け入れられ、その恥部を持つ私が愛されているという信頼感が持てたなら、心の構え、体の構えがとれて、性生活は喜びとなったであろうものを……。私にとって、性生活は、夫との間に親密感を増すごころか、愛情の代わりに軽蔑心を生み出し、親しさの代わりに嫌悪感を生み出すものだった。

年齢の差からくる時代感覚のずれ、感性の違い、とり残されていく男の悲哀、孤独さを受けとめることのできなかった私の心の狭量さ。ついに、二人の人間関係を深めることはできなかった。

夫が死んで、二年近い月日が経つ。

セックスと自立

匿名

（それでも私は不満ではない）

私たち夫婦は結婚七年。下の子の妊娠が分かってからセックスをしなくなつて、二年半以上になる。

夫婦仲はよい。けんかもほとんどしないし、深い話や議論もよくする。特に夫はおしゃべりで、外であったことは、女性関係も含めてほとんど隠しごとはないだろうというほどよく話す。親友といってもいいほどだ。

なぜ夫と性的関係が持てないのか自分でもよく分からない。セックスをい

やらしいものと嫌悪しているわけではない。夫婦の大切なコミュニケーションだと思う。彼とはもう男と女というより友達や家族で、お父さんや兄弟とはセックスできないのと同じ感覚なのかもしれない。また、彼の女性蔑視的な考えがいやなのかもしれない。

もともと大恋愛の末の結婚ではなかった。地方から上京していた彼、家がいやで飛び出してきた私、共に自活しながら専門学校に通っていた。付き合っていくうちに半同棲、同棲となり、私の卒業を待って籍を入れた。

「飯炊き、洗濯女」の欲しい男と家に帰りたくない女は、お互いの利害が一致してそうだった。夫は私に機能性を求め「髪は短く」「丈夫でいろ」と公言し、風邪などひいて寝込むと怒った。新婚当初は共働きだったが、そのときから家事に協力してくれることはなかった。子供が生まれてからは「飯炊き洗濯女に加えて、子育てばあだ」と言っただけで、はばからなかった。

誕生日やクリスマスにプレゼントし

てくれることも、日にちを覚えていないことすらも稀だった。

友達にそんな夫婦の日常を話すと、みな目を丸くするが、私にとってはさして不満の種ではなかった。家事は、手抜きが上手だったので苦にならなかったし、夫が私に無関心ということは束縛がなくてとても居心地がよかった。

結婚前から夫は「女遊びをする」、つまり私以外の人もセックスすると宣言し、実際に実行され、よく私に「この間の女はよく締まった」などと様子を話した。「男なんてみんなすけべなんだから。いい女を見れば一発やりたいたいとか考えないんだ」だから、外で女の人を買ったり浮気をしたりするのは、しょうがないことらしい。

「好きだねえ」と半ば呆れつつ話を聞くものの、怒りは感じなかった。ただ「愛人をつくるんだったら、自分の甲斐性を考えなよ。自分の家庭を壊してまで女にうつつをぬかしてたら、自分が惨めだよ」と話していたし、実際そう思っていた。

知り合った当時、私は十八歳、夫は二十二歳。初めて付き合う男性に最初から「男とはこういうものだ」と教え込まれたのを素直に吸収してしまったのかもしれない。だから、夫の女関係のことで腹が立ったことはない。ただ、夫の考える男女関係、セックス観はなんとなく淋しい気がしていた。

私が夫に処女の体を許したのは、今思うと、若さからの好奇心と「結婚するからいいか」という意識からだだったと思う。その後は生殖のためのセックスだった。

世の中の性風俗や浮気の氾濫をみると夫の説は当たっているような気がする。確かに男の性の中には、夫の言うような「男はやりたいたいだけ」といった本能もあるのかもしれない。

（心の中にはやはり重い石が）

しかし、セックスの基本は愛だと信じていた。私は過去、恋愛経験といった夫とのことしかない。小説や映画の中では、男性も女性も心を震わす恋愛

をしているが、「男の人も恋をする」とか女性が「抱かれない」という気持ちになるというのは、理屈では分かっているものの、私には実感がなく「へー。そうなんだ」という域を脱しない。そんな私が言う理想論にしかならないが「セックスは愛情あつてのもの」と思っている。

今まで「したくない」という私の一方的な意見が、多くは冗談めかして、と



きには険悪になりそうながらもなんとか通ってきた。「そんなことしなくなつて仲良しでしょ」とか「あたしなんか相手にしないで、早く愛人つくれば」と言つて。

しかしそれは根本的な話し合いではなく、その場その場を「臭いものに蓋」的に逃げてきたにすぎず、お互いにセックスに対する考えをきちんと話し合つたことはない。夫は白黒はっきりしないと気のすまない性格で、人の心の機微など「うじうじしたことを考えるのは大嫌い（本人談）」な人だったから、私がどうしてできなくなつたかという微妙な問題にはまるで関心ないようだった。

一度私が拒否して夫を怒らせたことがあつた。そのとき「嫌いじゃないんだけどする気になれない」と話したのを納得してもらえたので、もう求められないとほつとしていたら、それはこちらの独り合点で、二、三日後にまた誘いがあつてがっかりした。

いつかはきちんと話さなくてはならないと思いつつ、それが恐かつた。その問題を掘り下げて考えることを避けてきた。いつもなるべく考えないようにしていた。考えたくなかつた。

しかし、何が恐いのだろう。夫婦げ

んかか、離婚か。いや私は離婚に対する偏見はないはず。むしろ苦痛な結婚生活よりずっとよいと思つている。では何が？ たぶん、とりあえず表面上安定して居心地のよい今の生活が変わることが、恐かつたのではないだろうか。

気持ちを切り替えようと思つた。やはりいつかはきちんとお互いに正直な気持ちを話して、譲れるところは譲つて、それで離婚ということになったらそれもしようがない。気持ちのないセックスはしたくないし、それを強要する男だったら別れたほうがよい。

離婚するしないは二の次にしても、ある程度、子供二人抱えて自活できる自信が備われば、話し合いを恐れずにすむのではないか。また、そうすることは自分の向上にもなると思つた。

「自立」は結婚する前からいつか思つていたことだつた。経済的な理由から、借金癖のある父と別れられずにいた母を見て、私はああはなるまいと思つていた。いつでも子供二人抱えても食べていけるようにしたい、そう思つていた。



しかし今現在の自分を見ると自立とは程遠いところにいる。二度の出産などに甘んじて、今はほとんど内職仕事のようなことしかしていない。

問題からいつも逃げて、不安を心の隅に追いやりながら、今の根拠のない安定した生活に浸っているより、自立を考えて少しずつ動いていったほうがずっと建設的だ。

そう考えを転換させたら、心の重い石を一つ取り除けたような気分になった。

家庭内別居夫婦

神奈川県大和市
浅田節子 60歳

まるで「女」を捨ててしまったような、六十代の主婦の集まり……古き仲間たちとワイセツ談義？を、ずばり書くことにしよう。

少量のアルコールで、心地よい気分になったところは、もっぱら夫との「夜の部」に話は集中した。

【卒業組と深刻組】

一人の友が、

「もう私たちは、友達夫婦で、とっくの昔に夜のほうは卒業したのよ」と言え

「あーら私なんか旦那が十歳も年上で、さっさと先に寝てしまいうから、もう十年以上も処女を守り通しているわよ」と、みなを笑わせる友がいたりする中で、深刻組もいることに気付いた。

「私なんか、主人が二度も手術しているから夫婦としての交わりは、かなり前からないし……」と、不満気味である。

その日欠席した友は、電話の折り、「主人が病弱で入退院を繰り返しているから当然女としての夜の楽しみも、捨てさせられたのよ」と、憎しみまで含んだ口調で話してくれた。

数カ月前にも知人の書いたものを読んだところ「生の夫婦生活はもうない——」と、記された部分があり、五十代のかたではあるけれど、このかたも……と思ってしまった。

先月は三十年以上続いている四人のグループと一泊の旅に出たが、そのとき家庭内別居の多いのに、びっくりした。

もちろん私たち夫婦も寝室は別々で、夫は二階で私は一階である。

その理由の一つは、夫が夜中に読書をするクセがあり、明かりがまぶしくて、睡眠不足にイライラして、体調を崩してしまったからである。

でも、もっと掘り下げて本音を暴露すれば、あまりにもしつこい夜ごとの夫の要求と、子育て中は疲れ切った体のことなどまったく理解してくれない夫に対しての、長年の精神面の抑圧があまりにも大きく、四十代でとうとうセックスノイローゼになり、吐き気まで伴うようになって、一階に逃げだしたわけである。

寝室を別にして、十五年くらいになるが、夫の要求も年とともに回数も減り、何といっても一人でのんびりと床につく幸せを味わってから、体調は上々である。

（さまざまな性生活）

そういえば、私が親しくしているAさんも寝室を別になっているが、そこは家庭内別居よりまだ上手をゆき、家庭内離婚である。

Aさんは五十一歳で、旦那さまは五十六歳だが、十年近くも夫婦の交わりはまったくないそうである。

そのころまだ四十代だった旦那さまは、どのようにして「性」の処理をなさっていたのか？ 不思議な男性の一人である。

Aさんの話によると、正常に夜の夫婦生活があったのは、結婚当時の四、五年くらいで後は年に二回から三回——そのうち年に一回と遠のき、四十代で完全にゼロの状態になったそうである。

同じ部屋に床を並べているのに、何カ月も指一本触れることのない旦那さまに、しびれを切らしたAさんは、自分のほうから、「今日は安定日だから——」と、誘いかけても、「疲れている」とか、「アスにする」とか言って、背中を向けて寝てしまうそうである。

そこで、「アス」という言葉に、女としての期待を抱き、心待ちしていると、夜遅くお酒に酔って帰宅したりで、彼女の期待はみごとに裏切られるそうである。

そんなことが続いたある夜、Aさんは夫の身勝手な、愛のかけらもないセックスに無性に腹立たしいものを全身に感じて、もうこの人とは、これが最後の交わりだと思ったそうである。ほ



んとうに、それっきりでセックスレスの生活が十年近く続いているわけである。

そこで、私は一つの疑問をAさんに投げかけてみた。

まだ若い四十代のころから、独身のような生活に戻った旦那さまは、セックスの処理をどのようにして……と思ったからである。

すると、Aさんも同じことを考えていたそうで、旦那さまのおふろがイヤに長く、そのうえに妙にシーンと静かなときがあるそうで、そのときにおふろ場で「性」の処理をしているのかも……と、静かな笑いを浮かべたAさんである。

そこで、思い切ってまた一つ突っ込んで問いかけたことがある。

それは、ご主人に愛人がいるのでは——ということである。

しかし、Aさんは、

「下着も何日も取り換えないような人だから」と言った後で、

「もし、そのような人がいても私はかま

わないし、それでいいのよ。子供もいることだし、今別れてソンをするのは自分だから——」と、穏やかに語ってくれた。

Aさんには二人のお子さんがいて、二十三歳と二十歳である。

一人の息子さんが、アパートに引っ越したので、その空いた部屋をAさんは自分の寝室にしたのである。

自分専用の寝室が出来てから、Aさんの表情には明るさが増し、そのうえ彼女は生き方まで変えてしまった。

それは、年に一回の海外旅行を実行していることである。

日本を離れたその土地で彼女は何かをふっきり、心機一転して帰国後、新しい気分で生活をスタートさせている。

オシャレ上手なAさんは、最近ますますステキな女性に変身した。

そんな彼女に心からエールを送り続けたい私である。

その昔、六十代、七十代といえど、人生の終着点のように思われていたが、その六十年を生きてみると、若かりしこ

ろはとても口に出せなかったセックスのことも、年を重ねるにつれ恥じらいも薄らぎ、さらりと語り合えるから妙なものである。

現代の流行語で「不倫」を耳にすることも多いが、反面見えない部分の「性」の悩みに苦しんでいる人も多いような気がする。

夏は暑い、冬は寒い、だからダメ

匿名

（ノーセックス夫婦）

「今日は？」

それとなく促してみる。主語がなくとも伝わるわが家のベッドでの会話で

ある。

「疲れた。週末にしよう」

いつもお決まりの会話。そしてそれが実行されたことはほとんどない。

世の中で、セックスレス夫婦が増えたと呼ばれてから、もう随分になる。それとなく気にはなっていたので、そういった記事の載っている雑誌は、かなり読んだ。しかしわが家のようなケースはあまりないようである。

わが家の場合は、夫がまったくセックスをしたくないというのだ。夫婦仲



は決して悪くなく、夫も妻も三十代前半の同い年の健康体の夫婦である。夫

は働き盛りで、仕事はかなり忙しく当然のように帰宅は遅い。しかし、夫が、浮気をしている可能性はゼロに等しく、

妻も浮気をしていない。もちろんホモでもない。よくいわれるマザコンともほど遠い。自分で処理する気持ちもまったくないという。単にセックスという行為が、面倒で嫌なだけだそう。

結婚して丸八年。回数がすべてではないけれど、一体何回セックスをしたのだろうか？

恋人時代から振り返ってみる。最近のカップルではもはや常識に近いものがある婚前交渉。私たちにもそれはあった。しかし、今考えてみれば、そのころから彼は淡泊だったのである。毎週のように逢っていたけれど、セックスに行き着くのは、十回に一回くらいだったような気がする。結婚前は、それが彼の倫理観なのかと思っていた。我慢しているに違いないと信じていたのである。

ところが新婚時代でも、週に一回が限度。一カ月も二カ月もあくこともあった。不思議に思っ、それとなく聞くと、

「夏は暑い。冬は寒い。夜は眠い。朝はだるい」というわけで、「それじゃあ一体いつするの？」と新婚の妻は悩んだのである。

仕事の都合もあって、結婚後五年間は子供を作らなかつた。そんな事情も手伝ってか、彼は日に日にセックスから遠ざかっていった。週に一回だったものが月に一回になり、季節に一回になり一年に一回になっていった。

彼が淡泊なのはそれでいい。自分で困っていないのなら仕方ない。しかし私はどうするのだ。世間では女性には性欲はないとまで言われ、あったとしてもそれはほんの少しで、しかもそんなことを素振りにも見せないというのが慎ましやかだと信じられている。ほんとうだろうか？

（このすれちがい）

私には性欲がある。しかしそれが夫を困らせるほど過剰なものだとはとても思えない。八年間もベッドを共にしている男がいて、何もせずに眠るほうがよほど体に悪いという気がしてならない。たまには、男に抱かれない夜だっている。なのに同じベッドで寝ている男はガアガアといびきをかいているだけである。

最初のころは私もかなり悩んだ。彼を傷つけてはいけないと思って、私のほうからは要求することはなかった。しかし、そうするとまったくお呼びがこないのである。黙っているのがよくないのかと、それとなく誘ったこともある。セクシーな格好をすればいいと友達に言われ、すけすけのネグリジェを着るなんて努力もした。ニンニク料理をそれとなく作ったり、聞くも涙、語るも涙というくらいあの手この手とでさるだけの手を尽くした。しかし彼は一向に変わらない。

ほんとうにたまにセックスが行なわれる場合も、彼はあくまでもお義理で、

ともかく面倒臭いという気持ちで露骨に表し、前戯などはほとんどなしで、用だけを済ます。もちろん私のほうには快感なんてものはまったくない。

あるとき、親友と夫の愚痴をこぼしあった。「わが家のけんかの原因の九〇%がこれだよ」というと、なんと彼女の家でもそうだという。彼女の場合は、妻のほうでセックスを必要としていない。夫のほうは常にそれを求めてくるので、夫が野獣のように見え、彼女は負担以外のなものでもないという。

ほかにも、私のまわりにはたくさんセックスレスカップルがいる。一番極端なのは、三歳半になる子供を妊娠したときからもう四年以上、一回もセックスをしていないという人がいた。妻のほうで、まったくしたくないというって、夫を拒否し続け、「彼がしたくなったらほかでしてほしい」と公然と言いつつ放っている。夫も別に文句も言わない。しかしこの夫婦も別に仲が悪いわけではない。

ちゃんとセックスをしている友人に

話すと、「いいじゃないの。あんな面倒なもの。なければならぬ越したことはないよ」と言いつつも「私は夫に愛されているのよ」と何となく勝ち誇った笑いが聞こえるような気がするのはこちらのひがみだろうか？

セックスは夫婦げんかにも影響を及ぼす。けんかにおいての私の悪いところは、原因が何であれ、相手が一番傷つくようなことを最後に必ず言ってしまう。

彼がセックスができないということではもはや私の武器なのである。そして彼は私が家事が苦手だということを攻め続ける。最初はこうではなかった。セックスのことだけは触れないでおうと思っていた。

しかし、最近はどうしてもだめなのである。あるとき、けんかがどんどんひどくなり、怒り心頭に発した私は、怒鳴り散らしてしまった。

「病院に行って診てもらってよ!!」

こんなことは言うべきではない。それをコンプレックスに思っている人間

に、ここまで鞭打つようなことを言うてはいけない。分かっている。だけでもう我慢にも限界っていうものがあるのだ。

彼は言った。

「病院に行くくらいなら離婚したほうが



ずっといい」

しつこいようだが私たち夫婦も、仲が悪いわけではない。確かにけんかをすると修羅場になるが、平常の生活には何の支障もない。夫はとてもいい人だし、子供は（こんなにセックスをしない夫婦にも子供はできる）かわいがるし、私を愛してくれている。このたった一つの問題点さえなければ、私も夫には文句がない。だけど、この一つがやっぱり問題なのである。

離婚したいわけではない。セックスだけが愛情のすべてではないこともよく分かる。だけど何だかどうしても割り切れないのだ。私はこの人と暮らしている限り、一生セックスには恵まれないのだと思うと、心にポカンと空洞があいてしまったような気がする。

私たちは夫婦ではなく、気の合う親友で同志で共同生活者だ。

「セックスをしないと、何だか男と女じゃなくなっちゃうんだよね」と、同じようなセックスレスカップルの友人が言った言葉が胸にしみる。

わが家は未成熟？

匿名

（未成熟夫婦）

私は夫が好きだ。二三六号のようなモノ言わぬ夫への不満を今の私は持っていない。夫は決して口の軽い「おしゃべり」なんかではないが、夫婦で話をする事、意見を言い合うこと、議論（口論ではない）をすることが二人とも好きなのである。ま、たいていは二人でお酒を飲みながらだが。愚痴も言い合うし慰め合うし、お互いを認め合う努力もしている。お互いがそれぞれの最高の理解者になりたいとも常々

思っている。

夫は私の「主人」ではないし、私は夫の「母親」でもない。できるだけ家の用事も分担し、可能な範囲で妻も仕事をしていくことにしている。子供は二人いるが、子育ての責任は二人にあり、必要以上に手や金をかけないにしても一人前になるまでは「ちゃんと」やるう、と話し合っている。その後の人生はお互いの趣味の世界でそれぞれ、あるいは一緒に楽しみたい。好きなヨーロッパを二人で旅行もしたい。そしてできれば何か社会的に意義のあることもしていきたい……。

こういう私たち夫婦は、結婚七年目。いわゆるセックスストレスに限りなく近い。妻の自己主張が強いとか、夫婦不仲とかましてや不能とかいうのではない。(と思う)セックスが愛の最高の表現……:と知っている人も多いのかもしれないけれど、セックスを特に必要とは思えないのだ。記憶は不確かだがだれかが「人間的に未成熟な人は、愛情にも欠け夫婦の性生活が豊かでない」とい

うようなことを書いているのを読んだことがある。そのとき「そうなのか、わが家は未成熟か……」と半分納得がいかないままその意見を受け入れた。しかしてやはりセックスの回数、頻度を人間の成長度や愛情の尺度にされるのは不愉快だ。少なくとも「私はその気がないのに夫が求めるのでせざるを得ないのよ、いやになるわ」などと言っている夫婦の関係より、「お互いセックスやそれに付随するもろもろのことをするよりも、話をしたり、それぞれの趣味に没頭し、そのことを報告しあったりするほうがずっと楽しい」という合意がある夫婦のほうが、成熟した個と個の関係としてはよいように思う。

セックスストレス夫婦を「まさか」と不思議に思う人にこんな意見を言っても説得力に欠けるかもしれないが、やっぱりしなくても不自由がない、というしかない。夫婦としての男女で暮らすより、気の合った同性の友達と暮らすほうが楽しいし気が楽だ、という人の話を聞いたことがあるが、わが家の場

合は、それに近い関係にあるのではないかと、ふと思うのだ。もっとも何が何でもセックスを排除したい……:と言っているつもりはないので、ほかの楽しみがどんどん失われでもしたら、私たち夫婦にもまた、セックスが帰ってくるのかもしれない。



「なぜか、その気になれない」……

匿名

私たちは、「初めて会ったその日から……」ではないが、会った瞬間にお互いが結婚を決めてしまっていた。赤い糸……そんなロマンチックな言葉が浮かんでくるほどピンとくるものがあった。気持ちは日に日に盛り上がり、半年先の結婚式が待ちきれないほどだった。

初めて夜を共にしたときも、何て相手のいい人だろうと思った。私が心から望むものがそこにはあった。決して少なくはない過去の恋愛経験の中で、これほどまでに甘美な夜は初めてだった。

思いやりと優しさにあふれた彼の性格は、そのままセックスにあらわれていた。

新婚旅行先のバリ島での夜も、エキゾチックな雰囲気も手伝って、それは素晴らしいものだった。

ハネムーンベイベーを授かったと知ったのは、それからまもなくのことだった。

二、三年は、ディンクスをきどるつもりだった私たちにとっては、ちょっと誤算ではあったけれど、両家にとって初孫であり、みなが祝福するうれしい妊娠となった。

（こんなに仲がよいのに）

ところが、妊娠を告げてから、主人からのお誘いがまるでなくなってしまった。私は私で、初めての妊娠で不安だったので、私の体を気遣ってのことだろうと思い、特に理由を聞いてもみなかった。夫婦生活がないことを除けば、実に幸せな新婚生活だった。

やがて子供が生まれてからも、主人

の優しさは変わらなかった。ヘビースモーカーで飲んだくれだった彼が、たばこもやめ、お酒の量も、めっきり少なくなった。外で飲んでくることも極端に減った。たまに飲みに行っても、まめに電話をかけて子供とコミュニケーションをとってくれる。

子供が寝てからの夫婦の時間がまた楽しい。トレンディドラマやビデオを見て、ああでもない、こうでもないと言通し話し込むこともある。子供のことうだたり、仕事のこともうだたり、二人の将来のことだとうだたりと話は尽きない。

思えば、セックスレス生活を続けて、もう四年にもなる。最初のころは、美しい恋愛映画を見た後など、求めてほしいと思うときもあったが、今では、映画の中の感動のまま眠りにつくことがうれしかったりする。

それでもセックスについては、主人と何度か話し合った。ライターという職業のせいか、「なぜか、その気になれない」のだという。「会社や街で、セク

シリーな女性を見ても何とも思わなくな
った」という。それは決していいこと
ではないと自分では分析している。「今
は何より仕事。そういう年なのか」と
も言う。内助の妻としては、疲れて高
いびきをかいている夫の布団にもぐり
こむ勇気もなかった。

わが家に夫婦生活がないことを友人
に話すとその反応が面白い。

まず、三つのタイプに分かれる。

「かわいそうね」このかたは、夫婦生活
がうまくいっているらしい。

「どこも同じね。うちもそんなもの」主
人の年代はみな疲れているのかしら。

三つめのタイプが結構いるから不思議。

「うらやましいわ」

「うちも、夜の生活さえなければ幸せな
んだけど」

友人のA子からは、時々泣きながら
電話がかかってきていた。

「ゆうべも主人に求められたの」

夫とのセックスがいやでいやで仕方
がない。女性の気持ちをまるで考えな

い一方的な性の処理にすぎない。ご主
人にいくら話しても分かってくれない
という。

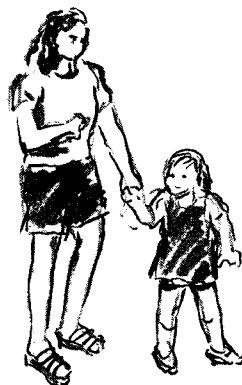
「お前はおかしい。医者に診てもらえ」

「俺たちは夫婦じゃないのか。妻を抱き
たいときに抱いて何が悪い」

「俺は一週間も我慢しているんだ。今が
いやならいつならいいのか言ってくれ」

そんな夫に、「あなたとはもう一生寝
たくない」と言ってしまったという。

その彼女が最近急に明るくなった。
確かめてはいないが、どうやらご主人



が外に女性をつくったらしい。「麻雀
だ」と言っているいそと出掛けて行く

ご主人を笑顔で送り出しているという。

イライラしなくなったし、子供ともよ
く遊んでくれる。何より夜求めてこな
くなった。外ですませてきてくれるな
ら、お小遣いを増やしてもいいという。

彼女のところも、セックスレスを続
けて、もう半年になる。

ケースは違いますが、私も最初のうちは、
主人の女性関係を疑ってみたりもした。

友人から「きつとそうに違いない」と
言われたこともある。だが、主人には、
その気配すらなかった。

布団の中で目を閉じてから、時々思
うことがある。

「夫が今求めてきたらどうしよう」

そんなときは期待と不安が入り交じ
る。拒否してしまうかもしれない。私

は一体どうしたのだろう。尼さんって
こんな気持ちなのかしら。セカンドヴ

アージンとはよくいったものだ。

いつかまた、あの素晴らしい夜が来
るには違いない。そのときには、この

幸せな生活は、どう変わるのだろうか。

夫は変わった、 けれど私は……

匿名

セックスレスは、夫婦が共に望んでのことならば立派に結婚の一形態となりますが、片方だけが望む場合、そこにはさまざまな問題が含まれているようです。

私は四十代の始めで夫は四十代後半、やや年の離れた夫婦です。十五年前に見合い結婚をし、十代前半の子供がおります。完全なセックスレスになってから、七、八年が経ちます。結婚後に好きになった男性は何人かいましたが、幸か不幸か、夫以外の男性とはセック

スはおろか、手を握りあったこともありません。

私の分析

そんな私の、今日に至るまでの経過を書いてみます（なお、ここでいうセックスとは、生殖手段としてではなく、男と女のコミュニケーションとしてのものをさします）。

まず最初に、女性が男性にひかれる理由を分析するなどやばですが、話を進めるのにどうしても必要ですので、あえて致します。女性が男性のどんな要素に魅力を感じるかは、大きく次の三つの要素になるのではないのでしょうか。①顔や体の外見だけでなく、身のこなし、表情、しゃべりかた（内容ではない）、物の食べ方など、生身の体を使って行なうことすべて。

②性格、感性、知性、人生観、どんなことに興味を持っているか、ライフ・スタイルなど。
③学歴、勤務先、所有物、収入、家柄など。

①と②はなはだ主観的なものであり、私の場合、このふたつが重要なポイントでした。学歴などを含む③に関しては、本人がつまらない劣等感で歪んでいない限り、たいいていのものは許容できました。

結婚前に幾つか恋をしました。

①の部分で強烈にひかれた男性の面に、自分好みのものを期待してしまふのは人情というものでしょう。実際と異なる像を相手に押し付け、相手も私にそれをする、そして破綻というお決まりのコースです。性愛的執着が強いのは悪くはなく、これがなければ種は滅びるわけですが、交尾してすぐ別れる動物ならともかく、この衝動だけで豊かな人間関係を築ける例は稀だと思ひ知らされました。

②の要素だけでひかれた男性とは、内面の素晴らしい共感や高揚があっても、異性としての魅力を感じることは困難です。「あなたの精神にはとてもひかれますが、あなたに抱かれたいとは思え

ません」などと、口がさけても言えるはずありません。しかし、相手のほうで敏感に察し、それだけが理由ではないにしろ、やがて彼らは私から去って行きました。



見合いに踏み切ったのは、「恋愛に疲れた」ことや合法的家出の手段、「自分の望むような男など、地上にいるはずもない」という悟りだけでなく、「だれかと二人で寂しくなく生きていきたい」という根源的で矛盾する欲求に急ぎ立てられてのことでした。若いころというのは、どうしてあかも寂しいのでしょうか。そもそも結婚とはしなければならぬものなのか、とことん考えられるほどに私の内面は成熟していなかったのです。

見合いの何人目かで、現在の夫と出会いました。それまでの相手が①でも②でも問題にならなかったのに比べ、人間として信頼できる気がしました。それ以外には特にひかれる面はなかったけれど、恋をするわけじゃなく家庭を持つのだからと、自らを納得させました。

会った当時の彼は、母親との葛藤から抜け切っていない様子でしたが、これは、親からの精神的自立でもがいた私にとっては共通項ともいえるものであり、結局結婚しました。

一緒に暮らして分かったのは、善良で誠実で有能であるだけでなく、過酷なくらい几帳面で、妥協を知らない管理的な性格でした。体力と粘り強さでも私とは雲泥の差があり、家事でも子育てでも、妻がすべて夫の流儀で実践することを強要しました。彼は私の家事や育児の監督官であり批評家であり、査定はすべてマイナス方式で行なわれました（夫自身は家事や育児に直接かわりません）。夫から押された「無能

な怠け者」の烙印のもとで、私の結婚生活前半は、自責と疲労の累積でした。

人の気持ちに対する斟酌（さんしやく）ということでも、夫と私はまったく違っていました。恋という幾つもの修羅場で、自分を見つめ相手を見つめてきた私とそうでない彼とでは、人情の機微（きび）をすくいあげる巧拙（こうせつ）に大きな開きがあり、万事食い違いました。

夫は子供を中心にして家庭というものをとらえており、夫婦二人の時間を持つことにはおよそ無関心でした。また、私が一人で行動する際も、常に子供を足かせのように添わせ、妻の行動力を減じようとしていた節があります。

（夫の自己変革）

結婚当初から遊び心や雰囲気などを軽視した性生活で、味気ない思いをしました。上の子を生んでからは育児で体力的にも辛く、自分からは望まなくなりました。夫から強く求められればやむを得ず……という具合でした。性欲がなかったわけではなく、夫とセッ



クスする気持ちを持てなかっただけで
す。

子供が大きくなったところで、私は
少しづつ自己実現の場を広げだしまし
た。夫の顔色をびくびく伺っていたも、
人生は何ら豊かにならないと気付いた
のです。言い換えれば、離婚して一人
でやっていけるだけのバックボーンを
身につけようと決心したのです。セッ
クスを拒否するのに後ろめたさを感じ
ることなどないと、やっと割り切れる

ようにもなりました。

それだけの覚悟をすると、夫の態度
が変わってきました（どうしてもっと
早くそうしなかったかと、今後悔して
います）。独善的で頑迷な性格は、年と
ともに極端になっていくのが普通です
が、夫は逆でした。ここ数年の変わり
方などは劇的で、あれほど自己改造し
た努力には頭が下がります。ことに子
供に対しては、私とは足りない面を補
いあう良い親といえましょう。

私と仲良く添い遂げたいと、夫はこ
のころ本気で思っているようです。そ
れができるならセックス抜きでも仕方
ない、とさえ思っているようです。私
がその気にさえなれば、すべてめでた
しめでたしなわけですが、それができ
ないのです。

彼の変わり方を暖かい目で見ること
はできても、そうしている私自身を、私
は冷ややかにしかながめることができ
ないのです。生理や感情の奥深くに根
ざした感覚は、いかなる意志を持って
しても変えがたい場合があると、身に
染みて感じるこのごろです。「ここまで
自己改造できたのだから、私じゃなく
ても、たいがいの女性とうまくやって
いけるわよ」などと言ったら、夫はど
ういう顔をするでしょうか……。

私はたぶん、セックスの歓喜とは一
生無縁のまま朽ち果てるのでしょう。
が、それはもう、とうにあきらめまし
た。セックスはコミュニケーションの
重要な手段の一つですが、なくとも差
し障りはありませんまい。仮に夫が、私

セックスは好き

匿名

私と夫は大恋愛の末、結婚。当時は電撃婚約だ電撃結婚だと言われたもの

の自我を踏みつけるような仕打ちをしなかったとしても、はたしてセックスのある夫婦でいられたか、疑問です。夫と離婚するかどうかは、成り行きまかせの観があります。セックスレスはおそらく変えようがなく、私の力のおよぶところではありません。善し悪しや幸不幸を越えて、それが今の私の現実なのです。

だ。入籍する数カ月前に彼は私の女人以外禁制の部屋へお忍びで通っていたから、性的な関係も、もちろんあった。

当時、彼は私や私の体に燃えていた。私は私で彼に夢中になり始めていた。男と愛し合うということは、彼が初めてではなかったが、確実に私に「セックス的な悦び」を味わわせたのは彼がトップ。裸の彼に抱かれるときや、押し倒されたときには好きな人に愛されるという最上の女としての悦楽を感じた。当時だと恥ずかしい話題が現在では楽に少し肩の力も抜いて話せる。十数年の年月はすごいものだ。

私は根がセックス好きらしい。ただし、これも結婚後すぐ第一子を妊娠してからは、様子が変わってくる。お腹に子供を宿してからは、その子に安全なように、むしろ性関係もあまり進んでやりたくなくなり、夫とも間隔があくようになった。夫は若い盛り、出産後も、初めての交渉では痛い、こわい逃げたのを覚えていた。出産後は、とりわけ乳房を子供専用にと考え「赤ち



やんのだから乳首は吸わないで」と夫に拒否したのをよく覚えていた。さらに、第二子、第三子ともこの傾向は同じだった。

（いつからか拒否に）

数カ月、総スカンをくらった夫は私に向かって腹を立て、夫婦関係を求めようとした。いつごろからか、夫の欲求に抵抗をするようになっていた。そ

れに対して、夫も「抵抗するような女はき・ら・いだ」とさじを投げるように私から身をひいていた。ただ私は、自分のわがままや甘えたい気持ちとうまく通じないたびに、深夜、眠たい夫をたたき起こして一方的なけんかをしかけていた。こんな妻によく我慢した彼……こんな状態は、長期戦であった。

第三子出産以降、彼は私と何年ぶりで夫婦生活に楽しみを求めるようになった。仕事上で会う時間が少ない分、相手が見えるようになり、家族への思い入れが変わったのも一因かしら……。現在の私の心情は、「四人目欲・し・い」と言っても、彼の「もっと楽しみなきや……」の言葉にかき消されて厚い胸元に抱かれる自分を見ている。「よく続いて結婚生活が十〇年になる。おかしい」というのが二人の共通会話だけれど。

ところが、セックス的には彼と私は性的波長が同じか似ている。相性がいいのだ。これは一人しか知らない人には分かりにくい……私には分かる。

性的には、夫婦間であろうが、恋人間、同性愛であろうが、私は結婚前に相手と棲むことをおすすすめしたい。ブリッ子していても、その人となりが分かるから……。でもエイズには完全に気をつけて、それに避妊もして……。

セックスレス夫婦は増えてもおかしくはないと思う。これだけ世の中が忙しくなり、企業と結婚している夫を持つ妻は、午前様にならないと夫君と会えないし、交渉はないだろう。セックスレス≡不仲という図式も成立しない気がする。でもセックス≡肉体のつながり≡精神のつながり↓気持ちのつながりになるので、やはりないよりは「あった」ほうがよい。

その中で妻が自分はあなたの性欲のはけ口でないと強く主張し、抵抗したていい。わが家の大げんかの最後は、いつも同じ。彼がすごいつっぱり私を押さえこむことでTHE END。ハッピーになり、妻として女として気持ち落ち着くのだ。やはり、セックスは夫婦間の潤滑油である。

(え・佐藤瑞江子)

★わいふバックナンバー

各号特集テーマ

209号 わがふるさとの現代史

213号 私の夫の労働人生

226号 セカンドハウス持ってみたらば

227号 子どもの出現

229号 私の職業人生

230号 旅行記への挑戦

233号 私と学校

234号 父

235号 我が家を手に入れるまで

定価二一八号までは四五〇円、二一九号より四六〇円。送料は実費負担で。

★新刊案内

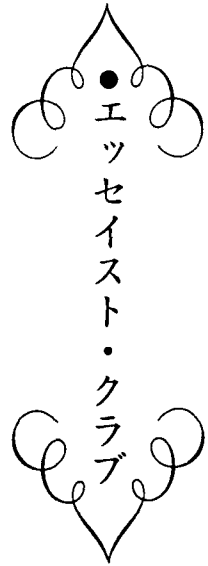
子育てはつらい! 一五〇〇円

核家族のための

子育てガイドブック 三〇〇円

〇三〇三三三六〇一四七七二

三三六〇一四七七三



カバシマ君ヤーイ

神戸市東灘区 岩田 佳子（55歳）

ベランダに出ていたわが家の老猫が、血相？を変えて室内に駆け込んできた。なにごとか、とベランダへ出てみると、眼下の塀の上をキジ猫がゆうゆうと歩いているのが見えた。

キジ猫は、昨年の夏、どこからともなく老猫のテリトリーであるこのマンション界隈に現われた若い牡猫である。初めのうちは、少しだけ場所を貸してくださいというふうに神妙にしていたが、いつのまにか、わがものの顔で居座ってしまった。年齢の差があっても、牡同士仲良く共存というわけにはいかぬものらしい。キジ猫と老猫は顔を見合わせるたびがみ合う仲になった。

昨年の暮れのある日、老猫が片方の後ろ足をひきずって帰ってきた。いつものごとくキジ猫と争った後でのことである。

キジ猫に後方から、足の付け根を噛まれたと見え、やがて、片足の付け根の部分の毛が抜け落ちて、赤い身が剥き出しになった。その姿は見るに忍びないほどであった。まるで、お猿のお尻のようになったのである。赤い身からは、絶え間なく血が滲み出し、彼はせせと嘗め続けた。

あいにく病院は年末休診に入っていた。彼の傷が化膿しないように、我々は、家中の暖房を極力抑えて過ごした。年が明けたころから、赤い身の範囲が狭まってきた。噛まれた箇所の皮がくっつき始めたのである。この皮というのが、三味線に使われると伝えられている皮なのだろうか。真っ白でかすかに産毛が生えていた。

動物の自然治癒力には驚かされる。抗生物質の注射を打つまでもなく、一月の半ばごろには、産毛が伸びて老猫の地色である茶色の毛に変わり傷はすっかり癒えてしまった。

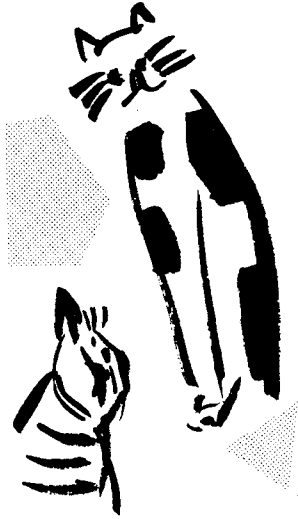
年末のけんか以来、老猫とキジ猫の力関係は決定した。老猫は、キジ猫の影を見ただけでも、恐れおののくようになった。

怯えた顔つきで、そそくさと室内に入ってきた

老猫を見て、私はカバシマ君と私のことを思い出した。

北朝鮮で通っていた小学校で、私より一級か二級上に、カバシマ君という名うてのガキ大将がいた。ずば抜けた大きな体格に、浅黒いいかつい顔、いつも子分を何人か引き連れて歩いていた。

彼は、私が入学した当初から、私を見かけるとにこりともしないで、大きな手で私の頭をがばつと押えつげにきた。朝礼などで、校庭から大勢の生徒たちと教室へ引き上げる途中でも、走り寄っ



てきては、私の頭をがばつと押えて逃げて行った。彼に押えつけられるたび、首の骨が折れそうな感じがした。私は彼が恐ろしくてならず、見つからないように気をつけて校内を歩いたが、どこからともなく現われては、頭を押えつけられてい

た。

ある日、家の前の地面に絵をかいて一人で遊んでいた。ふと気が付くと、わずか数メートル先にカバシマ君がじっとこちらを見て立っているのが見えた。私は、外出中ではいるはずがない母を、大きな声で呼びながら、夢中で家の中に駆け込んだ。

あれから、五十年近い歳月が流れた。

数年前に、北朝鮮での小学校の同窓会名簿づくりが行なわれ、私の手元にも送られてきた。低学年になるに従って、同窓会名簿に空白欄が増えていく。つまり、消息不明者が多いのである。終戦当時、私は三年生だったが、伝え聞くところによると、多くの級友が引き揚げ途中病死している。二クラスで百人近い級友がいたはずなのに、現在、名簿に記載されているのは、五、六人に過ぎない。当時の苛酷な状況から推し量って、残留孤児になっていることも考えられる。

件のカバシマ君の名前も名簿に見当たらない。カバシマ君に限って病死するなど考えられない。きつと無事に帰国して、どこかの町で土建屋さんの親方にでもなって、元気で暮らしているような気がする。

カバシマ君ヤーイ。姿を見せてください。

天秤座の女

かなゆつこ

そうよ、ワ、タ、シは、天秤座のオンナアー

最近こんな替え歌を、よく歌うようになった。少し仕事も家庭の流れにも、慣れらしきものが出てきたかなと、にんまりするつど、この歌が出る。

ところが「転暗黒の空模様、仕事量は変わらぬままであるのに、家庭のほうに突発難問題、疲れて茫然としてこの歌を自嘲的にこそそこそと歌う。もちろん、元歌は「さそり座の女」で、恋がどうしたこうしたの内容だったと思うが、私の場合テーマは恋ではない。

家事と家族と仕事のバランスをとること、何とかすべてをなだめすかして、仕事を続けることを、心中必死に乞い願いつつ、あたかも自分が天秤の真ん中に立っているような姿。家庭と仕事の両天秤なんてもんじゃない。私の回りにたくさん天秤の皿が並んでいて、一つは夫、一つは長男、一つは次男。

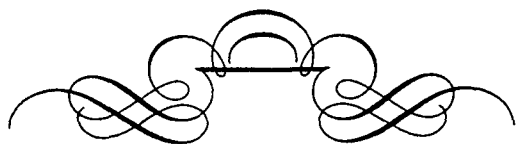
それ以外でも子供たちの友達の思惑とか、その親御さんたちの思惑、私、夫双方の両親の思惑、

延長保育の保母さんたちの思惑、幼稚園の先生たちの思惑、近所の人たちの思惑、勤務先の人たちの思惑、いろんなものが皿の姿で私の回りを囲んでいて、あちらがバランスを失いかけている、おっとととと支え、こちらで我慢がきかなくなっている、それたいへんだと駆け付け、その処理がまた決して手際よくなく不完全。

結果、再三再四の危機一発が、同じ箇所に起こったりして、もうなんなのよ、私ってだめねえと、たくさん皿の真ん中で、わあっと泣きたくなくなる。すると、皿の振動が一斉に止むこともあった。が、最近泣き落としもきかなくなっていて、ますますがたがた揺れ動くこともしばしば。

毎日天秤の様子を見ながら、仕事と家庭の両立をはかりたいと思うガンコで欲張りでごく普通の女の私。実際の生まれ月も天秤座なのである。なんでもこの星座の人は、おしやれで外向的で感情のもつれがいやで、とにかくスマートに人生渡っていきたいという性情の持ち主なんだそうで、絶対私とは合っていないよ、星占いなんてうそだと言いつつ続けたのだが、性格は異なるにしても、確かに今の私は天秤座だと思う。

ほんとうの肉親は案外とスムーズに、私が仕事を抱えることを受け入れてくれた。だからこそ、頑



張ってこられた。家族の協力には、心底感謝している。それ以外の外野が、ときおり、ぼっちりと批判めいたことを言う。だけど言ってくれなければ、きっと私はこのまんま突っ走っていくばかりだろう。

どうして仕事をしたいの。子供がかわいそうではないの。自己実現、趣味でしかない仕事じゃないの。家もきちんと片付けられないのに、そのうえさらに仕事をなげ持ちたいの。もしかしてあなた、いつまでも自分勝手。子供じみた人なんじゃないの。



さすがに、こうハッキリ面と向かって言う他人はいない。私が、暗黙の中に響く、だれのものとも知れぬ声を聞き取るだけである。私はうなだれてしまうが、そのくせいつも、この一時に、自分がいい意味でも悪い意味でも、大人になったなあと感じる。自分の内なる声もしかと確かめているのである。昔だったら、ただただ私が悪かったと、物凄い内気な性格も手伝って自分を責めたものだったが、今や堂々たる大人じゃないか。

自分のやりたいことを冷静に見極めて、何とか実行していきたい。人の意見に百パーセント、頼ってしまいたくはない。とどのつまりは、「今のところは」私仕事を続けていきたい。

今のところ、とかぎかつこ付けねばならないところが、これまた大人の辛い立場である。どうも性格からいって、私には家族優先とはいかなくて、あらゆる手段を駆使して仕事を握り続けそうな怖さがあるのだが、それでもどうしようもない行き止まりが、いつか起こりそうな気がする。

天秤の皿が片端から大音響をたてて割れ、皿の残骸の山積みの中で、私が立ち尽くしている……、そんな情景の中で、あきらめがつかずに泣くことはしたくないと思うのが、また大人である。だからいつも、「今のところは」仕事をしていられ

る、いつかだめになるかもしれないと心しながら、日々忙しく過ごしている。

これから、どうなっていくんだろう。星占い、信じてないぞと言っていたくせに、気にしてしまいう。私の運勢はよいのでしょうか。

内心の不安を押し隠して、天秤座の女はしたたかに、皿のバランスを取り続ける。本来の天秤の主は、ギリシア神話の正義の女神アストレーアだとか聞いている。自分を例える気はない。めっそももない。ただ星といううと、ちょっと思い出すことがある。かの有名な星の王子さまのことである。

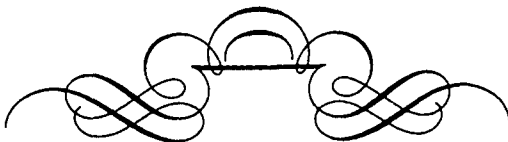
子供のころは愛読したお話である。大人になったら、忙しさのあまり、再読をなかなか果たせずにいる。だからまったくの記憶違い、読み取り間違いのかもしれないが、桃色のレンガでできた、窓に花があつてハトが屋根にいる家、それを大人は十万フランの家と言わないと、その家の価値を感じないというくだりがあつたと思う。

大人になつたって、そういうお家をきれいだなって、思うよ。きつと、みんなそうだよ。だけど、十万フランを稼ぐのが、どれだけ大変かも、身に染みて知っているから、数字を出されて、「そいっあ立派な家だ」と感心してしまう。そういう大人

を、だめな奴と決め付けないでほしい。夢のない大人を、救いようがないと背を向けないでほしい。大人は大変なんだよ、お母さんが精一杯やっているのを分かってやって。と、アストレーア様から、同じ星仲間として星の王子に、大人の厳しい状況を説いてもらえないだろうか。



暑い夏が過ぎれば、天秤座の月がやってくる。また一つ、私は年をとる。そしてそのころに、ちょうど、働き始めて丸一年となる。一年、何とか無事にやってこられた。星の夜空を見上げて、女神アストレーアを探す……、そんな一刻の余裕を持ちたいものだ。そうよ、ワ、タ、シは、天秤座のオンナア！



エッセイスト・クラブ

母と鰻

東京都葛飾区 細谷 登美

私は鰻の蒲焼きが大好きである。

それも関西風はイヤ、鰻は何と言っても蒸して焼く関東風が絶対においしい！

あのトロけるような味は人を幸せな気持ちにするから不思議だ。それに、鰻を食べると母のことが思い出される。思い出したくなって食べるから、なお好きになる。

私は物心ついたころから（母は鰻は嫌いなんだ）とばかり思い込んでいた。鰻を取り寄せて食べるなどとは、匂いをかぐのもいやだといつも言っていたからだ。

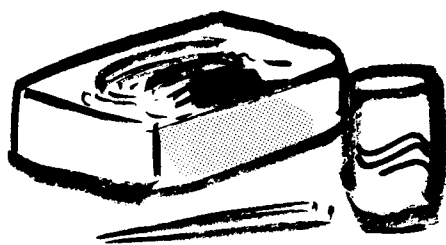
敗戦直後のころのことが、昨日のように鮮やかに蘇る。秋もたけなわのころだった。使用人も徴用に取りられ、姉たちもとくに家庭を持っていた、わが家は両親と弟、私だけだった。食料不足でだれもが苦しんでいた。そんな暮らしをしていたときにイキナリ、裂いたまんまの立派な鰻を十匹ほどもらったのだ。

家中が喜び勇んだ。例の通り母はソバにも寄ら

ないので、父が串に刺して白焼き、味付けまでしてみんなで舌鼓を打った。粗末なモノに慣らされている舌には、父のにわか料理でも、スゴイ！馳走だったのだ。

母と私でお茶碗を洗いながら、

「こんなにおいしいモノを、なんでお母さんは嫌いなのか不思議だわ」意外なことに「お母さん



だって昔は大好きだったのよ」と言う。驚いたのは私だ。

「エー？ 聞かせて、聞かせてー」私も好奇心の強いお年頃だったからしつこく聞いた。

母の嫁いだ当時のわが家は、父、舅、姑、住み込みの番頭二人、小僧、お手伝いのいるにぎやかな商家だった。跡取り息子が欲しいのに、なぜか五人も女の子ばかりが続いてしまった。

姑にもあまり好かれなかった母。

またかーという思いで、五番目の私が生まれたときはがっかりの頂点だったろうと思う。（ただし、私が六歳になるまで下が生まれなかったのだ、結局私は末っ子同然に甘やかされてしまった）

――男の子がどうしてもほしい――。

母はそれまで鰻が大好きだったのである。神様にお願いを聞いてもらうには、一番好きなものを断つのがよい。そこで一大決心をして鰻断ち、お茶断ちの願掛けをしたのだ。

そんなくらいだから、妊娠と分かったとき母の顔つきはさぞ変わったことだろう。

――今度また女だったらどうしようかと――。

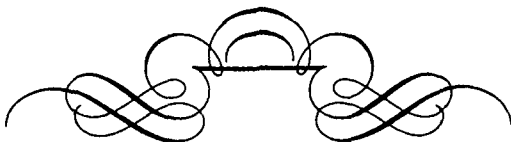
願掛けの靈驗もあらたかに男の子が生まれ、（神様のお陰）と信じている母の喜びは、いかばかり

であったことだろう。家中が大喜びで、初節句は内飾りも外飾りもにぎにぎしかったのを思い出す。



今度は無事に育つかと心配でたまらない。弟は大事にされ過ぎたせいとか、よく病氣をして母をハラハラさせたものだ。それでお茶断ちは解いたものの、鰻のほうは続けてしまったとのこと。そんなこんなで弟が小学生になるまで続けているうちに、いつのまにか匂いまでがいやになってしまったのだそうだ。

「好きだったものが嫌いになるなんて、そんなことがあるのかしら？ ほんとうに不思議ね――」



母は「自分でも不思議でしょうがないんだけど、なぜだか嫌いになってしまったのだからしょうがないわネ」とおかしがった。

こともなげにつぶやいていたが大変なことだ。母のどこにそんな執念が潜んでいたのだろうか。

わが子に気になるあまりに、ずっと我慢を続けてしまったのかもしれない。だから匂いの誘惑を恐れたのかしら？

いちずな気持ちを夫にも言わず、父は知らぬままに逝ってしまった。しかも母がこの話をしたのは後にも先にもこれっきりだったのだ。

母はとうとう鰻を口にせぬままに、十五年前に大往生をした。

母の死後、姉弟たちは「知らなかったー」と驚いていた。現在還暦過ぎた弟は、この重みをどう感じているのだろうか。

「お母さん！お母さんはもしかしたら鰻が大好きだったんじゃないの？あの世では、どうか好きな鰻をたくさん食べてね。お母さんを思い出したくなったときは、私、鰻を食べることにしようと思うの」

かくして私は鰻をしばしば食べることになるのだ。

家庭訪問

東京都世田谷区 福地 園子

―六月五日―カレンダーに力を込めて赤マールをつけ、「よし、勝負の日が決まった！」と、一人うなづく。

何のことはない。息子の担任の先生の家庭訪問である。されど……。

私は見栄っぱりだ。それも〃すこぶる〃つきの。何としても、あと一週間のうちに部屋の体裁を整えなければ、などと思う。

まずは、台所の換気扇の掃除に取りかかる。なぜ換気扇の掃除なのかといえば、わが家の悲惨な住宅事情を説明しなければならない。

間取りは二DK。玄関のドアを開けると、そこがいきなりダイニングキッチンという、一昔前によくあった安アパートである。もろもろの事情から、このダイニングキッチンに先生をお通しするほかない。で、換気扇の掃除である。

ガスレンジ、流し台と次々ピカピカに磨いていく。いつも、こうならねえ。

ここまで二日を要し、次なる段階へ。

わが家では味気ないアパート暮らしに少しでも趣きを添えようと、窓や部屋の間仕切り、家具の上などに何枚もレースを使っている。今度はこれらの洗濯だ。

繊細なものは手で洗い、あとは景気よく洗濯機に放り込む。真っ白に仕上がリ、ああ、いい気持ち、と、また二日が経過した。

そういえば先だつての保護者会の席で先生がおっしゃったつて。

「家庭訪問の際は、何もお氣遣いなく。お茶もいりません」と。

そうよ。先生とじっくりお話することに意義があるのよ。体裁を考えるなんて愚かなことだわ。と、理性がささやく。

が、しかし、私は見栄っぱりだ。ここでくじけちゃいけない。

「お茶もいらぬい」と言つたつて一応はねえ。それに形だけでもお茶づけもあつたほうがいいし、などと考えるうちに、

「あつ、そつだ。ずつと欲しかつた塗りの菓子皿を買おう。こんなときに買わずして、いつ買うのだ」と、へんな理屈をつけて渋谷のデパートに走つた。

当然よい物は目玉が飛び出すほどの値段で買えるわけがなく、そこそこの物を手に入れた。満足。

そうこうするうちに六月五日がやつて来た。

天気は晴れ。よかつた。雨だつたら洗濯物の行き場がないものね。朝からハリキツて掃除機をかけ、玄関先を掃きだし、傾いた額を直し、もう一度ガス台を拭く。

ひと休みした後、体裁づけの花と和菓子を買に行く。

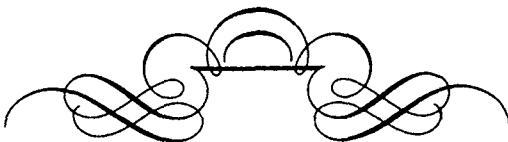
普段は一束千円の花束に決めているが、今日は白いトルコキきょうを奮発する。二千五百円也。

お次は和菓子。例のお皿に映えるのはどれかしら。〃青梅〃もいいし、〃紫陽花〃もいいな。手もつけられないと分かつているお菓子にあれこれ悩んだりするのが、見栄ぱりの真髓つてものよ、とかうそぶきながら、結局〃青梅〃も〃紫陽花〃も両方買つてしまった。

さて、花も活け茶菓もすぐさま出せるようにセツトした。部屋全体もさっぱりしていい感じ。

仕上げはこの私。

やっぱり〃いいお母さん〃て感じに見られたいもんね。(いいお母さんつて一体どういふお母さんなんだ?)それに、知的でさわやかつていう理



想像にも近づきたいし。

ほんとうは赤い口紅が一番好きなのに、それらしくするためにベージュ系をつける。白いあつさりとしたブラウスにうす緑色のフレアスカートに着替えて、ふっとため息。

もともと知的でさわやかな人であつたら、普段通りの自分でいいはずなのに。ああ、なさけない。まったくうすっぺらな人間なんだから。もっと中身を磨かなくちゃね。

おっと、深く反省もいけれどそろそろ先生の見える時間だ。

「ごめんください！」と元気に入っていた先生。真っ白で華麗なトルコキキョウなど目もくれ



ず、ダイニングテーブルにご着席。「今日はお暑かったでしょう。どうぞ」とよそいきの声で冷たいおしぼりをすすめるが、手をつけられない。茶菓も丁重に断られた。まあ、これは予想されたことだ。

さて、本題の息子の話、と身を乗り出すと、「やあ、福地くんは何も問題なく私も安心してますよ。このウチは早く済むなと喜んでやって来ました」とおっしゃる。

そんな。私はこの日のために一週間を費やしてのよ。もう少しゆっくりお話していただくさいな、と思いつつ話のネタを探す。愛想笑いをはさみながら、どうにか話をつなげ十分間はもたせた。

お帰りになる先生に「本日はどうもありがとうございますでした」と深々と頭を下げ、一週間にわたる一人よがりの大騒動はあっけなく幕を閉じたのだった。

ああ、疲れた。もう見栄なんか張らないぞ。アホらしい。バカバカしい。自己嫌悪。

しかし、この気持ちいつまで続くやら。

ほんと、私って根っからの見栄っばりだからね。

(え・カステラネン)

●サングレシンド●

ひとさまの生き方

名古屋市昭和区

犬飼好子

二三六号「ズバリ一言」星さんの「あなたはどお思いますか」について。

本名ですか。美しいお名前ですね。これだけのご意見を述べられるので、本名でしよう。

四十年間、朝日新聞の読者ということでは、少なくとも四十ン歳ですか。幾つでも構いませんが、私と同年くらいかしらと考えて、話を進めたい。

「妻や母——妻にとり——」の二人の主婦のどこが、自立していないのだろう。どういうことをもって「自立」というのだろうか。この二人に共感はないけれど、妻の座にしがみついているようにも思えない。「激流——」の主婦は、もちろん、つらい真

ただ中におられると思うが、プライドが高かったら、こんな投稿はなさらない。「子供のこと、自分の長い人生のことも考えてみたら」としか言わなかったとしたら、妻は夫を愛していなかったのではないか、という疑問が湧いてくる」については、限られた字数の中で凝縮して書けば、こういう程度になると思われる。その何十倍も、何日も話し合ったのではなからうか。

この主婦は、ほぼ自分の心が見えて、ふと考えがまとまりかけてとりまとめた、と私は見る。

ひとさまの生き方に「こうしたら」と言えない私を感じたのは、星さん、あなたにも傲慢さがなければ、優しさはあるか、ということ。

朝日ひととき欄の担当者が、年配だろう



が男性・女性であろうが（星さんの反論という文が載っていないので、この「わいふ」の投稿を読んだ限りでの話）おふたりを、かなり辛辣にあげつらい「激流——」に対するそれぞれの思いに関係のないことまで取り上げておられる文を、採用するわけがないと省察する。とても感情的に思えるから。それと、どこの新聞社も「採否、そのほかの問い合わせには応じない」姿勢をとっている。

だからといって、社の気に入る文だけをとり上げているとは思わない。

星さんのこの文も、「わいふ」だから載ったのではないだろうか。「わいふ」もこの話について、様々な意見が寄せられるであらうと期待している気がする。

「星さんのいう通り」と判断したのではないと信じてたい。

最後に「激流——」の方が、今、落ち着いた状態でおられることを願ってペンを置く。

「乳房再建」 を読んで

東京都大田区

村上恵子

とても不快になった。

彼女は再建に成功して満足しているのに、なぜこの文章が私を不快にするのか。

私もいつまでも「女」であり続けたいと思うので、彼女の気持ちを否定するつもりはない。

でも、彼女は「女」という性的存在のみに生きているような気がする。

ご主人や恋人との関係でも、信じられないくらい自分に甘い。

大恋愛の末結ばれたご主人を今は安全パイとして利用しているというのは言い過ぎだろうか？

彼女の身勝手さに読んでいてイライラして、主題である「乳房再建」もかすんでしまった。「女」である前に「人間」としての自分を考えてほしい。

文面から察すると仕事も持っておられるようにで社会での責任も果たしていられ

るようだけれど。

結婚している女が外に男をつくることを一概に否定しているわけではないが、「九年前」というとお子さんが中学生のころから恋人がいりました。

退院された日のご主人の対応に、二人の息子さんが夫婦のあり方をどう感じたかなんて責められる立場ではないと思う。

「まだ神経は本物ではないが、人間の体になれたのである」と書いておられますが、乳房を失ったまま生きなければならぬ女に対する思いやりがまったく感じられず、がっかりした。

乳房や子宮を失っても女は女だし、人間であることは言うまでもありません。

「裸のイラストに違和感」の門馬さんへ

東京都練馬区 上谷亜育

二三六号「裸のイラストに違和感」を読み、「そんなすごいイラストあったっけ？」と、思わず二三四号を引っ張りだしてそれを探してしまいました。



「あ、これかあ、……内容とかけ離れている……？ 無関係？ んー、そうかなあ」

もっと過激なヌードが目飛び込んでくるかと思っていた私はちょっと拍子抜け。

私の感想とすれば、「子供は障害物？」という投稿そのものに、共感あり、疑問ありと、考えさせられたせいか、少なくともこのひざを抱いた裸の女性画は、むしろ内容にマッチしているように感じました。裸であるということは、投稿者が考え、自身の内面、ありのままの姿を見つめていることを表していると思えたのです。

女性の裸が取りざたされるのは、それに商品価値を付加させたときなのでは？ 女性の裸は商品価値がついても男性の裸には

つかないのは、単に買う側が男だからという理由だけではない、やっぱり女性の裸が美しい、絵になるのだと思います。それが金もうけの材料になることは哀しいことです。でも「わいふ」は売らんかなのために女性の裸を載せたわけではないですよ。

一つのイラストを見る目、思いは、人それぞれ様々だと思います。何でもかんでも裸はけしからん式に考えてしまうのはどうでしょうか？ いつだったか都心の広場に置かれていた裸婦像に上着をはおらせて新聞記事に載った活動家の女性のことを思い出しました。

いろんな人がいて、いろんな感じ方があり、それらの意見（投稿）を偏見なく載せ、また新たな考えを読む人それぞれに持たせてくれるのが「わいふ」だな、と改めて思います。

女性―裸、涙の横顔にN.Oの気持ち、私はこんな場面で強く感じます。子供向け番組で、やたらセクシーな女の先生や女生徒がウインクしたり「女の子だもん、こわいワ」なんて言っているの……けとばしてやりたくなる！

悪いことは悪い！

奈良県生駒郡

高松恭子

昨年十二月の「ものを与える、買ってやる」の話し合いの中で、息子が万引きをしているという方がいらっしました。私は、おっしゃっていたご本人を含めて、話し合われていたみなさんが、たいへん寛大なのに驚きました。万引きは、はしかのようなものだと言いますが、例えば額は小さくても盗みに違いはありません。

「欲しいものがあつたら検討するから言いなさいよ、あんた、こんなことで自分の人生に傷つけるのはやめときなさい」

このお母さんは、自分の子供の人生に傷がつくからやめときなさいとおっしゃっている。もちろんそうですが、自分の子供の盗みによって傷ついたり損失を被った人のことは、どのように考えていらっしやるのでしょうか。

またある人は、「私も中学のとき、万引きしたことある。でもそれはゲームなの、完



全に」と発言していました。まあ何とあつてからかんとおっしゃっていたことでしょうか。

私は以前、「わいふ」に「泥棒体験記」という文を載せていただいたことがありますが。あれは他人がごまかした値段のものを私が買ったわけですが、今も私の心の傷として忘れることができません。私はあれ以来、H百貨店の四階で洋服を買ったことは一度もありません。あの階は、いつもそくさと素通りしてしまうのです。それは十数年以上経った今でさえ、私の中に他人の不正を見過ごしたという負い目があるから

です。勇気を持って自分自身を裁けなかった自分を情けなく思うからです。

先日この階を横切ることもなく通過した際、いつまでもあの事件の影を引きずっている自分に、やりきれない思いがしました。私は盗みということを考えるとき、いつも一つの詩を思い出します。それは次のような詩です。

チューインガム一つ

三年 村井安子

せんせい おころんにとって／せんせい おころんにとってね／

わたし ものすごくわるいことした

わたし おみせやさんの／チューインガムとってん

一年生の子とふたりで／チューインガムとってしもてん

すぐ みつかけてしまった／きつと かみさんが／おばさんにしらせたんや

わたし ものもいわれへん／からだがおもちゃみたいに

カタカタふるえるねん／

わたしが一年生の子に／「とり」いうてん

一年生の子が／「あんたもとり」いうたけど

わたしはみつかったらいやから／いややいうた／一年生の子がとった

でも わたしがわるい／その子の百ばいも千ばいもわるい

わるい わるい わるい／わたしがわるい
おかあちゃんに／みつからへんとおもったのに

やっぱり すぐ みつかった／あんなこわいおかあちゃんのかお

見たことない／あんなかなしそうなおかあちゃんのかお見たことない

しぬくらいたたかれて／「こんな子 うちの子とちがう 出ていき」

おかあちゃんはなきながら／そないいうねん

わたし ひとりで出ていった／いつでもいくこうえんにいったら

よその国へいったみたいない気がしたよせんせい

どこかへ いってしまお とおもた／でも

なんぼあるいても

どこへもいくところあらへん／なんぼかながえても

あしばかりふるえて／なんにも かんがえられへん

おそうに うちへかえて／さかなみたいにおかあちゃんにあやまってん

けど おかあちゃんは／わたしのかお見てないてばかりいる

わたしは どうして／あんなわるいことしてんやろ

もう二日もたっているのに／おかあちゃん
は

まだ さみしそうにないている／せんせい
どないしよう

この詩が心を打つのは、わずか九歳の子が、自分の心の傷をしっかりと見つめ、人の心の痛みを深く感じているからです。人間ですから、だれだって過ちの一つや二つはあるでしょう。しかし、それを語るときは、心の痛みを感じながら語ってほしいのです。あのように、あっけらかんと語ってほしくはないのです。

おそらくあのお母さんは、子供の万引きがなくなったら、「ああ、よかった、やはりはしかのようなものだった」と、ほっとされることでしょう。そして、盗まれて損を



した人のことなど、頭の片すみに思い浮かべることをされないかもしれません。

私が「子育て会議」を読んでいら立つのは、こういうところなのです。お母さん自身の生きる姿勢がしっかりしていないと、いい子育てなどできるはずがないと、私は思います。

もし、あのお母さん方にお会いになる機

会がありましたら、この詩を見せてあげてほしいなあと思いました。

それでは、「子育て会議」の今後の展開に期待しています。

のんき
「暢気な女の暢気な話」
の佐藤さんへ

埼玉県草加市

佐藤玲子

何気なく一読して、思わずくすくす笑ってしまいました。そして再度読み直し深く共感、同時に色々考えさせられました。

こんなふうを考えている女たちも声だかに叫ばないだけでけっこういるのではないかと、思います。ただやはり、今の時流にはずれているという引け目から黙して語らないのだと思います。

——ときは昔、に始まる文中の男女の姿は、そのまま私と夫の姿のようです。

出勤時、靴を磨いて笑顔で送りだし、夜の帰宅のときは家のどこにいても玄関に出迎えて夫の頬にキスをする——結婚以来二十年変わらぬわが家の習慣です。

ただそれだけで夫はせっせと働き、日曜

日は家族を乗せてドライブ、ピクニック。たまに夫婦で外食とまさに模範的な夫ぶりです。

夫の経済力に依存しているようで、実は私も相当にしたたかな面があるのかもしれない。しかし私たち夫婦にとってこの暮らしが快適なのも事実です。

私は理想の家庭像を再現しようと懸命でした。それはキャリアウーマンだった母のあまりにも強い妻という存在が、家庭を破壊してしまう現実を見てきたからなのです。経済力を持つ妻がいかに夫をスポイルし、子供をがんじがらめにするかを見てきたからなのです。もちろん母のような例はきわめて稀なことだとは思いますが。

母のような生き方だけはするまいと、母とは逆の生き方をした結果がたまたまうまくいったのだ、と思います。そんな私の姿勢が、十代で父を突然失って絶望のどん底に落ちた過去の体験とも深くかわり合っているとは思います。

ともあれ、よき伴侶、後見人、恋人、親友、父親と何役もこなしている夫の存在は私にとって一番大切なものなのです。

(え・小島佳子)

カナダの夕陽

①

清水 ふみ

◆◆◆◆◆カナダよ、お前もか◆◆◆◆◆

「キツネにつままれた」のかと思い、とつさに片手で頬を打ちそうになった。

初冬の日曜の朝、車にエンジンをかけようと自宅前に出ると、そこは正に「もぬけの殻」であった。昨日までは他人ごとと思っていたことが我が身にも起こってしまったのである。

夫の乗っているその車は九十年のダイナスティで、買ってからやっと一年経ったばかりであった。

すぐ警察に通報した後、「なぜ、家に？」という疑問と腹立たしさがこみあげてきた。

夕方、事情聴取に来た二人の警官は、防弾チョッキで身を固めていた。

彼らの言葉がふるっている。
「今日は自分の管轄に盗難車の連絡が二件あったけれど、あんたはまだラッキーだよ。もう一台は九十二年型のGMで、発見されたときは小川の中につっこまれているから、もう使いものにならないね」

車は三日後、発見された。

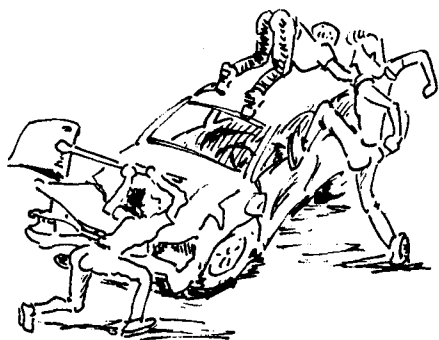
比較的我が家に近い住宅地で、夕方、凄惨勢いのまま急ブレーキをかけて止まった車があり、その中から三人の少

年一十五、六歳の白人一が逃げているのを近所の人が見つけ、警察に連絡したのである。

トレンジャー
牽引車が我が家の前にダイナスティを引っばって連れて来たときは、ただ啞然とするばかりだった。

前の部分はベチャンコ。前輪のタイヤ二本はドーナツを半分に割ったような状態で、こんな無残な姿の車がよく走っていたものだと思えるばかりだった。

牽引車の運転手に話を色々聞くと、このS市だけでも年間三百台からの盗難車があるとのこと。その多くの理由は盗んでお金にするよりも「破壊するだけのたのしみ」のためだという。



もちろん盗む連中のほとんどは十代^{ティーン}だという。

車の修理代は、六千ドルかった。

十二年前、カナダに来たころ、犯罪というのは「アメリカの十八番」だと思っていた。

ほんとうにカナダはよい国だった。

それが今や「アメリカに追いつき、追いこせ！」の感がする。

そんなことがあって、今までテレビや新聞の中の話と思っていた青少年犯罪が、身近なものになってしまった。実態について親しい人々から話を聞いてみると、それは随分頻繁に起こっていることがわかった。

Sさんの場合、被害は約二千ドルの装身具だった。家から出かける前「イヤな予感」がしたという。その日は向かいの学校がP・Aデイ（教師たちの研究日で学校は休みになる）であり、外にたむろしていた十四、五歳の少年たちにSさんは出かける姿を見られてしまった。買物もそこそこに急いで帰宅すると、玄関はきちんとしていた。二階に上がる。タンスの中がかき回されていた。出入りには家のサイド・ドアを使ったらしい。

Gさんの事件は、我が家に遅れること二カ月あまりで起こった。

アパートのガレージに泥棒が入ったのである。十台の車のガラスをことごとく叩き割り、中に入っていた貴重品を一台のバンにまとめて乗せ、そのまま逃走したのである。

とく叩き割り、中に入っていた貴重品を一台のバンにまとめて乗せ、そのまま逃走したのである。

十五、六歳の少年たち四人は、二日ほどでつかまった。二台のカメラとスキー一式を盗まれたG氏は、それらは取り戻せるのか、と警察に尋ねた。「そんなことは保険会社に聞いてくれ」というのがその答である。

彼らだつて増加するばかりの殺人など重大事件で忙しく、泥棒などにはいち構ってられない。盗まれた方が悪いが、不運だったのだ。

自動車修理工場とマフラーショップを経営するSさんのところに泥棒が入ったときも、十七歳の少年はすぐにかかった。

S氏が親のところに談判に行くと、日本人には考えられないようなセリフが返ってきた。「オレがやったことじゃない。関係ないさ」

これらいずれの事件も犯罪者たちは未成年で「青少年犯罪法^{ヤング・オフエンダーズ・アクツ}」でしっかりと保護されている。やっている本人た



ちは、それを重々承知しているのだ。
Mちゃんはハイスクールに通う日本人の女の子で、彼女から時々学校の様子を聞いたりする。その口から出るセリフにはまったく、ギョッとさせられる。「ある男の子たちは言っているのよ。『今のうちならイヤな奴を殺したってった三年さ』って」

そうなのだ。未成年は殺人をしたって、たった三年牢に入れば、もう自由

なのだ。だから泥棒ごときは軽いものの場合、調書さえとらない。そんなものをいちいち収容していたら、牢屋はいくつあっても足りない。

加えて個人主義のこの国では、罪人に対して日本のような「社会的制裁」はない。だから一家に犯罪者を出しても「子供は子供、親は親」でまったく別の話であるから「関係ない」のである。

◆◆◆◆◆ 十四歳のコンドーム ◆◆◆◆◆

青少年と性の問題にしても、日本の同世代と比較して大きな違いを認めざるを得ない。

最初の驚きは数年前、子供たちの通う日本語学校のトイレで出会った。この日本語学校はハイスクールを土曜日だけ借りて運営されている。

ある日子供を連れて女子用トイレに行くところ、壁にポスターが張ってあった。
「Pregnant? Need help?」
「妊婦さん? 助けが必要ですか?」

大学ではない、高校生のトイレである。

「ヘルプ」とは中絶させるのだろうか?

こうしてドロップアウトした若い連中の間では、「犯罪はやったほうがトク」という感じにさえなってしまうた。

新聞を読んでいるとショックの連続だ。

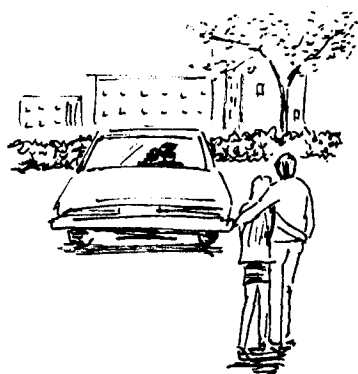
ハイスクールのロッカーの中からマシガンや各種の銃が押収されたと、まるでマフィアの世界の話が子供たちの間で起こっている。

それとも生ませて里子に出すのだろうか?

二年ほど前の「避妊具論争」も、新聞をにぎわせたものである。学校に避妊具の自動販売機を設置するか否かについて、連日新聞紙上は騒然としていた。

子供の曰く「避妊具を薬局に買いに行くなんて恥ずかしくてできない。それぐらいなら(コンドームの)盗みをする」「学校に販売機を置くことで、性病や妊娠を防げる」云々。

親たちの多くは設置に大賛成だ。そ



れによって病氣や妊娠が防げるのだから。

それでも良識ある一部の親からは、少数ながら反対があった。

「これはフリーセックスを認めることになる」

結果は多数派の言う通りになった。

こうして十四歳の少年たちも誰はばかりことなく避妊具を買って、セックスをエンジョイできるようになったのである。

たまに人生相談を読んでいると面白

い。あるときは「十六歳なのにまだ処女なので恥ずかしい」という相談だった。

またあるときは母親からの相談で「十五歳の息子が十三歳のガールフレンドに夢中で、勉強も手につかず困っています。彼らはすでに肉関係があります。云々」

不惑を過ぎた私は、もうオバタリアンだから若い連中の考えや生き方を理解できなくても仕方ないかもしれない。けれどこんな記事を読んでいると「一体どうなっているの?」と大声で聞いてみたくなる。

十三歳の少女といえ、今はまだバービー人形で遊んでいる我が家の長女も、あと三年したらその年になるのだ。

歯止めがなくなつた子供たちのフリーセックスが、どこまで暴走していくのか?

それは対岸の火事として見ている限りは面白い。でも冷静に考えれば何とも末恐ろしい。

先日ニュースは、正に恐怖だった。

テキサスにある生徒数が二百人に満たないハイスクールで、六人ものエイズ患者の生徒が出たのである。こうなるともうS Fの世界という気がする。デトロイトと国境を挟んだ対岸の町ウインザーで起こった事件も忘れられない。

十九歳の父親と十七歳の母親であるカップルが、もうすぐ一歳になる我が子を川に放り込んで溺死させたのである。お決まりのように彼らはウェルフェアをもらっていた。あまりに多くの人がこの保護をもらっているので、カナダはそのために破産寸前である。でもこれをカットすれば、殺人や強盗が増えると思われているので止められないのが実情である。

日中から酒びたりの若い父親は、暑い夏の日その泣き声に我慢できず、ついに乳児を川に投げこんでしまったのだ。

「性」がイコール「生」につながるのなら、セックスには責任が付きまとうことを、子供たちは知る必要があるのだ。

◆◆◆教師の権利と子供の幸せ◆◆◆

どうしてこんなに子供たちが荒れているのだろうか？

子供の世界が家庭と学校から成り立っていること、そして「子は親の鏡」であるなら、原因はそこにあるといえる。

子供について語るとき、ノースアメリカにおける家族の崩壊を抜きにしては語れないし、学校の質の低下も見逃すことはできない。

まずは彼らが毎日通わなければならない学校の問題について、体験したことから取り上げてみたい。

大人でも子供でも、風邪など病気をしたあと「病み上がり」という状態がある。熱も咳も納まったけれど、体力はすっかり回復してはいない。それでも仕事や勉強が遅れないよう出かけなければならぬ。トロントの場合、冬の平均気温はゼロからマイナス十度の間くらいである。学校での休み時間、子供たちは一斉に外に出なければならぬ。フレッシュエアを吸うためという

が、実際教師たちがしっかり休憩をとるために、子供たちは一人も教室に残っていないはならないのである。(戸外には当番の先生が二、三人いるだけだ)

長女が一年生だったころ、ひどい風邪をひいてしばらく学校を休んだ。やっと回復したので登校することになったが、母親としては寒い戸外での休み時間のことが気がかりだ。

そこで先生に手紙を書いた。「この子は病み上がりですので、お手数ですが休み時間は教室に置いてください」とお願いしたのである。学校が終わって帰宅した子供に聞いてみた。「今日の休み時間は、教室にいたの？」「いなかった。だって先生が休み時間はみんな外に出なきゃいけないと言ったんだもの」

私には、母親でもありカソリックスクールの先生でもある彼女の態度が、よく理解できなかった。

幸い、長女はその後風邪をぶり返すこともなく元気になった。

しばらくして毎月ごとに来る学校からのお便りに、こんなことが書かれていた。

「時々学校に対して病気などの理由で、休憩時間に子供を教室に置いてほしいという連絡がありますが、戸外に出られないような状態の子供は家で休むこと」そして私は理解をした。学校において一番大事なことは、先生の権利であることを。

次の体験は、つい最近起こったことである。

もうすぐクリスマスも間近という雪の日、次女が大声で泣きながら帰ってきた。帰宅してもしばらくは泣きやまない。一緒に帰ってきた長女とその友達であるジャマイカ系のシェリーから話を聞いてみた。それは、こうである。

帰宅途中、長女のクラスで一番頭がいいという中国人の男の子ドミニクと、その腰巾着である白人の男の子デリックが、次女の帽子を取って泥の中に投げたり、足をかけたり蹴ったりしたというのである。二人の少女たちが止

めたがあまり効果はなかったらしい。こういう話はどこでもよくあることだが、母親というのは馬鹿なもので、この話を聞いたとたん、血が頭に逆上してしまった。

急いで子供たちを車に乗せ、学校までふっとばしオフィスに行った。校長は不在だったが副校長がいたので、ことのあらましを告げ善処を望むと息も荒く伝えたのである。

家に帰ってから腹立たしさはおさまらず、今度は熱心と定評のあるクラス担任に手紙を書いた。「今日、下校途中こんな事件がありました。何もしていない一年生の子供を、四年生の男の子たちが乱暴したのです。このようなことが二度と起こらないよう、先生のほうからもくれぐれも注意してください」そして次の朝この手紙を長女に持たせた。

帰宅早々、学校での様子を子供に聞いてみた。「ミセス・マックレーンは何か言ったの?」「何も」「手紙は、どうしたの?」語気が強くなる。優柔不断

BUDGET

High school teachers vote 70% to endorse work-to-rule

By Susan Walker
TORONTO STAR

Metro Toronto's 8,500 high school teachers have turned up the tension between their union and the Metropolitan Toronto Board of Education with a 70 per cent vote in favor of a work-to-rule.

The ballot count in yesterday's in-school vote showed 5,202 teachers in favor and 2,216 against a proposed "strike action," which union officials said referred to a work-to-rule campaign.

The teachers, members of the Ontario Secondary School Teachers' Federation, are in a legal position to cancel all activities outside of classroom hours, including coaching, marking of papers, student consultation or accompaniment on student trips five days from their vote.

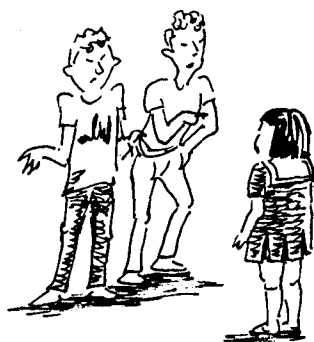


MAE WAESE: Denies that board is hiding funds.

でおっとり屋の長女に腹が立ってくる。「見せたわよ。でも何も言わなかった」そんな馬鹿な!「それでドミニクたち

はどうしたの?」「ドミニクやデリーク、シェリーそして私たちも校長室によばれて、どんなことが起こったか話

教師の勤務条件に関する記事



をさせられたの」「ちゃんと話はできたの?」「うん、あったことを言った。でもドミニクたちは絶対やらなかったと言っていた」途中からシェリーが口をはさむ。「だってもしやりましたと言ったら、登校停止にされちゃうもの、絶対言わないわよ」

そうなのだ。この国ではよいにつけ、悪いにつけ「自己主張」を小さいときから叩きこまれる。子供たちが幼稚園

時代からやっていた「ショウアンドテル」を思い出す。どんな子も人前で自分を主張する。これが個人主義の世で生きていく基本なのだから。結局、学校でのお裁きは男の子たちの自己主張の末、うやむやに終わってしまったらしい。担任はまったく関知しなかった。長女よりもずっと口のたつシェリーが、頑張って発言してくれたらしいが、どこでも勉強のできる子のほうが優位にたつようだ。

このあと、腹の虫のおさまらぬ母親は、デリークの電話番号をやっと見つけた。そして夫に電話してもらい、向こうの父親に話をつけてデリークに謝らせた。秀才のドミニクのほうは連絡つかずじまいだった。

この事件では、学校というものがどんなものか、大きな発見をすることができた。すなわち担任の教師というのは、勉強(科目)を教えるだけであり、モラルは一切関知せずということだった。日本で教育を受けて育った私には、ショックだった。日本の学校の荒廃も

マスコミを通じて色々聞いてはいる。けれど人生の基本を作っていく小学校の先生が、勉強以外のことは何が起ころうと関知せずというのは、どういうことだろう。

そして改めて青少年たちの荒廃の原因の一つが、ここにあることを知ったのである。

先生たちが賃上げを要求して何カ月でもストを起こすこの国では、子供たちの勉強は遅れるばかりだ。それでもあいかわらず「関係ないよ」と言い続けるのだろうか?

ついではながらストにからんでの教師たちの要求記事を紹介したい。

先日ハイスクール教師たちの勤務規則について、投票が行なわれた。その中にはスポーツなどのコーチ、あるいはテストや宿題の採点、学生相談など教室外での一切の活動を拒否する権利(法的立場)はLegal Positionと述べている(が主張されている)。

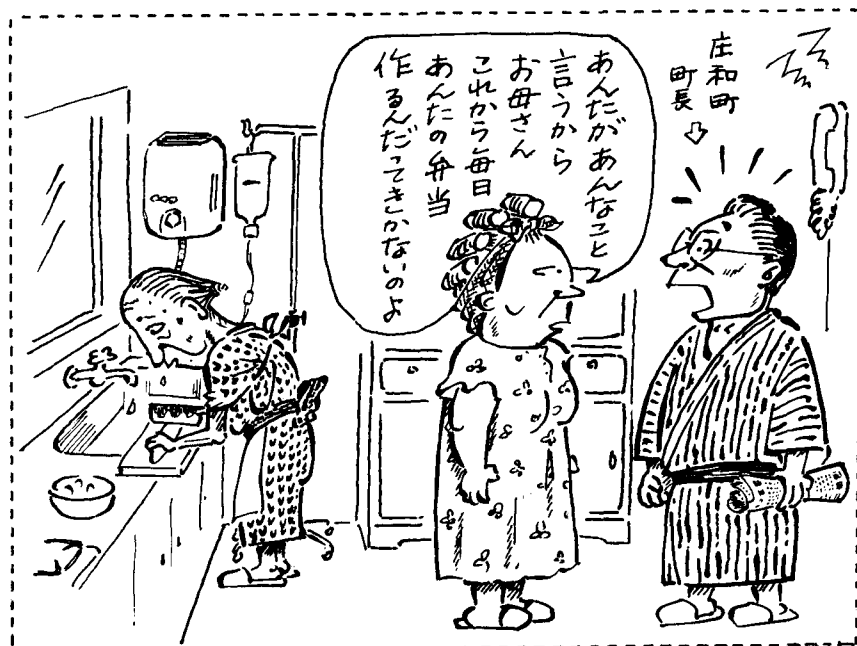
ーつづー

(え・西田淑子)

平成 おたまたげ-ジョン

③ 弁当復活

「給食の使命は終わった！
弁当こそ、母子の愛の絆」
— 埼玉県左和町・町長



新連載

わが青春の宝塚

東京都三鷹市 豊城 智子



ついに合格

昭和五十二年四月八日。忘れもしない宝塚音楽学校の合格発表の日だった。六十五年の伝統を持った薫^たのからまる校舎の前庭で、私たちは発表を待っていた。生徒監の先生が巻紙を持って現われた。TVカメラが何台もズームで寄ってくる音が聞こえる。今年は「ペルバブーム」のせいで一〇四六人が受験したのだが、合格はたったの五十人。史上最高、二十一八倍の難関である。TVや新聞・雑誌あらゆるマスコミが取材に来ていた。

悲鳴に近い叫び声、鳴咽^{おそ}、わけの分からない怒号。そんな中で、サラサラと巻紙が解かれ、名前が張りだされていく。

もう巻紙が終わりに近づいたところ、
四八九 三澤 智子

「あった! あったあ! きゃーあったよ。あったあああ!」

ほんとうにあった。私の名前だ。どうしたらよいのか分からない。人込み

の中、夢中で母を探した。

同じ稽古場から来たあの子が泣いている。そういえば名前がなかった。泣きながらTVのインタビュに答えているあの子も稽古場が同じだった。あの子は確か名前があったはず……。

こうして私はタカラジェンヌになる第一歩を踏み出したのだった。

母の気紛れが運命をかえた

思えば長い道のりだった。ここまで来るのにどれほど苦労しただろう。

初めて宝塚を見たのは中二の夏休みだ。演劇好きな母に連れられて、幼いころから子供ミュージカルや木馬座や様々なものを見せてもらっていたのだが、宝塚だけは見たことがなかった。

母のほんの気まぐれであった。

「ちょっと癖が強いから嫌いかもしれないわねえ。まあ一度は見ておいてもいいかもしれない」姉と私は母に連れられて、日比谷に足を踏み入れた。

ところが妙に癖の強い私は、嫌いどころかとりこになってしまった。姉は

淡々と見ていたというのに……。

中学を受験したとき、あれほど作家になりたいと言ったではないか。小学生のときからの夢だったと言っていたのに……。その舌の根も乾かぬうちに、「宝塚に入りたい」と日夜口にするようになった。

六歳からやっているバレエだって、レッスンは大嫌いで、発表会だけは張り切るような子だ。両親はそんな厳しいところに入れるわけがないとたかをくくっていた。だけど私は反対に「あんなに発表会が好きなんだから舞台に向いているに違いない」と思い込んでいた。高等部に進級するころ、私の決心は固まっていた。「絶対入ろう。いや入りたい」

私の通っていた明星学園という学校は、かなり変わっている。現在の学校教育というものを真っ向から否定しているようなところがある。世間で行なっている六・三・三制ではなく、四・四・四制で、十二年間一貫教育。例えば高校一年は十年生である。校風も自由で

生徒も個性的な連中ばかりだった。

高等部に進むと、ほとんどが単位制。必修科目さえ取れば、後は自分でプログラムを申告する。私は週に十二時間の音楽の授業を取った。オペラや音楽通論・声楽などあらゆるものがあったのである。

宝塚の受験科目は、声楽・バレエそして面接である。六歳からバレエをやってきたのだからバレエはまあまあできる。だけど声楽はまったくやったことがなかった。しかし親に声楽を習わせてほしいとは言いつけなかったのがある。ともかく学校でできる限りのことはやろうと思った。



受験直前の夏休み、姉(左)と

宝塚の受験資格は、中卒から高卒まで。つまり四回のチャンスがある。中学を卒業してすぐに受験する気はなかった。私には三回しかチャンスがなかった。一回で受かる者などほとんどいない。私も高校くらいは卒業したかったので、最初から三回計画でいこうと考えていた。



三沢智子 みさわ・さとこ

① 3月3日②東京③明星学園高
④159 ⑤邦月美岐、真南ひろか
⑥47年『ザ・フラワー』⑦おき
ゃんな役、情熱的な女役⑧イン
テリア小物、舞台用アクセサリ
ー⑨ストック⑩おすし☆ほかの
人でも出来るような娘役ではイ
ヤ、とはっきり言う個性派。

落第の連続

高一修了時に、「ともかく試験場を見にいっただけでいいから」と親を説得し、受験させてもらった。当然見事に落ちた。熱病のようなものだから、これであきらめると親は思っていたようだった。ところが熱病の症状はさらに進ん

でいく。

「ともかく声楽を習わせてほしい」と朝な夕なに言い続け、根負けした親は「やるだけやればあきらめがつくに違いない」と声楽を習わせる羽目になった。

とりあえず学校の先生に個人レッスンに通った。どこからか情報を仕入れてきて、元宝塚の先生だったというK先生のバレエのレッスンも増やした。一年間の勉強を終え、高二修了時に二回めのチャレンジをした。

今度は、一次試験に通った。二次試験は本場宝塚まで行かなければならない。十六歳の娘を一人旅させるわけにもいかず、親は渋々ついてきた。しかし二次試験で落ちた。落ちたときは悔しくてチョッピリ泣いたが、平気平気。だって計画どおりだもの。来年受かれればよいのよ。私は高校を中退する気がないのだから……。まだ余裕があった。

頑張りにつぐ頑張り

高三の一年間は地獄のような日々だった。今振り返ると、もう二度とあん

なに頑張れないと思う。宝塚音楽学校の元校長先生のお嬢さんがやっている声楽の教室から、かなりの合格者が出ているという情報をまたまた仕入れてきた。どうしてもそれに通いたい。親に頼み込んで、その教室に行かせてもらった。

「またなの？ レッスンだってただじゃないのよ」母はぶつぶつ言いながら何とか費用を出してくれた。

ところがここに来ている人というのがほんとうにすごい。実力もすごい人ばかりだったが、親がこれに輪をかけているのである。どうしても娘を宝塚に入りたいという人ばかりだった。ともかく熱心。レッスンには当然ついてくるし、その服装だってびっくりさせられた。冬は毛皮を羽織ってくるし、金と暇を持て余している、ステージママみたいな人ばかりなのである。

H先生は二期会にも所属している、M音大の講師だった。ほかにも色々な音大で教えているらしい。先生はほんとうに厳しかった。一週間の間に、よほ

ど自分でレッスンしてこないと見てくれないのである。ところがこちらは、高校に行きながら四つの稽古場を掛け持ちしているのだから、帰宅は九時十時になる。

声楽の音取りというのは、ピアノがなければできないのだ。しかし野中の一軒家に住んでいるわけではないのだから、夜十時にピアノを弾くことは許されない。仕方がないので、朝六時に起きて、七時に学校に行き、音楽室のピアノを借りて、音取りをした。それをテープに吹き込んで、稽古場の行き帰りに聞いて覚えた。そして学校の先生に授業で聞いてもらい、その先生の個人レッスンで歌いこんで、ようやくH先生のレッスンに持っていった。

親はそれでもまだ、半信半疑である。受かるわけがないと思いついでいた。そして出てきた条件が、大学受験だった。もう体は限界だったが、スポンサーの言うことには逆らえない。レッスンの比較的空いている日に、受験用の補習授業を受けた。夜用の弁当まで



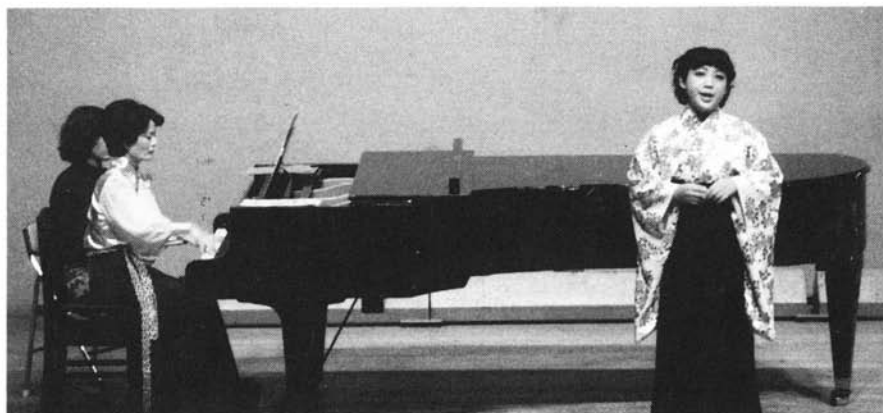
昭和53年1月 予科文化祭に鼓笛で出演、右から2人目

持参して学校に行く日々が続いた。

宝塚受験が半年後に迫ったころ、H先生に宝塚現役のA先生にバレエのレッスンを受けるよう言われた。その前に入学したらずる必要になるから、ピアノのレッスンに行くように言われ、小学校のとき辞めたレッスンを再開したばかりだった。もうすでに五つの稽古場を掛け持ちしている。月謝だってとんでもない額になっているはずだった。とても親には言い出せない。暗い気持ちで稽古場を後にした。

翌週、H先生から「どうするの?」と聞かれ、わが家は親があまり乗り気でないこと、もうレッスンも手一杯だということを書いて断った。結局親には言い出せなかったのである。H先生は、カンカンに怒った。

「まったく素直じゃない子ね。私だって見込みのない子にそんなこと言わないわよ。少しでも見込みがあるから言っているんです。あの先生は過去の受験問題もやってくださるのよ。そんなに不熱心ならもう来なくていいわ」



昭和53年3月 本科声楽発表会、舞姿で

その日は泣きながら帰った。だけど、親には言い出せなかった。それからH先生のレッスンには通った。けど何となく行きづらかった。受験の三カ月前、もう一度先生が言った。「A先生のレッスンに行きなさい」もう断れない。

親もとうとう押し切られ

恐る恐る親に言い出してみた。当然親はいい顔をしなかった。でも悲壮な顔をしている娘が哀れだったのだろう。どうせ後三カ月じゃないか。親としても乗りかかった舟である。もうやるだけやってだめならあきらめもつくだろうと思っただけに違いない。渋々ながらそのレッスンに通わせてくれることになった。結局こうして六カ所の稽古場を掛け持ちした。しかし、三学期に入ると学校のほうはほとんど行かなくていい。受験勉強と、稽古場通いの日々が続いた。大学の受験が始まった。私は三校を受験した大学の演劇科に合格した。これで晴れて宝塚の受験一本に絞れる

タカラヅカ



夢の国にあこがれて集まった「タカラジェンヌ」の
タマゴ。宝塚音楽学校の生徒たち＝同校屋上で

ことになったのである。

三度めの受験がやってきた。まさに背水の陣である。宝塚は最後のチャンスだったし、大学はすでに決まっていた。「絶対払い込まないでよ」と私は言ったはずだが、親は大学の入学金を払い込んでいた。大学に行かせたがっているのは、火を見るより明らかだった。こうして試験会場に向かった。これでだめならしょうがない。私も腹をくくっていたせいか、割とリラックスして受験できた。それが幸いしたのか、順調に一次二次とクリアーし、最終面接を迎えた。

といっても、全国から千人の少女が集まってきている。みんな余裕しゃくしゃくである。受験予備校的な、H先生・K先生・A先生から来ている人だけでも百人はいるだろう。中には、試験官の先生の個人レッスンに通うため、毎週末に東京から飛行機で宝塚まで、レッスンに来ていたという熱心な子も十人くらいいた。

私だって、精一杯やってきた。だけ

どやっぱり気後れしてしまう。発表の前の晩は、何ものどを通らず、眠れなかった。

発表の日は、桜が満開だった。宝塚には学校へ向かう道と、劇場に向かう二本の道だけが、盛り土をしたように小高くなっている。ここは『花のみち』といって両側に桜がこぼれんばかりに咲いている。この道を通って発表を見に行くのだが、TV局のカメラが待ち構えている。「受かる人だけを撮ればいいのよ」と、少々自信をなくした私は半べそをかきながら、わざわざ裏道を通って音楽学校へ向かった。

だけど、今ここに私の名前があるではないか、ほんとうにほんとうに私の名前なのか、確かめるために母を探した。くしゃくしゃの顔をした母がそこにいた。

「ほんとうによくやったね」

母に言われて初めて、合格を実感したのだった。

— つづく —

(写真提供・筆者)

オレたちのクラス異常だぞ

東京都 琴 天音

慢性化していった小学校 三年生の暴力

小学校三年生の次男のクラスが荒れているのを知ったのは、一学期最後の保護者会のときだった。起爆薬となったのは、問題を起こしては転校を重ねてきたZ君だった。

Z君はからかわれるとカーッとになって、授業中でも相手にコンパスを投げつけた、頭のとっぺんに鉛筆をつきたてた、傷口が化膿するほど噛みついた。「Z君から悪いことをしたのは一度だけだ。いじめるみんなが悪い」と、次男は言い切った。

お父さんが病気になり、別れていたお母さんに引き取られたという理由で、さよならを告げることもなく去っていったZ君の転校で二学期は始まった。行く先々で同じような問題を繰り返すだろうZ君の後ろ姿に痛みを覚えたのは、私一人ではなかったろう。

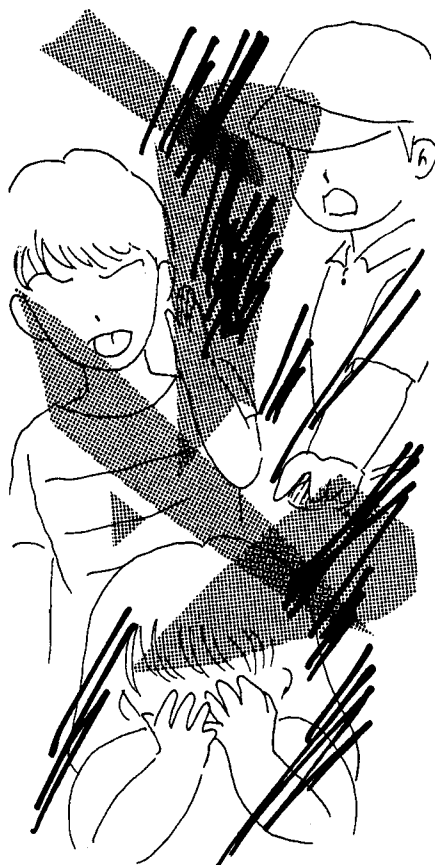
しかし、三年×組の暴力はすでに慢性化し、日々子供の心をむしばんでいた。三年×組に入った途端、子供たちの人格が変わってしまふようだった。以下授業中の風景。

連鎖反応で起こる絶え間ないけんか。常に誰かが立ち歩き、教室から出たり入った

りする。一メートルと離れていないのに相手の声が聞こえない騒々しさ。担任の先生を呼び捨て。先生に黒板消しを投げつける。などなど。

給食時には食べものを投げ合う。休み時間には、いきなり理由もなくクラスメイトの頭にバケツで水をかける。カバンを落とす。横からたんこぶができるほどパンチを喰わす。だれかれのノートを構わずこっそり破く。などなど。

「あたしたちの教室、授業中に机が飛ぶの」と、学校に行きたがらず、吐いたり、自律神経失調症で熱を出す女子が出てきた。クラスの男子の三分の一にあたる七、八人の



男子が主に暴力を振るっていたのだが、その子たち自身も、学校へ行くのを嫌がっていた。「男ってバカよね」と、暴力を非難する女子からも、「バカ、死ね、ぶっ殺すぞ」という言葉が、頻りに口をついて出た。

太った気の弱いD子ちゃんがクラスで一番いじめられ、肘でゴリゴリやられ、体じゅうあざだらけになった。いじめられていたD子ちゃんを見て涙を流した先生は、なぜ小学校三年生の暴力をとめられなかったのか。

三年×組がそこまでひどくなっているとは、私を含めほとんどの親は、二期期末最後の保護者会まで知らなかった。子供は、自分がよっぽどひどい目に会わない限り、イヤなことは話さないものだ。「どうなってるの？ 三年×組は？」と聞く私に、次男は答えた。「オレたちのクラス異常だよ。でも友達はいるからなあ」

子供を養めるでもなく、権威をもって叱るでもなく、同じことを何度も繰り返すメリハリのない先生の口調には、子供でな

くとも大人でもイライラしてくる。ひからびた授業をするばかりでなく、生徒の質問を正しく聞きとるという、教師としての基本的テクニックさえ欠如していた。教師として云々という以前に、人とコミュニケーションをうまく持てないのだ。話の内容のみならず、声の調子、体から伝わってくるすべてのものが、無彩色なのだ。

二十二歳からこのかた勉強しなくとも、二十年間先生と呼ばれてきた悲しさよ。四十代は、自分に磨きをかけてこなかった人のボロが出る年代だ。

署名集め

長い間つんば枝敷におかれていた親たちが動き出し、校長、教頭も出席という臨時保護者会が開かれた。ところが一週間前までは、助けてくれと悲鳴をあげていた先生が、教頭と口をそろえ、前回の保護者会の後、親が注意したのが功を奏し、子供たちは良くなったと、つくり笑顔で言い出した。この後、事件が起こるまで、良くなったと言いつつ、それを信じる親まで出る始末。子供たちがイライラする原因（先生

との関係)がそのまま、良くなるはずはないし、親の注意だけですぐ良くなるなら、だれも子育てに苦労しない。

このままだらうたら、子供たちの心はもっと荒み、だれかがひどい怪我をする、そのときには学校に責任ある態度をとってもらおうと、私は臨時保護者会における教頭発言、ダンマリを通した校長の無責任な態度を、教育委員会にも持っていきけるよう記録し、学校にも提出。さらに夫のアドバイスもあって、事実確認の署名も集めることにした。

署名の必要な事実確認書と、事情を訴える意見書と二つに分けて書いた。八人回したうち七人が署名してくれた。それらの文書を書くにあたっては、友人の教師、学童保育の先生、正しい情報を与えてくれそうな人たちの意見を聞いた。

学校の太鼓持ちが三人いて、私はその三人から睨まれていた。その中には自分の子がいつも騒ぎの渦中で、被害者と加害者を繰り返している人もいた。なのに、三年×組の問題は、L先生云々ではなく、各々の家庭での親子の話し合いのもとで、多少の

ことは我慢しようという主張の人に、金魚の糞のようにくっついていた。

(あなたは、父親もまじえ一学期から子供と話し合いを繰り返しているのに良くならないと、泣いていたじゃない。私の息子は、ある意味で騒ぎの外にいるんだから、私が太鼓持ちになったっていいのに逆じゃない?)と、言いたくなった。

「そんなに一生懸命やって琴さんのところでは、どのくらいいいめられているの」とある人から聞かれた。「いいめられても、いじめてもいないようだし、回りに同じる子じゃないけれど、暴力に対して無感覚になってゆくことが、おそろしいの。子供たちがこんな風にならざるを得ない状況が許せないの」

後にL先生から聞いたのだが、次男も授業中ある子からずうとつつつかれていたときがあったが、お返しせず、一言も発しなかったの、見兼ねて「やめろよ」って言っているのよ」と言ったそう。そういえば、「先生はいつも『暴力はいけません』って言うよ」と、真顔で話していたときがあった。

頬に四つまたのフォークの跡が

署名を校長に持っていこうとしたその日だった、事件が起こったのは。先生のいない束の間に、三人の男子が教室のストープで、フォーク、ハサミ、ホチキスを焼いていた。一人は、いきなりフォークを、そばにいた三人のクラスメイトの頬に次々と当てた。一人は、クラスメイトのものに当てた。一人は自分にやって熱かったので他の人には当てなかった。太鼓持ちの一人の子も被害者だった。だががやったかと、先生はいつも名前の上がる子数人に尋ねると、やった子は「ノー」と答えた。

一緒にしゃべっていた友達に頬にフォークが付けられたのを目の当たりにした次男は、「あんなこと見たくないよ」と、顔を曇らせた。クラスの男子三分の一のだけれどもが加害者に、そしてクラスのどれもが被害者になりうる可能性があった。こんな事件が起こらないうちに、三晩ろくに寝ずに事実確認書を書いたのに。

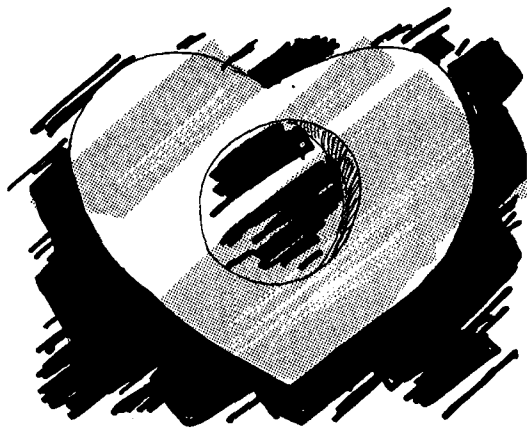
私は事件を知ってすぐに事実確認書と署

名を校長とし先生に提出。翌日からの三年×組の安全を保障してほしい旨を電話で、さらにもう一人の母親に呼びかけ文書にもして述べた。

その結果初めて学校から「申し訳ありません」という言葉を聞いた。が、安全を保障する回答はなかったので、二日後の臨時保護者会まで、次男を休ませた。その臨時保護者会においては、学校の今までの対応の反省とこれからの対応、保護者への要望に焦点を絞り、無駄なことをしゃべって話を長くしないでくれ、と電話で校長に言うておいた。会は土曜日に開かれたのだが、以前私が「父親も話し合いに参加できるように土曜日にしてほしい」というのが、功を奏したのだ。私の夫も含め、五人の父親が参加した。

さて会では、校長、教頭がし先生に代わって、四教科を三年生末までみるという案を学校から提案してきた。学校側は無条件に自分たちの非を認めた。にもかかわらず、親たちが騒いだ時点で学校がまともな対応をしていれば、今回の事件は起こらなかったのだ、学校の責任問題なのだ、とい

うことを認識できない親が多いことには驚いた。被害者側には、火傷の治療費は学校ではなく、加害者側が払うと知っている人も何人かいた。



一カ月後の授業参観のとき、先生の質問に良く答えられなかったY君が頬を染めたら、フォークの跡が一層赤く浮かび上がった。耳のつけ根に跡があったので、後ろから忍び寄ってやられたのだと、分かった。

四年生になつて

通常だったら三、四年は同じ担任だが、四年になったら担任は変わるだろうか、というのが親たちの関心事だった。

四月の担任発表日、バンザイ。し先生は、何も知らない新一年生の担任。三年×組のうち六人の妹弟が、私の三男も含め、新一年生だった。問題に積極的に向き合った親の子三人は、し先生の担任から逃れられ、影口は言いながら、おとなしく騒がなかった親の子三人は、し先生の担任だった。その中には、「琴さんの言うことは尤もだけど、署名はできない」と、断った人もいた。言うべきことは筋を通して言ったほうが勝ち、ということを確認。

四年×組の担任は、やりたい放題やってきた子供たちをしっかりと統制できる先生になった。厳しいだけでなく、ギターを弾いて、皆と歌ったりもする先生だ。

「今回のように親の勝利というのは珍しいケースよ。父親も含め多くの親が騒いだこと、それに七人の署名が効いたのよ」と友人の教師がいった。（え・田村幹代）

第五回子育て会議

これでは子供を生めない

●出席者

木村 澄子

河野 道子

小林けさみ

福田 幸子

三島 梨香

●編集部

和田 好子

●司会

田中喜美子

司会 今日の「これでは子供を生めない」というテーマは、露骨にいうと、子育ては

引き合うかという話なんです。経済的にも精神的にもモトがとれるかというエゲツない話なんです。みなさん、どんなふう
に思っているのでしょうか？ 今日は何
を話そうと思ってお見えになりましたか？

●母性本能はつぞ！

福田 私は子供のおかげで変わってきたし、自分自身も成長してきたという思いがあるんで……。

司会 じゃあ、まず、よかったところ、プラス面から。

福田 私は人と話したり、人前へ出るのが

好きじゃなかったんですけど、やはり子供ができたらしうはいかなくなつて、三人育
てている間に学校の役員をしたり、ほ
んとうにどこへ行つても何にでも興味を持
つようになりました。それまでは自分の印
象だけでわりと決めていたんですが、人は
付き合つてみなきや分らないなあ、とい
うことも分かつて。

司会 結婚なさつてからは専業主婦にな
られたわけですか。

福田 はい。三人めの子供が一歳半まで
はずっと家にいました。

司会 今お仕事は？

福田 しているんですけど、友達と一緒にやっていますので、私の暇なときに仕事に行っているんです。月に十日出れば、すごく働いたなあという感じです。

司会 楽ですねえ。

福田 私の結婚前を知っている人は、ものすごい変わりようだと言います。母や姉は一八〇度変わった、もともとあった素質を一緒になった人に引き出してもらったんじゃないの、と言いますけど、私は子供のおかげだと思っています。

司会 なるほど。ありがとうございました。じゃ、河野さん。

河野 私はマイナス志向の強い人間なんです、どちらかというと子育てには否定的で



木村澄子さん

す。今三歳の子供がいるんですが、仕事への未練絶ちがたく、というところがあります。ただ子供を生んでよかったなと思うのは、子供を生まずにきたら絶対に目を向けなかった問題に気付いたという気がします。もっと華やかな道ばかり追いかけていたような気がする。子供に感謝しなくちゃ、と思っています。

あと、瞬間瞬間に遊んでいる様子とか、寝顔を見てかわいいなと思う。

木村 私はね、子供はつくらないつもりで結婚したんですよ。そしたらできちゃって。

司会 そんなもんですよ。

木村 コインロッカーベイビーというのが私の産んだころにはやって、親兄弟からすぐ捨てるだろうと言われていたんですけど、なぜか捨てずにすみまして。

だから母性本能なんてうそだなあ、と。生まれたらかわいいというけど、最初はとう見てもねえ……。

司会 あんまり、かわいくない(笑)。

木村 かわいいというにはあまりにも不可解なものですよね。帝王切開だった

ので、四日ぐらいたって助産婦さんが「かわいいでしょ」って見せてくれたとき、わが子と思えば、って言ったらすごく怒られちゃった。わが子と思えば、とは何ですか！って。

和田 赤ん坊がかわいい、というのは一種の先人観だよな。

木村 で、どうしようかと思いつつ、落とすと壊れそうだから、大事にしているうちに情が出てきたって感じでしょかね。やっぱり育てたらかわいくなったんで、生んだからじゃない。

司会 今、お幾つ？

木村 高校一年ですけど、いまや私より息子のほうがしっかりしてる。今は助かってます。

司会 そういう方は今増えているんじゃないかなあー。異星人が来た、って感じで。(福田さんに)違和感なかったですか？

福田 なかったです。私の産んだころは母乳を飲ませなきゃいけない病院だったんですが、注射してもマッサージしても全然出なくて、砂糖水ばかり飲ませていた

んですよ。そしたら体重がだいぶ減っちゃってしょうがなくミルクに変えたんです、三人とも。それでも違和感なかったです。河野 妊娠中、私は映画の「エイリアン」を思いましたね。体の中で、自分の意志でコントロールできないで動いてくるから。まあ、臨月近くなっていると、ちょっとはかわいいと思わなきゃだめかな、と思ったんだけど。

●バラエティに富んだ子育て観

三島 子供が生まれてよかったと思うことは、人間的に大きくなれたことだと思えます。生まれるまでは、私なんか人間的に未熟だし、絶対生めないわ、と思っていたんですね。

和田 何歳でお産みになった？

三島 二十七です。今二歳半と二カ月の子供がいます。私は公務員なんですけど、一緒に入った人たちがほとんどキャリアを伸ばしていくときに子育てに入っていくのかと思ったら、ずっーと遅れてしまうようでした。

司会 それまでは仕事一筋でいらしたわけ？

三島 そうですね。それを目指していたんですけど、そんなふうにはバリバリのキャリアを目指さなくても、自分にできる仕事をやっていけばそれなりにキャリアは伸びていくだろうな、と。

司会 と思っていらっしやるのね。産んだばかりですもんねえ。まだ三年経っていらっしやらないし。それ以外にお子さんを生んでよかったと思うことは？

三島 自分の子供ですから、やっぱりかわいいなあというのがあります。でも、いやすねえ。

司会 どういうふうによ？ うるさくて？

三島 うざったいし。今二歳半ですが、子供が朝起きて早く保育園へやりたいと思うし、離れていたいんですよ、なぜか分かんないけど。自分の気持ちが落ち着いていてゆったりしているときは、外へ出て遊ぶうかという気にもなるし、公務員ですから子育てに専念できる休暇はあるんですけど、何かイライラしちゃう。

福田 それは専業主婦でもありますよ。

確かに自分が変わってきたから、生んでよかったとは思うけど。時間的余裕はあっても、やはり子供に当たりますね。だって自分の思い通りにならないですもの。寝てほしいときには寝てくれないし。蹴飛ばしてみたりしますよ(笑)。

小林 私、子供を持って悪かったと思ったことが全然なくて、幸せだしかわいいなと思う。母乳で育てたけど、三番めを生んでからも父母会なんか連れて歩いて、オッパイやりながらみんなとしゃべって。だから、あんまり思わない。

司会 どの子も？

小林 そう。

司会 育てやすい子ばかりに当たったんだ。

和田 それから、お母さんもそういうことに抵抗を感じない考え方だったんじゃないのかな。

司会 お宅はずっーとお家にいらしたんでしょう。

小林 いえ、ずっと仕事をしていました。結婚するまで保母をしていたんですけど、体をこわして。何しろ貧しかったから、お

腹が大きいときも生まれてすぐのときでも、ずっと働いていました。

山手線の中でも平気でオッパイやってたし、ミルクじゃないから背負いさえすればすぐ出掛けられる。芝居も抱きながら見に行ってたし、子供のせいでやりたいことがセーブされたとか、あまり思わないできちやっただけですよ。

司会 幸せね。

小林 ほんと、人の子もかわいいし、自分の子もかわいいし、よその赤ん坊を見ると、ああもう一人生みたい、って感じ。

和田 保母さんになられたぐらいだから、子供が好きというのはあるんでしょうね。

小林 昔から小さい子の面倒はよく見てたって母親が言うから、わりあい母性本能を持った人間なのかもしれないなあ、と最近自分で思うんですよ。

司会 実に五人の中から、すごいバラエティーが出ましたねえ。お仕事を持っていらっしゃるからイヤというもんでもないし。小林 私はかえって保育園に預けてたほうがリズムがとれて、助かったなあという感じはある。

司会 そりゃ楽ですよ。みなさん保育園に預けるマイナス面ばかりクローズアップして言うけど、プラス面の声が割に出ないのよね。

小林 友達に、三人とか五人生んでいる人が多くて、だれかがね「保育園に預けられて楽だから生めるのよ」なんて言っていた。

和田 仕事の性格とか、仕事に対する考え方でだいぶ違うと私は思う。

司会 確かに。そうすると、木村さんなんかはどうですか。子供がいてよかったって感じ？

木村 今となってはね。すごい労働力で。長男は第二の父親のようなもので、下



小林けさみさん

の子の家事能力の心配をしている。

●子供がいると女の自活は難しい

司会 ウーン、みなさん、問題ないのかなあ。やっぱり子供がいらないほうがよかったという方はいらっしゃるわけですか。

河野 私はどちらかというと、それに近いですね。そんなこと言う子供が中学ぐらいになったら金属バットで殴られるかな。

和田 大丈夫。私、さんざん言ったけど殴られてないから。それは、後での子供との付き合いですよ。

河野 世間で、子供を産みなさいとか母親らしくしなさい、と言っているわりには母親に優しくないですよ。昔は地域の中で面倒見てたけど、今はそういうのがなくて、口ばかりやかましい。

住宅事情とか交通事情も悪くて、そこで事故があったら母親のせいですから。

司会 そう。

河野 よく育って当たり前で、何かあったら母親のせいというのは公平じゃないとすごく思うんですよ。だからそんな割の合わ

ないことより、それなりの収入のある仕事のほうへ目がいくんじゃないかと思う。

もう一つは、私たちの世代って偏差値とか競争で育てられてきて、悪い意味でもよい意味でも自分の能力をもっと伸ばしていきたいというのがあるんだけど、母親になったら自分のことばかりしないでちゃんと子育てしなさい、って。こうですよ。

司会 うん、ホントにその通りです。

河野 だから子供が減っているのは、結婚している人が生まないじゃなくて、結婚しない人が多いから子供の数が減っている、ってことなんですよ。

福田 子供が小さいとき夜泣きをされて、それこそ後ろからパトカーが来て「どうしたんですか」と聞かれるくらい、毎晩のように寒い時期に外を赤ん坊抱えて歩いていましたね。それで三人ともアトピーなものですから、寝るときは手も足もかきながら寝かせないとだめだったし、そういうときはほんとに子供はいらない、という気分だった。

小林 私、最初の子を産んだときホルモンの病気になっちゃって、やる気がなくなっ

て落ち込むし、子供の隣に自分も寝てるような生活をしていた。連れ合いが子供を背負って買物なんかしていると、よくやるご主人だ、奥さんは何をしているんだろうと思われる。でもいちいち説明するのはたいへんだから、何と言われようと「ホント助かってるんですよ、へへへ」と笑って



河野道子さん

ごまかして、普通の母親から降りてしまったところがあります。連れ合いは、オレはこんなに苦労しているんだぞ、って世間のみなさまに見せて歩きたいな感じで立場がいい（笑）。

すごくうちは貧しかったから、父親がどうとか母親がどうか、世間一般の付き合いとか常識から割と降りてしまったところ

がある。

司会 それ、すばらしいですよ。

和田 夫がどういう態度をとるかも決め手になるでしょうね。

司会 みなさんのお連れ合いはどうですか、育児に関して。

三島 うちが協力的です。仕事が交替制なので日中けっこう家にいたりするんですよ。保育園のお迎えや食事の支度、食器洗いとか洗濯物を干したり、たんだり。

司会 それは結婚前からの契約ではなくて？

三島 フタを開けてみたらそうだったんです。ラッキーみたい（笑）。

司会 福田さんのお連れ合いはどうでした？ 協力度は。

福田 うちが家事は一切しません。だから一人でやってきた、という思いがあります。ああ家を飛び出したいとか離婚したいとかあるんですけど、子供がいると食べさせてあげられないという思いがまず最初にきます。子供がいなければ住み込みでも何でもできるのに、とかね。

今保育ボランティアの養成講座を受けて

いるんですけど、小さな子供を預けてまで若いお母さんが勉強することに対して、周りの人、世間の人はどう思うかっていったら、やっぱり足を引っ張るのは女の人です。女の人は、いまだに自分の意志では生きていけないと思います。

小林 私が子供を生んで唯一ひっかかっていることというのは、今一応鍼灸師ではあるけれど自分が生活できるだけのお金かとれていない、ということなんです。離婚したときに自分が食べていけない。ゆくゆくは子供を食わせるぐらいのお金ほりたいなと思っているんですけどね。

河野 私もそれはすごく思います。残業でも子供がいなかったらやれるのにな、とか。

●子育ては丸損か！

和田 話を経済面に絞ってみてほしいんだけど、経済的にみたら子供って絶対に損でしょ。

司会 福田さんと木村さんはお子さんが大きくなっていらっしゃるけど、みなさんまだ子供が小っちゃいからピンとこないかも。

三島 今保育園へやっていますけど、個人的に朝晩二重保育を頼んでいます。二人めも無認可へ行きますから、保育料がばく大です。

木村 例えば私、大学出てですけど、奨学金を一円ももらっていない。親は私にかけたお金を取り返せるかというと、私が奨学金もらって公務員にでもならない限りモトをとれない。

和田 教育費のうんとかかるコースを行く子とかからないコースを行く子とがいるでしょ。それでだいぶ違うとは思う。だけどそれにしてもね、どうやってみたところでペイはしませんよ、これ。

司会 この間、ある方がしつかり計算してきましたんだけど、大学までやるとしたら四千万五百万円かかるって。そうすると、普通のサラリーマンが一生働いて稼ぐのが多くて三億円。少ない人は一億円。

和田 それで子供に四千万五百万円かかったらわけでしょ。将来子供が稼いだとしても親はとることができないから、絶対損ですよ。昔はそんなにお金がかからなかったんだから。

司会 どっちみち損よ。

木村 昔、父が早く死んで母が働いていたからお手伝いさんを雇っていたのね。ねえやといって。そうするとねえやのところに給料がいかないで親が取りに来るの。もっとヒドイのは売られちゃった、って話。だから娘三人ぐらいいけば倉が建つって。

和田 昭和三十四、五年の話だけど、家が調布にあったのよ。その辺りは農村地帯で、隣の家は農家だった。女の子が二人、男の子が二人あって四人きょうだいなの。でも農業では食えなくて、その子供たちは中学を出てみな工場へ勤めに行ったわけ。そしたら給料は親が全部取り上げて、ちょっと小遣いをやる。それで家を建てたりね、親はもうかっていた。姑が言うにはね、ああいう階層は子供を生んだほうが得なんだよ、うちみたいに子供を教育しようという家じゃそうはいかないんだよ、と言っていた。なるほど、と思ってるね。

みんな精神的な満足ということだね、経済的な損を忘れて暮らしているわけよ。だけどこれ、最後になったらみんな気が付く。

司会 あなた、最後っていつのことを言っているの？

和田 子供に老後を見てもらいたいと思っただけに、もうだめ。今ある方法としては、かかった費用を返してもらう手だけ。

福田 私も言います、娘に。娘は看護学校へ行っているんですけど、三年間お金を使っているんだから少しは返してから結婚してちょうだい、って。でも冗談では言いますけど真剣にそういう思いはないですよ。ね。

木村 今は物価の問題というより生活様式が物入りになっている。

和田 ほんとうにそうです。私たちの若いときにね、アメリカってところは貧乏ができないそう。なぜ？って驚いたものよ。今の日本をみれば分かりますよね。冷蔵庫がないわけにもいかない、テレビがないわけにもいかない。ある程度のもものは必要な暮らしですね。だからお金がかかるわけよ。

何も分らないで生む人、計算しないで生む人は、子供を生めば何かいいことがあると思っているのよ。

司会 だけどそれはね、みんな分かっていると思いますよ。その子にかけたお金が戻ってくるのか、子供が猛烈に稼いで左うちわさせてくれるなんて、だれ一人考えていないと思う。

和田 いや、考えていなくても、何となくね、子供が出世してくれたら親にもいいことがあるんだと思っているのよ。

司会 そういう気持ちで生む人はいないと思うけどなあ。

和田 生んでから、夢を描くのよ。

●はたして子供は必要か

和田 私が子供を生んで得をしたのは、要するに、生まないことによる差別を受けない、ってことだけです。でもこれは、差別をするほうが悪いんで、ほんとの得だとは思わないけども。

もう一つは、得したという人の中に自分が実現すべき可能性を一代延ばす、という考え方が無意識にあるんじゃないか。そういう意味で一生懸命やる人はいますよ。

司会 母親の教育熱というのは、最高のところにエスカレーターで子供を乗せたいか



福田幸子さん

らやるんだ、というふうにならなければならぬ。虚栄心に駆られてエスカレーターに乗せることに血道を上げている人って、あまり見たことがないんですよ。子供というのはまだ未知数だから希望を持つので、子供に未来を託す親の気持ちって、そんなに否定的に考える必要はないんじゃないかという気がする。

和田 教育ママになるかどうかは別として、そういう人がいるってことよ。私は否定すべきことだと言っているんじゃない。なくて、自分の可能性をあきらめないで子供を育てられない現実があるでしょ、ってこと。だから、今みたいに子供を産んだ途端に色々あきらめなければならぬとすれ



三島梨香さん

ば、やっぱりどっちを取るか、ってことにならざるを得ない。今はみんな思っていないけど、これ、三十年後にはみんなそう思うかもしれないよ。

司会 男って妻に離婚されないと目が覚めないけど、厚生省の役人だって女が子供を生まなくなるとやっとな目が覚めてきているんだから、もう少し女が割をくわないですむようにテコ入れしてくるはずですよ。

河野 でもテコ入れの仕方というのが、将来の労働力としてベイするような人間を生んでほしい、みたいなところがありますよね。そういう考え方ってズルイと思う。つ

まり程度のいい兵隊がほしいんですよ。

和田 私ね、子供を生んで悩んだことの一つに、いまだによくは分からないんですが、はたして社会全体にとって今子供を生む必要性があったのか、なかったのか、ってこと。全体にとって必要であれば私は我慢してもいいが、その必要がないとなれば、生んだ意味がないと思ったの。現在地球全体の人口が非常に増えている、ってことですよ。日本だって明治維新のときから比べると四倍にもなっちゃったんのよ。江戸時代はみんな二人だったんだから。もう、社会にとって子供は必要じゃないんじゃないかと思うのね。

福田 でも日本の場合、何十年後に生産能力というか、社会を支える人間がいなくなるんじゃないですか。

河野 お上の言う通り子供の数を決められていて、その通りに生むのって、バカバカしいですよ。

和田 現代というのは管理社会だから、よりうまく管理されちゃうのよ。でも子供を生むというのは、いつの時代も社会的な意味があると思う。

木村 逆に言うと、今は個人的な管理も可能になった。

和田 そうです、そうです。

小林 ほんとうに子供を生んでほしいんだったら、個々の状況に応じて幾通りものサービスをしてくれたらいいなあと思うんです。

●子供を生む意味

木村 P K O 法案なんか出しているけど、あれのごく一部でも還元すればね。

司会 ともかく政府は、お金は極力使わない主義だから。フランスなんか政府がものすごくお金を出している。第三子を産むと、いろんな補助が月五、六万円にはなるからね。

木村 うちの夫みたいにマメな人でも、仕事に慣れないときは家に寝て帰ってくるだけ。男性の労働条件の問題は大きいし、六歳ぐらいまで育児時間くれたっていいと思う。

保育園の問題にしても厚生省の考え方は、母親に個人的に面倒を見せようとす。安上がりの状況の中で、保母さんと母

親が角つきあわさなきゃならないというのは、幸せな状態ではないわね。

司会 だいたい女、子供にかかわる職業と
いうのは、うんとギャラが低いんですよ。

木村 そう。福祉もそうですよね。

和田 だって女に押しつけとけばタダだ
もの。

司会 だから、みんなが自民党に投票して
いる限りはだめよ。状況は変わらないか
ら。やっぱり子供が生まれたら三歳までは
母の手でとか、お母さんは家にいなきゃね
とか、子供が学校から帰ってきたらお帰
りなさいって言いたいわねとか、そういう人
が九〇パーセントぐらいじゃない。そ
の気持ちを利用して。

高齢化社会の問題でもそうよ。高齢者が
家族と一緒に暮らしたい気持ちを大事にし
ようとかいって、それを逆手にとって、在
宅介護を奨励してお金をかけない。だか
ら、生まれたときから死ぬまで一貫してい
るのよ。人間の生活を支えるのを全部女に
押しつけている。

和田 みんながホイホイ子供を生むとい
うのは、そのわなにはまっているわけよ。

(まとめ・冒前 和)

高齢化社会の問題に

興味のある方へ

ーあなたのお力を貸してくださいー

●最近「わいふ」編集部に頻々と、
ご老人を抱えていらっしゃる読者か
らの相談電話がかかってきます。多
くの人がうさぎ小屋に住み、ときには
妻も働いているという状況のなか
で、老人問題に直面した家族が悲鳴
をあげるのは無理ありません。

ところでいざ、というとき老後の
暮らしを支えるために頼りになるの
は老人ホームなのですが、そのホー
ムの選定はなかなか難しく、「わいふ」
でもこれまで二冊のガイドブックを
作っていますが、まだまだかゆいと
ころに手がとどかないというのが実
感です。

●そこで「わいふ」では、通りいっ
ぺんでなく、あらゆる角度から老人
ホームの実態を見つめ、選定の手が

かりを提供するために「老人ホーム情
報スペース」(仮称)を作りたいと思い
立ち、多くの方のご賛同をいただいで
現在発足の準備をすすめています。

●つきましては「わいふ」の会員で老
人問題にご関心のある方のお力を、ぜ
ひ貸していただきたいのです。

お住まいになっていらっしゃる地域
に、特別養護老人ホーム、老人保健施
設、ケアハウスなどの公的機関、さら
に私的な有料老人ホームなどがありま
したら、訪れて資料を入手し、見学し
た内容のレポートをよせてくださいま
せんか。見学実費として一律二千元
を、またレポートを私どもでまとめる
ガイドブックに採用、掲載させていた
だく場合にはライターとして原稿料を
差し上げます。

お気持ちのある方は、編集部までお
電話でお問い合わせください。くわし
い内容をお伝えします。

どうぞよろしくお願いいたします！

ホリッククラブアニリー（依存症家族）

橘 由子

“わいふ”二三五号の「父」——「暗い絵」（匿名）——に
勇気づけられてペンをとることにしました。（A子さん、
というのも親しみがわかないので「英子さん」と呼ばせて
いただきます）

私の父もアルコール依存症でした。英子さんのお父様と
同様、専門家の診断を受けたことは一度もありません。

わが家は典型的な戦後の核家族でした。恋愛結婚で結ば
れた両親と四人の子供——私はその長女で、下に弟が一人
と妹が二人——ただし、私以外の家族はだれ一人として父
がアルコール依存症であった（父はまだ元気に生きている
のですが、半年前にある病気をして現在その病気のほうも
依存症のほうも小康状態が続いています）ことに気付かな
いまま現在に至っています。

○お父さんはアルコール依存症だった？

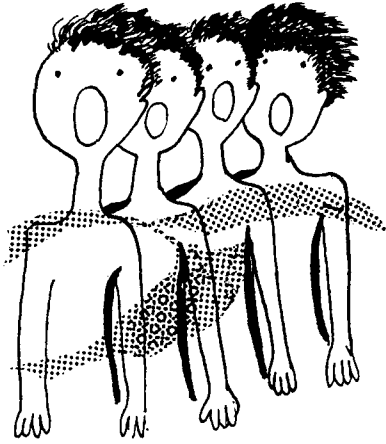
三年前、私の友人が夫を亡くしました。長年アルコール
依存症に苦しみ、最終的には内臓がボロボロになって力尽
きたのです。正確に言う、亡くなって初めて、私は彼女
の夫が重度のアルコール依存症だったということを知りま
した。

それまで私は、自分はアルコール依存症などとは何ら縁
のない生活を送ってきた、と信じて疑ったことがありませ
んでした。これは「アルコール依存症」と「アルコール中
毒症」を混同したために生じた誤解なのですね。専門的な
ことはよく分からないのですが、アルコールとは肉体的な中毒
症状であり、依存症とはメンタリティーであると理解すれ
ばよいのでしょうか。

ともかく私は、朝から晩まで酒を飲み、ひょうたんをぶら下げて時どころもかまわず徘徊するタヌキのごとく、いつも赤ら顔でヘベレケに酔っ払っている、ひどくなると幻覚症状が現れたり、また酒がきれると手が震えたりする――だれが見ても絵になる酔っ払い――これがいわゆるアルコール依存症だとばかり思っていたのです。

ですから「いったいアルコール依存症の定義というものはあるの？ 普通の酒好きとどう違うの？」という質問は、私の中の無意識のシコリから発せられたとは思えません。

そんなぶしつけな質問に、友人はとても誠実に答えてくれました。「ある人のアルコール摂取によって回りのだれかが苦しんだり、迷惑を被ったり、日常生活に支障をきた



したりする場合、その「ある人」のことを広い意味でアルコール依存症患者と呼ぶらしいの」

そのとき私は「そうか、じゃあうちのお父さんはアルコール依存症の資格を十分備えているわけだ」と思っただけで、それ以上突き詰めることはしませんでした。

それから二年後、つまり今から一年前、私はひょうなことから、十年前自分が長女に対して加えた数々のお仕置や叱り文句が、実は「しつけに名を借りた幼児虐待」だったということに気付いてしまったのです。そして懺悔のような気持ちで過去を掘り下げていく過程で、自分の父親が間違いなくアルコール依存症だったという確信を持つに至りました。

○幼児虐待とアルコール依存症

幼児虐待とアルコール依存症にはいくつかの共通点があるように思われます。両者とも何らかのストレスが伏線となって存在し、当該の行為（虐待あるいは飲酒）をせずにはいられないような心情に陥る。行なう瞬間一種の快感を覚える。そのあと激しい後悔、あるいは虚脱感を覚え、こんなことはもうまっぴらだと思っ（ただし父の場合そう思うのはいつも家族でした）。それなのに定期的にその行為を繰り返してしまう。飲酒は毎晩、虐待は不定期――あるときは一日一回、またあるときは一カ月あるいは半年に一回。父がアルコール依存症でその娘が幼児虐待母だったと

いう苦しい洞察によって、しかし、私は今まで抱えてきた難解な謎がスルスルと解けるような気がしたのである。

私は自分が育った家庭は「ごく普通のどこにもある家庭」だと思い込んでいました。両親もきつとそう信じていたはずですが。しかし家中にみなぎっていた緊張感や不安感、また四人の子供たちが抱え込んでいた恐怖感は、今にして思えば決して「普通」と呼べるようなものではありませんでした。これが普通だとしたら、家庭というのは何と恐ろしい密室だろう、私は幼な心にそう感じていたのです。

普通だと思うから、あるいは思おうとするからさまざまなジレンマが生じるのであって、これが「わが家はアルコール依存症患者を一人抱えた家庭」となれば、不思議なことにすべてにスジが通るではありませんか。それで問題が解決したわけではないにしても、少なくとも解決への糸口だけは見つかった、そんな安堵感が私にはありました。なんだそうか、お父さんはアルコール依存症だったんじゃない……。

○アルコール依存症に伴う暴力

ヴァーバル・アビューズについては英子さんがとても的確に書いておられるのでここで詳しく繰り返すのはやめましょう。わが家もまったくあのとおりでした。父は家ではどなるか、人の挙げ足をとるか、それしかできない人でした。

た。アカの他人とは普通にコミュニケーションができるのに、家族が相手となると人格がガラリと変わります。理由は簡単で、家にいるときはいつも必ず酒を飲んでいたので。酒を飲まないで家にいることができなかった。そして酒が入るともう完全に己を失ってしまふ。何を言っているのか自分で分かっているのかいないのか、家族に向かって「バカ」だとか「気違い」だとか、とにかくあらん限りの罵詈雑言をぶつけます。

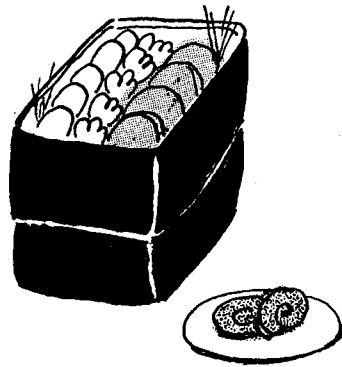
英子さんのお父様よりマシかなと思うのは、私の父は夜中の二時まで起きているということはありませんでした。たいてい十一時には食卓で仰向けになって大イビキをかき、目を覆いたくなるほど寝汚く眠りこけてしまうのです。ただし子供たちが幼いころは、その日の気分によって食事の途中でも子供を食卓から追い払っていましたけれど。

英子さんの家庭と決定的に違うのは、わが家の場合恒常的に暴力が振るわれていたことです。物心ついて以来、何を言っても何を言わなくても、いつも父の拳が飛んできたように記憶しています。父とすれ違っただけで殴り倒される、そんな日々を送っていました。それが実際には何日に一度の割合で起こっていたのか今となっては確かめるわけにもいかなのですが、子供の心には「いつも」というふうに映っていましたから、それはそれで真実と言うべきでしょう。殴るときの父は顔が赤くったり蒼くったりし

て、また目が完全に据わっていても恐ろしかった。そして殴り倒されたあとと見上げると、半ば放心状態で、うつすらと笑みさえ浮かべた父の顔がそこにありました。私は五歳にしてすでに「子供を殴ることでお父さんは幸福を感じている」ということを、体で感じ取っていたのです。子供というものは滅多に自分の家庭について友達と語り合うようなことはありませんから、私は長い間、世の中には酒を飲まず、子供を殴ったりもしない父親がいるということを知りませんでした。友達の家遊びに行つてそこのお父さんと遭遇したりすると、本能的に身がすくみました。例えば私の目の前では優しくしていても、私が帰るとこのお父さんもきっと酒を飲みだし、子供を殴るんだ。世界中の子供たちは夜になると父親の目にふれないよう細心の注意を払っている。ほんとうにそう信じていたのです。

私の父はメデタイことが嫌でした。

ある大晦日のこと。母がせっせと作っているおせち料理を少し食べたいと父が言います。ほんの少し母がお皿にとって父に食べさせます。父はもっとくれと言います。母は「明日まで待ちましょうよ」となだめます。父の酒量が臨界点に達しているとその瞬間ちゃぶ台がひっくり返されるのです。大晦日といういつも何か事件が起こっている。紅白歌合戦を見ていて母がある歌手（特に男性）をほめたりすると、必ず父が暴れだし、修羅場を引きずって新年を迎えます。



私の結納や結婚式の前日もそうでした。夫の父親のことをほんの少しはめたのが父の逆鱗に触れたらしく「もう結婚なんかせんでもいい。明日は絶対にワシは行かんからな！」と平手打ち。このときばかりは私も錯乱状態で、そばにあった急須をムズツとつかみ、父の顔をはずして思いっきり空に投げつけたのです。急須は押入のふすまにぶつかって中の茶葉とお茶があたりに飛び散り、白いふすまにいつまでも無残なシミを残すことになりました。家庭内暴力ですね。

今私が嬉しい日やメデタイ日にいわれない不安感を覚

えるのはこんな原体験があるせいかもしれません。

といって普通の日は普通だったかというところ、普通の日もごく普通に荒れていました。ただメデタイ日はそのメデタサと悲惨さがないまぜになって、一種異様な雰囲気醸し出していたのです。

普通の日のことを書きます。

弟が高校生だったか大学生だったかよく覚えていないのですが、どこかに旅行した帰りに駅弁を買って来たことがありました。お土産のつもりだったのか、自分で食べるつもりだったのかよく分かりませんが、ともかくその駅弁は帰宅後数時間テーブルの上にありました。日曜日だったのでしよう。父はその駅弁を脳裏に焼き付け、近所の飲み屋に飲みに行きました。

一方弟は家に着いてホッとして、思わず空腹を覚えたのでしよう、「だれも食べないのなら」と言って自分の買ったきた弁当を食べてしまったのです。

そこにしこたまきこめした父が帰ってきました。そして空になった弁当箱を見て逆上するわけです。「ワシが食いたかったのに、おまえこれを全部食ったんかーッ！」とわめき、そこにあった箸を弟めがけて投げつけました。しかも先端を相手に向けて。その箸は弟の目にぶつかり、目からは血が流れました。それを見て今度は母親のほうを取り乱し「この子が身障者になるようなことがあったら、私はあんたを殺して私も死にますからね！」と泣き叫びまし

た。

幸い弟のケガはたいしたことはなく、ほどなくして充血も治まりました。

何かの拍子に殴られた妹が軽い脳震盪（のうしんどう）を起こして一瞬聴覚を失ったこともありました。

○父と母の共依存

父の暴力を具体的に挙げるときりがなく、書いているうちになさけなくなるのですが、もう少しはつきり思い出してみようかと思えます。

私が高校一年生のときでした。その日も夕方六時ごろから父は酒を飲んでいました。ことの流れはまったく記憶にないのですが、父が母の実家の両親について口汚く罵り始めたのです。これはよくあることでした。「おまえの家族は品がない」とか「教養程度が低い」とか、さんさん悪態をつきました。こんなとき母が何か言おうと父は「モノを知らないくせに生意気だ！」と言って怒り、さりとて何も言わずにむっつりしていると「オレをバカにしているのか!」と言って怒り、いずれにせよ最後に行きつくところは大声と大立ち回りです。

この日母は「そんなこと言わないで、お父ちゃん」となさけなさそうにため息をつきました。すると父はいつもの通り「何を! おまえワシに逆らうんか!」とどなり、母を殴ったり蹴飛ばしたりし始めました。いつものことなの

で子供たちは「またか」と思うのですが、かといって決して慣れるということはなく、毎回母と一緒にワーワー泣きます。この日もやはり父が一人で暴れ、あとの五人は逃げたり泣いたりしていました。特に当時五歳になったばかりの一番下の妹は父の剣幕にひどく怯え、母にしがみついて絶叫していました。母はというとそんな妹をしつかり抱き、自分は額から血を流し、柱にしがみついて「ヤメデーッ！」と叫んでいるのです。



夜中に父がバツタリ眠って初めて静寂が訪れます。あたりに散らかった茶わんやふとんのまん中で母が「もう死んでしまいたい」とつぶやいています。ほんとうによく「死ぬ、死ぬ」という家族でした。それまで私も、ふっと死んでもいいかと思うことがたびたびありました。中学生のころ母に「たばこを一本か二本ほぐして水に溶かして一気に

飲めば死ぬるらしいわよ」と教えたこともありましたが、私からそれを聞いた母は父のたばこを実際に水に溶いて口まで持っていったのですが、結局「あんたたちがいるから」とか何とか言ってそのニコチン水を台所の流しに捨てました。

この日はしかし私もすでに高校生になっていました。義務教育を一応終え、半分は大人だという自負があった私は、母に向かって「死ぬくらいならお父さんと別れればいいじゃない」と言ったのです。母は「そうね、もうほんとうにそうしたい」と言いました。この一言で幼稚な私はすっかり舞い上がりました。ついにお父さんとお母さんが離婚する。もう夜ごとの罵声と暴力に怯えることもない。お母さんはまだ若いし（当時三十八歳でした）私ももう子供ではない。今から定時制高校に編入して昼間働けば何とかなるんじゃないか……そんなふうに盛り上がって翌日は学校の授業に全然身が入らなかったのをよく覚えています。

それなのに翌日（土曜日でした）、学校を終えて家に帰ると母がふとんで横になり、そのそばに父が座っているではありませんか。何でも母は頭痛がひどくて起きられなかったというのです。そして半日で帰って来た父に看病してもらっているのです。私はカーッと頭に血が上がり「何よ、これ。別れるって言ったじゃないのー」と母をなじりました。母は照れくさそうに「何を言ってるの。あんたたちがいてどうやって生きていけるの」と、まるで私の若さからかうように答えました。そのときはまだ処女だった私は

母のその含み笑いがとても不潔に感じられ、もう二度と母をかばってなんかやるもんかと思ったものです。

けれどもこのとき私はもう一つとても大切な認識をしたのです。「お母さんがついている限りお父さんの酒ぐせは絶対によくないだろう」

その夜もちろん父は酒を飲んで家族にからみました。

その日から約二十年たって私は「共依存」という精神医学用語に出会うことになりました。

よく覚えているからといってこれがことさら特別なできごとだったわけではなく、ほとんど毎日のようにわが家ではこんな場面が展開されていたのです。

〇人も羨む幸せな家庭

一方、それでは他人の目にわが家はどう映っていたかというと、これが不思議なことにはほとんど「非の打ちどころのない幸せな家族」だったのです。父は仕事熱心、母は家事熱心、子供たちは勉強熱心。お父様は会社で出世コースを歩き、お母様はいつまでも若く美しく、四人の子供を全員私立の四年制大学に進学させた、町内一番の華やかな家族……だったそうです。

そうかもしれません。何しろ父は外ではとても「いい人」ですから。仕事をしているときの父は、当然お酒を飲んでいないわけですから、ひょっとしたら立派に見えたのかもしれない。要するに父は外ではいつも仕事ばかりし



ていて、そのかわり帰宅してから眠るまで絶えずモノを食べ続け、酒を飲み続け、そして体中から毒と棘を発散させて暴れているというわけです。父が何もしていない、あるいは普通になっている姿を私は一度も見ることがありませんでした。

昼間はワーカホリック、夜はアルコホリック——これが私の父でした。

○アルコール依存症の副産物

一見非の打ちどころのない家庭に一歩足を踏み入れるとそこは恒常的な暴力地帯。こんな環境で私は育ったわけですが、このことは私の生活や性格にさまざまな不都合をもたらしました。その中でも大きな二点を挙げてみたいと思います。

まず第一に、家庭内に充満していた救いがたい暗さをこれにも分かってもらえないということ。これはおそらく英子さんもしばしば経験されたのではないかと思います。少し仲よくなった友人からお世辞にせよ何にせよ「あなたは



いいわねエ」とか「両親がしっかりしていてうらやましい。うちなんか二人ともボンヤリしているから」などと言われると、よせばいいのに一生懸命自分の育った家庭の悲惨さを訴えようとしてしまうのです。何とか分かってもらいたい、何とか理解してもらいたいと願ってかなり具体的に説明なんかするのです。相手が優しい人だったりすると特にそうです。

けれどもいくら訴えても決して共感してはもらえません。よくて「早くに父を亡くした私に比べればあなたはまだ幸せよ」とか「酒ぐせが多少悪くても仕事ができる父親のほうがいいと思うけど」などと言って私をなだめようとし、悪くすると「大学まで行かせてもらって何を言うの。あなたは贅沢だ、恩知らずだ」と私を非難します。

私たち四人の子供はほんとうによく勉強しました。勉強に逃げる以外気持ちをつらさ術がなかったからです。いわばスタディホリックのような時期をくぐり抜けて四人とも進学・卒業したのです。

それなのにそれとて「両親のおかげだと思え。両親には感謝しろ」と言われます。今でもそう言われ続けています。「感謝しろ、感謝しろ」と言われるたびに、実際の気持ちは感謝などというものからどんどん遠ざかり、ひたすら幼いころの苦い思い出に向かって行きます。そして口を突いて出る言葉と思ったら「勉強したのはこのワタシだ。親が努力したわけではない」という投げやりな一言。目の前

にいる人は「あなたの親も苦勞するわね」と、外ヅラのいい両親に同情を寄せます。そして私はズブズブとドツポにはまって行くのです。

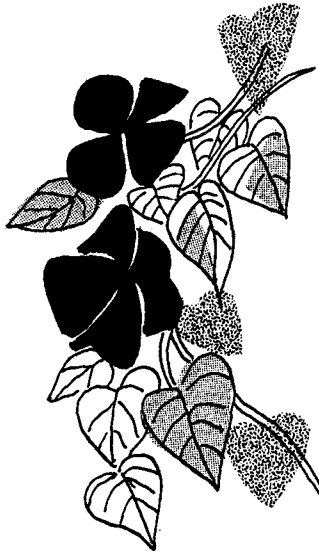
また「お父さんは家族のために一生懸命働いているのだから、家ではリラックスさせてあげるのが家族の務めでしょう」と言う知人がいたのですが、それはまったく見当違いな発言です。「お父さんご苦勞さま」と言って居心地のよい雰囲気を作ろうとする家族側の気持ちの大切さを私は否定するつもりはありません。しかし、例えば息子が買ってきた駅弁を息子が全部食べたからといって、眼球めがけて箸を投げつける父親というのは、どうひいき目に見ても異常でしょう。

けれどもよく考えれば優しい人というのはたいい「アルコール依存症患者のいない家庭」で育っているのですね。私が「父親のいない家庭」や「優しいだけで仕事ができない父親のいる家庭」の悲惨さを身をもって理解できないように、そんな家庭で育った人には日常茶飯事の暴力がどんなものであるのか想像することもできないわけですから、分かってもらおうというのが所詮無理な話なのでしょう。

第二の不都合は「平和に堪えられない体質になってしまった」ということ。これは英子さんと全然違います。

幼いころあれほど平和な家庭を望んでおきながら、いつのまにか恐怖に慣れてしまい、恐怖に怯えることで自分を

支えているような、歪んだ体質ができあがってしまったのだでしょう。高校生になって、子供を殴らない父親がこの世に存在するのを知ったとき、驚いたと同時に、そんな家庭は一体何を支えに生きているのだろうかという、妙な疑問を抱いたものです。日常生活の大部分を勉強と被暴力に費やしていたため、普通に生きるというコンセプトを持たないまま成長した私は、波風がなければ生きてゆけない、そんな人間になってしまったのです。これは立派なホリックです。



そして行き着いたところが「幼児虐待（いわばアビューズホリック）」というわけなのですが、幸いだったのはさまざまな要因が重なって、遅ればせにせよ自分が受け継いで

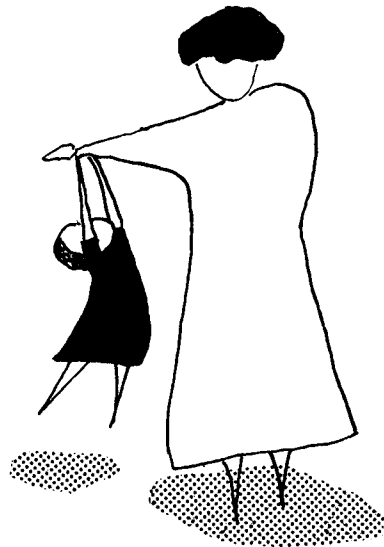
内包している「病根」をはっきり認めたことでしよう。そうでなければこの輪廻転生の悪循環をそのまま無意識のうちに自分の娘たちに引き継いでいたに違いありません。母親が無自覚でいればいるほど子供が大きな重荷を背負うことにもなりかねないのです。

○無自覚のつらさ

親の無自覚はほんとうに恐ろしい——つくづくそう思ったことが二度ばかりあります。

一度目は昨年の暮れ、私が「子供を殴っていた」という自責の念に苦しんでいる最中に、母が、自分は子供が幼いころは手を上げたことがなかった、と言ったときです。そしてまた「お父ちゃんも酒ぐせは悪かったけど、そんなに叩いたりしなかったと思うけどね」と言うのです。私は一瞬目が点になり、そのあとひどいパニックに陥って泣きながら母に抗議しました。子供をあんなに怖がらせておきながら、親はそれに気付いてさえない。それが私にはたはいへんショックだったのです。

母は幼いころ両親に殴られたことがないそうです。結婚してからは夫の酒ぐせの悪さに手を焼いていたいたし、たびたび暴力も振るわれていたのですが、妻が夫に殴られるときの気持ちと、子供が親に殴られるときの気持ちには本質的な違いがあるようです。妻はある程度善悪の区別がつくわけですから「献身」「忍耐」「軽蔑」といった盾で武装



することができます。おまけに妻は自分の意志で夫を選び、自分の意志でそこにとどまっているわけで、ある意味では愛情関係で夫と結ばれているのです。

しかし子供はそうではありません。選ぶ余地もなく偶然そこにいて、なすすべもなく親の暴力に身を委ねているわけですから、親の鉄拳は子供にとっては純粹な「恐怖」なのです。つまり同じ暴力でも、母と私はまったく違った受け止め方をしていたわけです。そう考えると、父に対する嫌悪感を、親に殴られたことのない母と共有していると思っていた私のほうが甘かったというべきなのでしょう。

余談ですが私は母にもしょっちゅう叩かれたような記憶があります。母が殴るときは父とはまた違った狂気が漂っ

ていました。

殴られる子供と殴る親の受け止め方にはこんなにも大きなギャップがあるのです。これは特筆すべきことだと思います。

二度目はごく最近のことです。

今年の初めに父が軽い脳梗塞を患い、しばらくみなが心配した時期がありました。急遽CTをとり、点滴をし、アルコールに対してドクターストップがかかりました。長年二〇〇以上という高い数値を保っていた血圧が一四〇まで下げられ、アルコールの摂取も一時中断されたわけです。最初ほんの少し運動障害と記憶障害が残っていたのですが、次第にそれもすっかり回復し、数カ月かかってとても元氣になりました。

久しぶりに会った父は「やっぱり今までほんとうのアル中だったのかな」と思えるほど肌が白く透明になり、目からギラつきとすさが消えていました。元氣はないのですが、私はむしろホッと思いました。実家に帰るたびにいつもだれかとだれかがけんかして、その大部分に父が入っていたため、里帰りがイヤで仕方がなかったからです。

ところが問題は母のほうです。「今まで通りの元氣なお父ちゃんに戻ってほしい」という気持ちは分からなくはないのですが、今さら「毒氣の抜けたお父ちゃんとはほんとうのお父ちゃんじゃない」などと言ってももらいたくはない。当時を懐かしがられたりしたら子供は救われません。あれ

は決して「懐かしい」などと呼べる日々ではなかったのですから。

高校生のとき「母がいる限り父の依存症は治らない」と感じたことを、私はまさまざさと思い出しました。やっぱりそうだった。お父さんとお母さんは支えあって依存症家族を築いていたんだ。お母さんは「子供に優しいお父さん」を望んでいたけれど、そのために自分が毅然と動いたことは一度もなかった。いつも心配しながらじっと見ていただけた。父親の暴力から私たちを守るために、矢面に立ってくれたこともなければ、本気で父と子を隔離しようとしたこともない……。

また父は父で自分の心に巣くう激しい「飢え」と「嫉妬」を直視しようとしませんでした。

父は母に覆いかぶさり、母はひたすら父を支えていました。父を支えながら「私がいなければお父ちゃんはお父ちゃんになる」と言っていました。アルコール依存症の夫を辛抱強く支える健氣な妻——四十年間これだけが母の役割でした。現在母のほうが生きる氣力をなくし、軽い鬱状態に陥っています。

母は自分が夫の暴力に堪えていたことについてはきちんと自覚しているのですが、自分たちが親という単位で子供に与えたダメージについてはほとんど無頓着なのです。物忘れが人並みはずれてよいものだから「終わったことは過去のこと、一分前も過去のこと」と言いながら結構明るく

暮らしていました。そのような生き方は確かにラクです。他人から見ればとてもさっぱりしたよい性格といえるでしょう。けれども「終わったこと」を焼却する努力もしないでどんどん捨てていったがために、その残骸が子供たちの心の中に蓄積されてしまったのです。父親のアルコール依存症も母親の共依存も、まだ決して「終わってしまった過去のこと」ではありません。事実私も妹たちもいまだにその後遺症に苦しんでいます。私は幼児虐待をする母親になり、上の妹はトランキライザーの世話になり、下の妹は軽い過食症に一時とても苦しみました。弟だけは幸い中学を出てすぐに全寮制の高校に進学したため、さほどひどい状態にはなりませんでした。

私たち子供は育った環境の中で、生きるにあたってとても大切な何かを破壊されたような気がします。それは先にも書いた通り「平和の中で安定して生きる才覚」、言い換えれば「自立」とも呼べるようなものではないかと思えます。それを私たちは決定的に壊されてしまいました。どの時点でもいい、両親がことの深刻さをきちんと受け止め、自分を見つめる勇気さえ持ってくれていたら、子供たちももう少しともに生きられたのではないかと悔やまれてなりません。

○輪廻を断ち切る

最後にもうひとつ余談なのですが、「幼児虐待」について

押さえておきたいことがあります。私が「虐待」というとき、それは「頻度」や「強度」を問題にしているわけではありません。回数や激しさというなら、私が子供にしたお仕置は決して常識の範囲を逸脱したものではないはずです。問題はそのときの「心的状態」です。私が子供に手を上げるときには決まって、まるで酒乱の父親が自分に乗り移るような気分になるのです。抑えがたい衝動に満たされ、自分の目がすわるのをはつきりと感じるができます。

一方、怯えるわが子の目の中には、かつて父親が迫ってくるときに絶望的な恐怖を味わった幼いころの自分の姿を見てしまいます。実はこれが一番つらい。つまり子供に手を上げる瞬間、私は父親の怒りと幼女の恐怖を同時に体験するわけです。それゆえどれほど軽いものであっても、私の子供をにらんだり叩いたりするとき、例え一瞬であれ小さな子供を恐怖の淵に陥れたというそれだけで、その行為は紛れもなく「幼児虐待」だというわけです。

昨年「自分は虐待母であった」と自覚して以来、私は「依存症」という悪循環を断ち切るためにすべてを思い出し、分析していくという苦しい作業に身を投じています。考えてみればこの作業を、アルコールによる日々の暴力にひたすら堪えていた母に求めるのは酷というものでしょう。私はいわば両親の「落としまえ」をつけているのです。それが自分の娘たちにできる最大の贈り物だと信じています。

(え・田沼千恵)

わいふ文章講座 (10)

副編集長 和田 好子

これからを生きる	岡山市に転入して、3ヶ月目。すっかり環境	に慣れてきた私達、友人もたくさんできた。	3ヶ月前、私達はここからスタートした。正	確には、年末に帰国、両親に話した時点から	だ。夫は昨年末でサラリーマンを辞めた。私	達ふたりで、新しく事業をやるという考え	だ。日本という社会で、個人の力がどれだ	けのものか、自分の可能性に挑戦するとい	。私は夫の考えに同感、迷うことなく賛成
----------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------

三ヶ月目、三ヶ月目、

文章は他人とのコミュニケーションです。自分の気持ちや考えを、相手に伝えるために書くものです。

ところがコミュニケーションだとうことを忘れ、心の中のありたけを吐き出して自分が満足するために、書いてしまう場合がままあります。

中には「人に見せるつもりはない、ただ書きたいことを書くだけ」などと言う人さえいます。恐らく書くこと

した。親も含めて人は色々言う。「甘い！
 バカな事を……。変わっている」と。甘さも厳
 しさもこれから分かっていくだろう、と私達
 は考えていた。案の上、次々と壁にぶつかる
 ？。まずカードが作れない。信用がないから
 このマンションも現金購入した。

回り

強中である。私もまた、社会へ出るための準
 備を始めた。これはと思うセミナー（ナイス
 ワークセミナー）、医療、OAセミナー等に
 出席、堅くなった頭に叩き込んでいる。近い
 うちに市場調査にも出ようと思う。

で、ストレスを解消しているのでしょ
 う。

グリム童話でしたか、穴を掘って、
 人に聞かせられないことを言い入れる
 という話がありました。「徒然草」に
 も、「思しきこと言わぬは腹ふくるる
 わざ」とあります。

黙っていると精神衛生上悪いのは分
 かりますが、文章はそういう場合の手
 段ではそもそもないのだと私は思っ
 ています。

なぜなら、文字に表わして定着さ
 せ、時間と空間を越えて他人が読める
 ようにするのは、読んでもらうためと
 しか考えられないからです。

ことに「わいふ」などに投稿された
 ものは、発表を前提としているに違
 いないので、コミュニケーションである
 という側面が、明白であってほしいと
 思います。

で、この作品ですが、「心余りて言葉
 足らず」という感じなのです。『年
 末に帰国』というが、どこにいたのか
 書いてない。後のほうに「台北」と出

台北で受けた刺激は強烈だ。海外移住を計画中の友、フラワーショップを持つとする友、語学力を生かし、国際経済の場で活躍中の友……。彼女たちは自分のために生きていく。目標に向かってひたすら努力を続ける。

そのたくましいエネルギーを感じる。安易な道は選ばず、困難な道を選んだ私達。けるだろう。それでも私達自身、自分の可能性に挑戦する。やらなくては分らない。自分で動く事が、生きていく事が、そして子供を育てる事が、どんなに大変なものか、そしてそこから生まれてくるものがどんなに大きなものであるか、つかみたい。つかんでみせる。子供達たちにも教えてやりたい、私達の生き方。

てきますが、こういう大事な情報は最初に入れるべきなのです。

この方は台北から、今まで何回か投稿なさっている。それで分かるはずと思われたのかもしれませんが、分かるのは編集部だけで、新しい読者はもとより、古い読者もほとんどは分からないうでしょう。

次に夫が会社を辞めて、何の仕事をしようにとしているのかも書いてありません。前の仕事と関係があるのかないのか。これが分かるとなぜ奥さんが賛成したのか、「人は色々と言う」のかも分かるのでは？

あふれる思いを書きたい、書きたいで説明まで手が回らなかったのでしょうが、説明（なるべく具体的な）がなくては思いも伝わらないのです。

まったく事情を知らない読者に、これで分かるだろうか？という観点でもう一度じっくり見直してみてください。

この題材は、具体的な一場面を取り上げて、会話など入れて、構成し直したらよくなるのではないと思いました。

私の愛する外国人

移民妻になった私

私がカナダに着いたのは八七年の十二月二十三日。クリスマスの直前だった。

初めて見るトロント空港は、近代的に清潔な建物で、隅のほうでは頭にターバンを巻いたシーク教徒のインド人がからっぽのカートを押していた。何だか映画みたいだな、という第一印象にのんびりとひたる間もなく、迎えに来ていた夫の両親と対面することになった。

夫とは中国で知り合い、日本で結婚した

ため、私が義理の両親に会うのはこの日が初めてだった。どんなふうにあいさつすればいいのだろうかと途方に暮れているすきに、彼らは一年半ぶりに会った息子と抱き合って感激の再会シーンを演じている。

私はといえば、少々取り残されたように後ろにボケッと立ちつくしていた。やっと私の番がきたとき、あちらは軽く肩に手を回して頬を寄せ、「ウェルカム」と一言。礼儀正しく距離があるカナダ人との初めての出会いだった。

空港から実家までは車で一時間半ほど。

新井 ひふみ

時刻は午後の八時過ぎだが、北国の冬はもう真っ暗だった。何車線もある首都高速道路を過ぎると、両側には果てしない暗闇だけが広がっている。車内の会話は当然ながら英語で、私にはほとんど分からない（家庭内の会話は当事者にだけ分かる了解事項が多いから、よそ者にはただでも理解しにくい）。

一眠りして目を開くと、前庭に愛らしいクリスマスの飾りつけをした家が見えた。静まりかえった室内に入り、よそゆきのように整ったリビングルームのソファに腰を



緑濃い夫の実家

下ろす。自家製の黒ずぐりのリキュールをなめると、外国にいる気分がしみじみとわいてきた。

ちょうどこの年の暮れ、義理の姉が人工受精で男女の双子を出産し、義母はその手伝いで数日家をあけて、この日戻って来たばかりとのこと。「だからクリスマスらしい準備もできてないのよ」と言う。

その言葉が謙遜に過ぎないことは、翌日から新年まで延々と続いたパーティーにかかっている手間を見れば明らかだった。歯科医の妻として四人の子供を育てあげた義母は、主婦のプロ。家はすみずみまで塵一つなく磨き上げられ、地下室にはいちごジャムからチリソースまでお手製の保存食がびん詰めにされて並んでいる。

クリスマスイブには両親と私たちに弟とそのガールフレンドを加えた六人でディナー（メインディッシュは義父が猟でしとめたムースのステーキ）、その次の日には二人の姉の家族が加わった大パーティー。そして近所の人や親戚を招いた集まりなどなど、一体全部でいくつのパーティーが開かれたことだろう。

クリスマスが一年で最も盛大なお祝いだということに加え、三年ぶりに極東から帰った自慢の息子とその東洋人妻を世間にお披露目することも、当然目的に含まれているのらしかった。トロントの北およそ二百キロのところにある地方都市。そこに住む上流階級の人々は当然全員が白人である。そして彼らにとっての日本は、テレビや新聞で得られる知識以上のなものでもない。

「日本ではメロン一個が百ドルもするんですってね」

「生の魚を食べるってほんとう？」

といったレベル。当時「反日感情」なるものを直接に体験することはなかったが、夫によると義父は日本製品を買わないことをポリシーにしているとのことだった。戦時中に学徒動員され工場で働いた世代である。車はカナダ製フォード、家電はGE。もっとも孫を持つ人々の必需品ビデオカメラを買おうとしたときには日本製しか見当らず、彼のポリシーもあえなく崩れてしまったのだった。

親戚や近所の人々とつたない英語であい

さつを繰り返すうちに、私は自分が『移民』であることを徐々に理解した。両親や兄弟はいつ引越してくるのか、カナダに來られて幸せだろうといった話が次々に出てくるのだ。戦火や貧困や革命や飢饉を逃れて年間二十五万人もの移民や難民がやって来るカナダの人々にとって、それが当然のことなのかもしなかったが、自分は国際結婚した『外国人』だという認識の私には、どうも話がかみ合わないもどかしさがあった。

トロントでの生活

実家での三週間が過ぎるころ、私は慣れない食事（バター、クリーム攻め）と英語と車なしにはどこにも行けない地方暮らしにほとほと疲れ果ててしまっていた。何しろ一番近くの商店まで歩いて十五分かかるのだ。だから大都会トロントへの引越しに、正直いってほっとした。

一月の半ば、冬のまっさなかのトロントは表に人通りもまばらな荒涼とした町に見えた。夫以外には知り合いもない。二人で寄り添って生きていくしかないのだが、

新生活はなかなかしっくりとかなかった。

大学を出てから三年ぶりにカナダに戻った彼は、アパート探し、職探しから始めなければならなかった。久々に会う友人やかつての同級生たちはすでにキャリアを築き、結婚して子供を持ち、家を購入した人も少なくない。そこへ留学帰りとはいえずしばらくで戻った彼には焦りもあった。さらには家にはカルチャーショックで口もきけない状態の私がいたのだからプレッシャーは確かに大きかっただろうと思う。

カナダに住む移民たちと話をすると、アジア人であれヨーロッパ人であれ、「最初の一年間は人生で一番大変だった」と言う。同じ言葉を読む話す英国人ですらそうだ。外国に来て一から生活を築くというのは、實際筆舌に尽くし難い経験である。それまでの人生経験が一瞬無に帰するような感じがする。

そのころ家に招いてくれた夫の恩師が「五年もすれば落ち着くから」と慰めるのを聞いて、私は「えっ、五年もかかるの」と途方に暮れかかったものだ。今、カナダ暮



友人のパーティーで

らしが五年目になる私には、その言葉が正解だったことが分かる。言葉を学び、生活習慣になじむのに二、三年は軽々かかる。そして新しい環境の中で、自分にどんな仕

事ができるのかを見つけ、親しい友人の数人も持つには、さらに長い時間が必要だ。

当時の結婚生活を語るのに、こうした私の移民経験を抜きにすることはできない。

「だって、ご主人がカナダ人なんだから、色々教えてもらえるでしょうに」というのは見当はずれなのである。カナダ人にカナダのことは分かっても、移民の辛さは二次的にしか分からない。それは日本に住む日本人が、外国人の暮らしや心情を想像できないのと同じである。私は零下十五度のトロントで孤立感に震え、夫は自分の将来の展望に頭を悩ましていた。仙台にいたとき同様、トロントでも私たちはそれぞれの問題と、国際結婚の大変さと二人の関係の問題に振り回されて、何がほんとうの原因なのか分からないまま過ぎすした日々を送っていた。

実際もし私が一人でカナダに来ていたら、却って楽な部分さえあったと思う。ほんとうに自分しか頼るものがないとき（離婚後の私がそうだ）、人は火事場の馬鹿力的に困難に立ち向かえるものなのだが、頼れそうな存在は逆に自立を阻むこともあ

る。そしてこの新大陸では結婚してようがいまいが、自立していない人間は人間と認められない。

例えばカナダでパーティーに行き、初対面の人に会うと、必ず「お仕事は？」と尋ねられる。そこでは「主婦です」という言葉は答えとはみなされない。仮に子育て中だとしても「来年から大学に戻りますの」とか「染色を少々」とか、何か個人としての自分を主張することが期待されている。

カナダに着いたばかりの私は、とりあえずトロント大学で英語のコースを取り、その後大学院に入るつもりでいた。毎日毎日宿題に追われる私は、夕飯後も辞書と首っぴき。家でのんびりしたい彼はそんな私の様子が気に入らない。結婚したんだから、いつも一緒にいて楽しみたいカナダ人の夫は「どうして僕と一緒にテレビを見ないんだ」と不機嫌な顔をする。やるとなったら徹夜してでも宿題を仕上げるという日本人的な私の態度が彼には理解できない。それはまた「楽しむ」ことを大切にしているカナダの文化と、何とか一日でも早く言葉をものにして自分の足で立ちたい移民の私の焦り

がすれ違ったためでもあった。夫や義父母が親切心から「ドント・ワーク・トゥー・ハード（あんまり頑張るすぎないように）」と言うとき、そんな表現を母国語に持たない私は、有り難くというより、むしろ足かせをはめられたように感じたものだ。

私は結局英語コースを終えてからしばらく日系新聞で働き、その後大学院に数カ月学んだ。自分の英語力の不足に気付き、また学者向きでもない性格を悟って退学。再び語学コースを取りながら翻訳会社に数カ月勤務、そしてまた本業のジャーナリズムに戻るべく大学に入り直し、ジャーナリストとして働けるまでに約四年かかった。

はたから見ると随分回り道をしたように受け取られるだろうが、自信喪失と自信回復を繰り返して、本来の自分を異国で取り戻すのにそれだけの試行錯誤が必要だったのだ（現在はカナディアン航空の機内誌編集の仕事を中心にフリーランスのジャーナリストをしている）。

外国に行って皿洗いをしながら苦学するなど、人ごとに聞く分にはロマンチックだが、現実には一刻も早く本来の仕事につき

たいのが人情。自分の国でしたくないことは外国でだってしたくない。結局、最も自分らしく生きることが最も幸せに生きる近道であり、それはどこの国にいうが同じことだというのが移民経験の教訓である。

不便なカップル文化

カナダ人の遊びといえば、老いも若きもパーティーである。パーティーといっても、クリスマスやイースター、感謝祭といった家族の行事、誕生日や仕事からみなど理由のある集まりは例外的で、単に友人や知り合いを家に招き、あるいは招かれといった形式でのパーティーが主流である。ある年などクリスマスから春のイースターまで、私たちは毎週末に最低一つのパーティーに出席したことがあった。

金曜日から土曜日の晩、ビール持参で友人宅に行き、他の数カップルと夕食をとり、その後深夜までおしゃべりに興じる。それが典型的なパーティーだ。呼ばれたら必ず呼び返すのが礼儀だから、パーティーの数は雪だるま式に増える。寒くてあまり楽しいものない冬はこうして過ぎていくのだ。

さてパーティーに行くのはカップルが基本である。結婚しているカップル、同居しているカップル、お付き合い状態のカップル。ある程度の年齢、一般的には二十代も半ばになったら、男も女も決まった相手がいって当たり前の社会だ。婚前同居が多いから結婚しているかどうかは必ずしも問題ではないが、同じ相手といつも一緒に行動し、カップルとして公認されることが重要だ。

知り合いや友人を食事に招くときは必ずカップルで、ということになる。結婚式などの招待状も二人が単位。一人もの生活を決心こんでいる人でも、友人かだれかを連れてくるのが普通。同性を連れてきたらホモセクシャルだと思われてしまう。こうしたカップル文化は、男ばかりが外出することになりがちな日本社会と比べると、一見開かれて見えるかもしれないが、実は非常に面倒なものだ。高校生のグループ交際でもあるまいに、いつも同じメンバーが顔をそろえ、家族ぐるみのお付き合い。仮に面白そうな人物と知り合い、ぜひ家に呼ぼうと思ったら、その配偶者にも声を掛けなけ

ればならない。それがたまたま気の合う人物ならいいが、どうも虫の好かない人間だったらがっかり。

またカップル文化とは、特別な理由でもない限り、女同士、男同士だけで遊べない文化でもあるのだ。

カナダに着いた当初、私たちの行くパーティーは当然のことに夫の友人関係のものがほとんどだった。そしていわゆるWASP（白人、アングロサクソン、プロテスタント）の彼の友人は圧倒的に同種の人間で占められていた。中国語を専攻した関係で中国人の知り合いは少しいたが、他の少数民族、特に黒人は皆無だった。多民族都市とはいえ、異なるグループ間の交流は驚くほど少ないのが現状だ。

WASPというのは一般的に言って、真面目で固く、禁欲的な人々だ。裏を返せば、他人行儀で冷笑的。朗らかで情熱的なラテン気質と対照的なものがある。若い人たちのパーティーでもその傾向は見てとれる。酔っ払うほど酒を飲むわけでもなく、上品な分どうもストレスが解消されるといふより逆に溜まりそうな感じ。

パーティーでは夫の友人の妻やガールフレンドと知り合ったが、ほんとうの意味で打ち解けたことは稀だった。私が外国人だということもあるが、カップル交際だとうしても一定の距離を保たざるを得ない。気軽に夫の悪口など口にできないし、『女同士の話』などというのも存在しにくいのだ。

日本ではパブリック（仕事など）とパーソナル（個人の付き合い）がごちゃごちゃになり、そのかわりプライベート（家庭生活）との間に一線が画されているのが普通だ。妻も夫もそれぞれの友人を持ち、彼らと表で会うというふうには。しかし、カナダのWASP文化では、仕事（パブリック）とパーソナルをきちんと分けるかわりに、個人と家庭の間に切れ目がない。その結果、何だかいつでもよそゆきの『交際』をしている感じで、妙にくたびれる。

従来はこうしたカップル（男女混合）文化のガス抜きともいえるべきものがあつた。例えば結婚前に新郎が男友達と出掛けて悪さをする『スタッグ（牡鹿）』や、女性が集まって新婚生活に必要な品をプレゼント



結婚披露パーティー

し、新婦をからかう『ジャウー』などだ。しかし最近ではそれすら男女一緒に『ミックス』と呼ばれる形で行なわれることが増えつつある。女性が仕事を持ち、男性も家事に関わるようになった結果として、伝統的な男文化、女文化が消えつつあるためだ。

ろうが、いよいよ息ぬきの場がなくなり、不便なことの上ない。

私が日本人の女友達と知り合い、彼女たちと遊ぶときもその配偶者と一緒というのが普通の形。たいていが国際結婚だから、夫たちは英語で、女同士は日本語で話すことになるが、こちらは英語が分かるのに、男たちは日本語が分からないので、結局みんな英語を話す。「ゆっくり日本語でしゃべりたいね」と時々女ばかりで食事に出掛け、これを『ガールズ・ナイト・アウト』と呼ぶのだが、基本的には反則行為だから、夫たちはいい顔をしないのである。

カップルでパーティーに出掛けるということは、常に自分の寝ている相手を社会にお知らせし、独占的所有権を主張しているということでもある。『グループ交際』で会う異性はすべてが夫の友人か友人の夫。そんな場で仮にも不倫の気配など漂わせたら、即刻村八分となり、パーソナル（友人関係）とプライベート（結婚生活）の両方を失うことになる。当然のことに、そんな危険を冒す人はごくごく稀。だから誤解を

恐れずに言えば、カップル文化とは抑圧的で真面目、面白みのない文化ということになる。女同士の本音もなかなか言えず（すぐに夫の耳に入るし、グループ全体の知るところとなる）、男女が互いのセクシャリティーを楽しみ合う（罪のないいちゃつき）こともできない。

禁欲的なカナダ人

パーティーに見られるこうした「固さ」「清潔さ」はカナダ生活のすみずみに行き渡っている。仕事場で異性に個人的な冗談でも言えばすぐにセクシャル・ハラスメントとなり、他人をじろじろ見たら変態扱いされる。地下鉄でお尻でも触る男がいたら、すぐに警察が逮捕、起訴する。カナダでは体に指一本触れたら、それはハラスメント（嫌がらせ）ではなく、セクシャル・アサルト（性的暴行）とみなす。法的には強姦と同じ範疇だ。

こうした厳しさは女性にとって非常に安全な感覚を与える。カナダの犯罪率は日本より高い（アメリカよりはずっと低い）が、地下鉄で痴漢にあうこともないし、酔っ払

いに卑猥な言葉をかけられることもない。職場や学校で不愉快な冗談を聞くこともないし、労働者階級の読むタブロイド紙ですら、水着女性の「健康的」な写真を載せるのがせいぜいで、ポルノまがいのものが一般雑誌に出ることなど考えられない。

表現の自由ということから、ヘアを露出したポルノ雑誌も売られているが、一般の店では決して子供の目に触れないよう一米ートル三十五センチ以上のところに目隠しをして置くよう法的な規制がある。こうした雑誌ですら、女性を性的な対象のみとして描き、人間性を低めるような表現は禁じられているので、単に裸の写真がそこにあるだけで、暴力行為のシーンなど絶対に掲載されない。日本のコンビニでセーラー服姿の少女が足を開いている写真が否応なく目に入るとき事態はまったくありえない。

こうした状況は、そもそも禁欲的なプロテストントの文化にフェミニズムの勝利が合わさってもたらされたものだ。カナダに住み始めたころの私は、日本とのあまりの違いに、フーッと息を吐くような解放感を



移民が集まるトロントの台所 ケンジントン・マーケット

覚えたものだ。一言で言って女が暮らす上での面倒が極端に少ない。

ところがトロント生活が長引くにつれて、どうもこれはいいことづくめではないようだと思いつめた。

例えば大学でも仕事場でも一対一の面談は必ず部屋の扉を大きく開けたままで行な

われ、上司や教授と個人的な会話をするということがない。それは本人の性格や趣味のためではなく、個人的な話題に立ち入ることが権力の濫用（ハラスメント、アビュース）に結びつくと考えられているためだ。着飾って町を歩いても異性の視線を感じない。仕事で知り合った男性とお酒はおろかコーヒースら飲むこともない。喫茶店に座っても、他の客と決して視線が合わない。パーティーに出掛けても、一言のお世辞すら聞こえない。せいぜい「ユー・ルック・グッド（お元氣そうで）」という両性に通用する表現くらいだ。

表ではまじめだが家の中には楽しみがあるかというところでもない。北米の性的解放というのは、どうやらそれ以前は当たり前前のセックスすら罪だと感じていたプロテストタントが解剖学的に肉体だけ解放したもののらしく、性の文化面というかエロスの部分は相変わらず非常に貧困なのである（日本には春画の浮世絵に見られるような大らかなセックス文化が伝統的にある）。

女性版プレイボーイとも呼ばれるコスモポリタン誌（男性のヌードを載せたプレイ

ガールの主要読者はゲイの男性）はセックス記事で有名だが、一番激しいのは表紙のうたい文句で、中身はセックスに関する統計や最新研究結果などで非常に臨牀的。日本の女性雑誌的な「いやらしさ」とは無縁である。こうした統計を読むと、北米のカップルは平均して週に二、三回セックスしているらしいので、日本のサラリーマン夫婦の倍以上ということになるが、内容が伴っているかどうかはなはだ疑問なのである。

これはカナダ人と付き合った女性が共通して言うことだが、カナダの男はどうもセックスをスポーツのようにとらえている節がある。鍛えた筋肉をポンポンとぶつけ合い、汗を流す快感の追求というか、テニスのゲームに臨むごとき態度でベッドに来る。セックスは夫婦間の義務であるという考えが徹底しているから、数字的には疲労困憊した日本人サラリーマンより高得点を上げるかもしれない。しかしそこにはセクシーな眼差しとか、会話が不在なのだ。ある友人はそれを「カナダの男は頭と体がつながっていない」という言葉で表現する。

シャワーを浴びて、『それでは』という感じで汗を流し、試合終了後はビールを飲みながらテレビのホッケー中継でも見ましようかという世界である。つい数百年前まで荒れ野だったところを素手で開拓した人々の子孫だけあり、筋肉はついてるが（北米のアングロサクソンは英国の先祖より大づくりだ）、どうも手技には弱い。

もう一つ日本やヨーロッパとの違いは、セックスにおける男女平等の思想が行き渡っているということ。つまり『男が女をものにする』というアプローチはすでに過去のものとなり、セックスは成熟した両性の合意のもとで行なわれるという建前になっている。別の言葉で言うと、『男が女を喜ばせる』という発想や、『女を喜ばせることに快感を覚える男』という伝統的な価値観が崩れている。

しかし男と女が同じでないのは生物学的な真理だ。両者をまるで同資格のテニス選手のように扱うことには無理がある。余談だが、北米女性の間で『オーガズム』が大問題になるのは女性の性的快感を男性と同じようにとらえた結果だ。そして女性が

オーガズムを感じない場合、それは相手の男の技術や努力不足としてではなく、女性の側の心理的抑圧の問題として扱われる。どうも彼女らは損な落し穴にはまってしまう感がぬぐえない。

というわけでカナダ人とのセックスは、肉体が珍しい当初はいいが、長期的な関係になると飽きが来る。「セックスの喜びは純肉体的に得るべし」という決まりがあるようで、想像力によって新鮮さの不足を補うことは反則とみなされる。それは前に述べたように、ポルノ雑誌ですら単なる肉体の公開に過ぎず、そこにエロチックな『物語』を加えることは『不道德』だと考えられていることにもつながる。

性文化の問題は非常に微妙だが、人間と他の動物を分けるものに想像力があり、エロスこそが人類文明の根源の一つであることはあらがいのような事実ではなからうか。産業革命以来の世界が伝統的な男女の役割区分に衝撃を与え、職業、社会、法律、経済の各方面で男女の差が失われていくこと、別の言い方をすれば男女平等が獲得されていくことは自然の流れかもしれない。

しかし、その過程を推し進めるうちに、得るものと同時に失うものが大きいことをカナダの現状が示しているように見える。

さて、男女の枠のしがらみに嫌気がさして自由平等の国カナダに飛びこんだはずだった私は、こうして想像もしなかった不自由さと出会った。セクシャリティーの表現方法が簡条書きで定められた窮屈な日本VSセクシャリティーを無意識に抑圧する形で両性の社会的平等を獲得した形のカナダ。時代と場所を問わず「性の一致」が夫婦円満の秘訣であることは正直な大人ならだれもが知っている。そして『性』とは非常に個人的なものであると同時に社会によって規定される文化の側面を強く持つ。言い換えれば国際結婚は異文化間性関係である。

そしてこの微妙なコミュニケーション問題を解決する手段としてカナダでは職業的なカウンセラーに頼るのが常套（じょうどう）なのだが、私が経験することになったカウンセリング事情については次回に譲ることにする。

ー つづー

（写真提供・筆者）

パイプのつまり

栃木県宇都宮市 古沢 涼子

受話器のむこうから、「こう何回もつま
るんじゃない、何か普通でないものが入っ
てるんだよ。まっすぐでだんだん太くして
あるんだから、つまるような配管じゃない
んだけど。どうしようもないね。天井破
ってパイプ切ってみるしかないね。もうム
ダ足は嫌だから、大工さんとバキューム
カーの手配してよ。話決まったら電話くれ
れば合わせるから。部屋は全部で十だっ
け、いつでも開けられるように。それか
ら、ポリバケツ五、六個用意して。汚
水がたまってるんだから、出てこないわけ
ないから」と配管屋。

木造モルタル二階建、築十年のこのア

パートは、単純な一本ヨーカン型に瓦屋
根。このたび二階のトイレの流れが悪くな
り、とうとう最終段階まできてしまった。
うちは大家であるからして、不動産屋と手
分けして、キレイな電話もあちこちかけ
て、ようやく週あけに工事の段取り。私が
建てたものじゃないけど、今、管理に動い
るのは私しかないからなあ。

これで一週間は私はトイレの騒ぎで費や
すことになるんだと思うと、またまた腹が
立つ。うまく開通したってどうせ後始末が
まだ続くんだから。不潔って疲れるのよ
ね。目を覚ますのが嫌になってるから、私
も最終段階にきてるらしい。

オムツでもなしナプキン
でもなし

こわごわ待ってた工事の朝。大工さん
は、アパートを建てた棟梁が来てくれた。
配管屋のほうは、電話でまくしたてたオヤ
ジじゃないのがよかったような残念なよう
な。棟梁が主な指図をする。

「トイレのパイプは、一階の天井裏をタテ
に長く一本、傾斜つけて通してあるんだ
よなあ。部屋の中で切るのは、あんまりじ
やねえの。上の端の空気抜きのとこから切
ったほうがまだましだろ。まず、あすこ開
けて押してみるべ」

バキュームが来る前に下相談かと思ったら、工事はいきなり始まった。非常階段にシートをかけたかと思うと、もう切っちゃった。音たてて汚水が落ちる。これも豪快ながめの一種かなあ。よくよく覚悟していたから、やっぱり臭いけど上澄み(?)の紙のほうでまだよかった……などと気負った納得をする。いちばんひどいことはこれで終わりだといんだけど。

堅いホースのような長い管を上流から入れて探る。予想していたあたりで止まり、いよいよ本番の緊張。力を入れてつつくと、ガシ、ガシと妙な音。

一体、何を流したんだ?

疑わしい部屋はこのころにはもう分かっていた。上流から二つめ。「うちは大丈夫」と言って開けなかったのは心当たりがあったかららしい。うっかり入られてしまった水商売人。幼児がいる。半年前まで、なんと夜の託児所をこの部屋でやっていた。以前にも下の部屋へバケツ一杯くらいの水をもらしたことがある……。

そのとき抗議しに行ったら男がいて、「帰れ」と凄まれた。だから怖くて、何が降



ろうともう言えない。時々夜遅く、ガンガンガンガン!と足でノックしてだれかが入ってくる……。

何とまあ問題点は、問題が起きればウワツとばかりに出てくるものだ。この住人は何とかしなけりゃ。でも今は、ツマリが問題。

オムツ。パンツ。パンティ。ナプキン。子供のオモチャ。薬のふた。流れ入る可能性のあるものを、作業しながらみなそれぞれ

れに考えている。が、この音にみな、しばし考えこんでしまった。

トイレから入って、ガシガシと音をたてるもの、なーんだ?

管の先を斜めに鋭く切りなおし、再挑戦。おっと、今度は少しずつ中へ入ってゆく様子。声があがる。あれもやっぱり歓声だよ。私は下流へ走る。確かめたい。もちろん根がミィーハーだから興味が一番だけど、責任の追及、保険の申請、色々あるわ

な。

下水のふたを急いで取りはずし、しゃがみこんで目をこらす。解説不要の、あたりまえのモノが少しずつ流れてくる。何でも今は流れ出てくるのが嬉しい。人だって家だって、便秘はツライもんね。

何にも特別なものは来ないがなあ……あら、あんなもの初めからあったっけ？

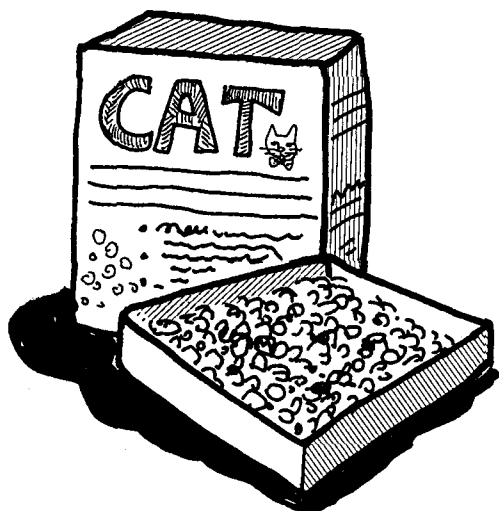
正体不明の証拠物件

それはコロコロと小さくて、近くに産地がある鹿沼土にそっくりだった。挿し木や鉢ものによく使われる、火山性で軽い粒状、淡色の土である。見たところ、粒の大きさは径一センチメートルくらいいか。まさか、植木鉢の土を流したんじゃないでしやうね。

上流の工事は順調に進んでいるらしく、人手の半分が下流にまわってきて、原因の調査に加わる。手袋で粒をすくい上げ、指でつぶしてみる。

「やわらかくて、中は白いよ。土じゃないね。紙なのかなあ」

粒はあとからあとから流れてくる。どこ



かでこんなもの見たことなかったかしら？

懸命に記憶の物置をひっかきまわす。あ？

そばにいた、その部屋の幼児に声をかける。まだ三歳くらいの女の子で、無邪気に面白がってずっと見ている。

「猫ちゃんいるでしょ。オシッコはどこにするの？」

無理に聞きだしてはいけない。ふっくらした太ももの内側に、不自然な火傷の跡がある。虐待されているかもしれないのだ。

「ハコにするの。あのね、おとなりで工事

したらつまっちゃったの」

後半は、教えられてきた言い訳を復唱しているようだった。もういいよ。出てきたモノから聞くからね。

二階全体に声をかけ、水を流してもらいながら押し続ける。そのうち砂も混じって流れてきた。

やはり心配なのか、問題の女性が階段から下りてきた。まだ二十代か、小柄で色白で目が大きくて、化粧映えしそうなタイプ。さっきの子に似ているから、実の母子だろう。もう一人、もっと小さな子もついてきている。

「この粒、見覚えありませんか。猫用のトイレに、こんなを使うような気がするんだけど」

私はもう、証拠物件をガラスビンに入れて手に持っている。

「うちでは砂を使って、ゴミに出しますから」

犬や猫を飼っている部屋は他にもある。飼われた動物のほうに同情して、責めなかった。甘かったかな。

それはそれとして、うわっつらの言葉を

あてにして会話をしているわけではない。
型通りのあいさつに近い。それでも返事は
心に響いてくる。

「コンナフウニ、ソノ場ノガレノウソカ
サネテ、生キテキタノ」

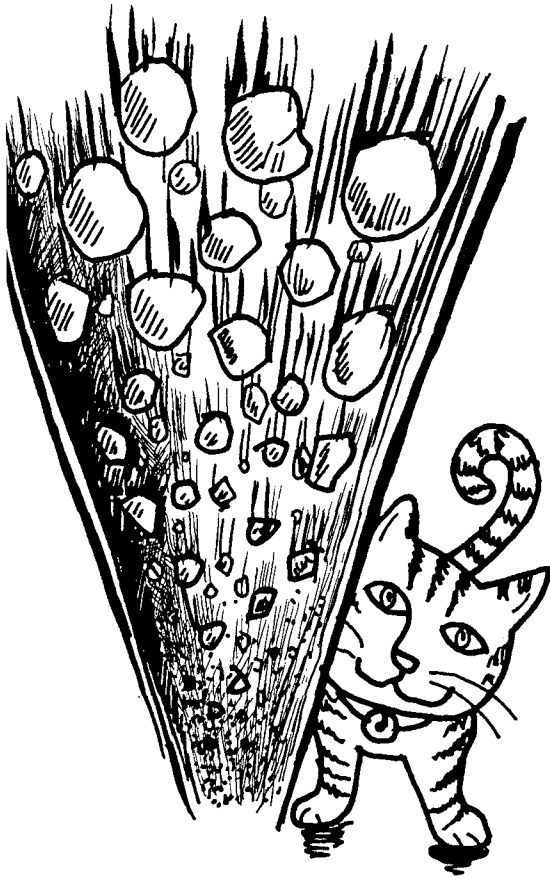
私はいつも、人の逃げ道はふさがない。
そのかわりモノはクルルに追いつめるぞ！
例のビンを持って自転車でちよいとペット
ショップまで。もう十時になるから、つい
でにジュースでも買ってこよう。

パイプの中にダムをつくる

「猫ちゃんのおしりにやさしいパルプの
粒。トイレにも流せます」

まるでそっくりな品物が大きな袋に入っ
て売られていた。白っぽい粒の中に、赤や
緑の粒がわずかに混じっているのまで同
じ。色の粒は消臭剤らしい。

「配水管の状況によってはゴミに出すこ
と」



「流すときは一度にお茶碗一杯くらいま
で」

注意書きがつけたしてある。責任のがれ
の言い訳まで一緒に売ってようなもの
だ。ひどい商品。三十メートルも下水を流
れ下っても溶けないで転がるだけのもの
を、流せるといって売るなんて。

猫の飼い主は、この粒と砂を混ぜて使
い、せっせと流し、パイプの中にロックフ
イルダムを建設していたわけだ。やがてパ
ルプ粒は玉石のように重なり、そのすきま
は砂でしっかり埋まり、がっしりと立派な
ものが完成した。その結果が、ガシガシ！
という妙な手応えだったのだ。

これでは、つき崩してもそう簡単には流
れない。今度は途中に、中州のようになっ
てまだ溜まっているだろう。

着いたバキュームカーに川の水を吸んで
きてもらい、上流から洪水のようにたっぷ
りと流して、今日の工事の仕上げとした。

午後は事務処理。保険屋が来て話を聞き
写真を撮る。かかっている総合保険では、
部屋の損害の修復費は全額出るが、「つま
りをもと通りに」する作業のぶんは出ない

B.A.カー／清水久美 訳
才女考
〈優秀〉という落とし穴 人生に
意欲的な女性達に。 2575円 310

江原由美子 編
フェミニズムの主張
性の商品化など4つのテーマを選
び、議論を尽くす。 2781円 310

ハルダッハ＝ピンケ他 編
木村育世 他 訳
ドイツ/子どもの社会史
1700-1900年の自伝による証言
子ども時代の資料集。 7725円 310

ベック＝ゲルンスハイム／香川 訳
出生率はなぜ下ったか
ドイツの場合 男女平等の上に築
く家族の未来を展望。 3090円 310

現代女性作家研究会 編
現代イギリス女性作家を読む
①フェイ・ウェルドン／②アニ
タ・ブルックナー／③P. D. ジ
ェイムズ／④バーニス・ルーベ
ンス／⑤アンジェラ・カーター
46判上製カバー装 ■ 内容見本呈
全5巻完結 2369円 250

国際女性学会 編
〈女と仕事〉の本 1・2・3
1945-1990年までに出版した本の目録
全3巻完結 ①②各2060円 ③2472円

E.ショーター／池上・太田 訳
女の体の歴史
イヴ以来の重荷から解放されるま
での女の体のドラマ。 3296円 310

* 定価は消費税込みです。



勁草書房

東京都文京区後楽 2-23-15
☎ 3814-6861 (編) 東京5-175253

三人と一匹の事情

その夜、私は疲れ果てて風邪をひき始めていた。なのに寝付かれない。実は、まだ気がかりなことがあるのだ……。

子供の泣き声にはね起きる。あーあ、やっぱり。深夜零時半、彼女が子連れで店から帰宅する時間だ。いつもは考えもしないという。どうせそんなところだろうよ。

次は不動産屋に向き事情を話す。

「嚴重に注意などとまどろっこしいことしないで、すぐ出てもらいましょ」

そりゃ助かるわ。でも、おたくで入れてくれたお客じゃないの。もう少し客種をそろえてよ。朝型と夜型と混じっちゃ、家庭内

だってトラブるんだから。

ことだが、窓を少し開けて耳をすまます。「うるさいーっ！ なんて泣くのよおーっ！」

ひきつった叫び声に子供の泣き声、猫のギャーギャー声までからむ。

「ワタシダッテ、セイイッパイヤッテルンダカラ……ナキタイノハコッチナナンダカラ……ナンデ、アンタタチダケデモ、ワカッテクレナイノヨォッ」

どこか、なぜか、立場をこえて共通な母親の悲鳴が、湿っぽい六月の闇を通して心にしみてくる。

彼女にしてみれば、一日気をもんで、夕方から仕事に出てオトコのストレスを笑って受けて、ようやく帰宅したところだ。声も手も上がるだろうよ。そして三人と一匹

で、泣き泣き寄り添って寝入るのだろう。

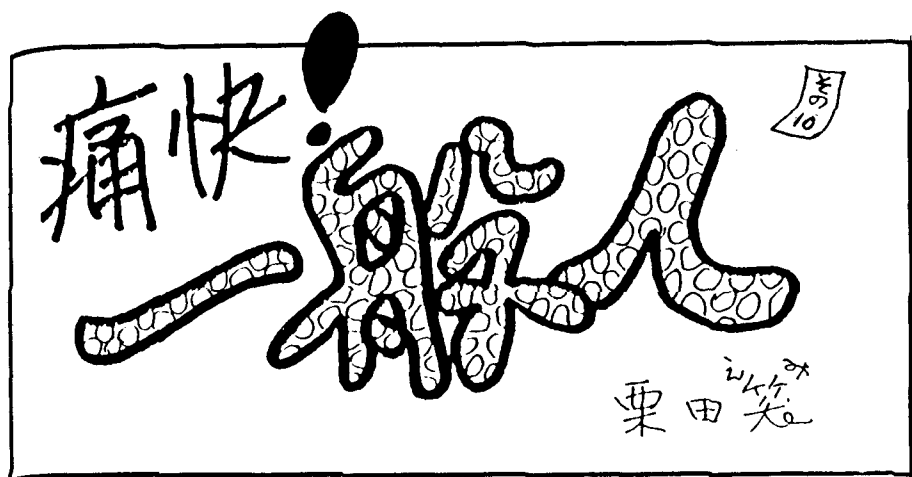
だめだよ、人だってモノだって鵜呑みにしちゃあ！ 自分ばかり泣くことになるんだから。あんただけが悪いんじゃないけど、うかつさは責任とらなきゃ……うそとごまかしは加算になるしね。

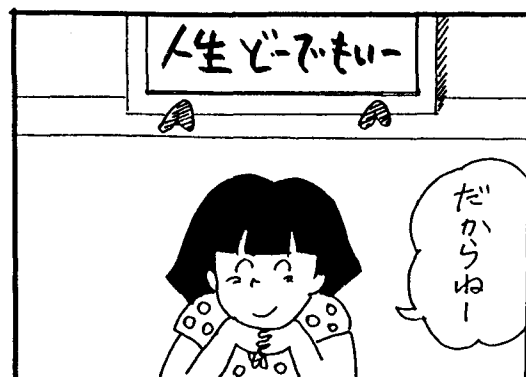
今度は、もっと仲間がいそうなどこ見つかるといいね。お母さんにも子供たちにも、身近にお友達ができれば、それだけで随分案になれるよ。

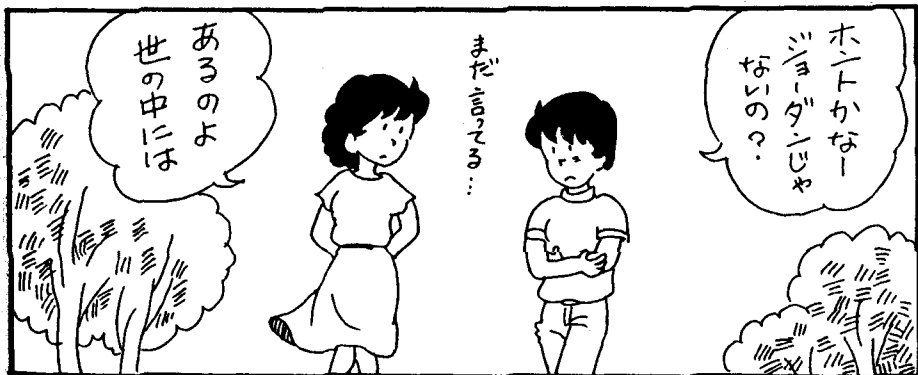
ほら！ あんたの流した気持ち、今度は私のところにきて溜まっちゃったよ。どーする？

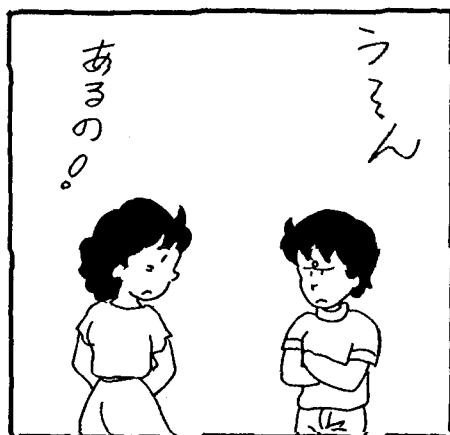
「わいふ」でも読んで、キレイに流してもらおうか？

(え・山田京子)











生命のコンサート

ひょんなことから、国連支援団体が主催する舞台「赤毛のアン」にステイシー先生役で出演することになりました。私たちができるささいなことで、文化を通じて、世界中の恵まれない子供たちを少しでも助けることができたらと思っています。(宝塚歌劇団に在籍していたという経歴があって、出演交渉を受けました)

趣旨に賛同してくださる会員

の方を募り、年会費を納めていただくという形で、今回の舞台の招待状を送ります。収益金は全額、世界の恵まれない子供たちに送ります。(昨年は六百万円をユニセフに寄付しました)今年にはカンボジアの子供たちに鉛筆やノートを送りたいと考えています。

★生命のコンサート★

一部 赤毛のアン

二部 ベートーベン物語

▼八月四・五・六・七日(二時開演)カナダ大使館ホール

▼八月八日(三時、七時二回公演)サントリーホール・小ホール

▼十一月十五日(二時・六時二回公演)ドイツ大使館文化センター

▼詳しくは豊城智子までお問い合わせください。 ☎〇四二二ー四三〇二二〇 〒181三鷹市下

連雀六一一八一

ご協力ください

「摂食障害」(拒食症・過食症)の研究のため、ご自分の経験を話してくださる方を募集しています。インタビュー形式で自由に話していただきたいと思っています。

▼問い合わせ先 フェミニスト・セラピー窓 浅野千恵 ☎〇三三四九〇一四九六 月〜金十時〜四時

ゲシュタルト療法を体験しませんか

自己成長を願っている方、自分の可能性を見付けだしたい方、ゲシュタルト・ワークセッション体験学習を体験しませんか。親子・人間関係・自分の性格などで悩んでおられる方も問題解決のためにぜひご参加ください。

▼日時 毎週水曜日午後七時から九時(随時受講可)

▼受講料十回五万一千円(会員

制)

▼申し込み・お問い合わせは、東京ヒューマニクス研究所

〒141品川区西五反田二一三一一

一一九〇四〇三三三四九二

一八三八

オークランド (ニュージーランド) ステイのご案内

折角貴重な時間を割いて海外まで行かれるなら、その街をのんびりと見る旅(マーケットで自分の好物を買って料理をする、公園で人々をながめる、美術館をのぞくなど)をしてみたいかがでしょうか。

私の友人でオークランド在住の日本人家族が、手助け(通訳・買物・送迎・観光など)をいたします。また冬休み、春休みのホームステイ(対象・小学生・中二くらいまで)もお手伝いします。

▼興味のある方は、☎〇四六七一八六一三七一六（午後八時～十一時まで）平川美子

カウンセリング・グループにあなたも参加しませんか

自分を知り、他人を知るための小さなグループ「成長グループ」です。

日常生活を離れたところで、人との関係を見直しゆっくり自分の生き方を考えてみませんか。

▼期間 九月二十四日～十二月十日 毎週木曜日 全十二回

▼時間 A 午前十時～十二時

B 午後六時十五分～八時十五分

▼参加費 全回で二万四千円

▼場所 朝日カウンセリング研究会 成長グループ事務局

▼連絡先 〒151渋谷区代々木一五四一五〇一三〇一五〇三三三三〇一三三三〇

“くりむ”を読んでもみませんか

投稿誌“くりむ”では執筆者（購読者）を募集中。七月発行の十二号の特集は、「姓が変わるのいやすか？ 夫婦別姓を考える」です。見本誌は一冊六百元です。

▼〒251 神奈川県藤沢市大鋸一〇四一四一〇三 上野方まで

子猫差し上げます

生後約一カ月、三匹（茶トラ雄、茶トラ雌、黒トラ雌）います。トイレのしつけ済み。はがきでご連絡ください。

▼〒146東京都大田区池上7-16 18ブルコート102 宮澤裕子

私のPPR

切手を貼らない40信「たったひとりの少女のために」

離婚のとき、奪われるようにして別れた最愛の娘へ、それでも愛し続ける母親は何ができるのでしょうか。七年を経てたどりついたのは娘へ「命の伝言」を書き残すことでした。離婚にまつわる子と親の面会権、共同親権を求めて闘った裁判の記録でもあります。

▼龍川美沙子 著 二〇六〇円
▼あけび書房刊 ☎〇三三三二三四一二五七



私の体験読んでみて

わたしは五十四歳の専業主婦です。六年前に八年間勤めた保育の仕事辞めて、カウンセリング学習とフェミニズムをドッキングした話し合い学習を自分

「おっぱい子育てアトビーの子とともに」

で企画し実践しています。その体験をまとめたコピー誌をお分けます。三百円送料は別です。
▼〒376 桐生市相生町一三二六一一四 小林やすえ

前号で紹介された「おっぱい子育て アトビーの子とともに」が出来上がりました。私のささやかな本をお読みくださり、また別の体験、考えなど教えていただければ幸いです。送料分の切手二二〇円を同封のうえ「わいふ」までお申し込みください。

▼東京都練馬区 上谷亜育



あの戦争のなかにほくもいた



石浜みかる 著

歯科医として診療の傍らキリスト教の路傍伝道をした父がある朝突然「特高」に連行され、治安維持法違反で刑務所へ入れられた。そのとき著者は二歳、二人の兄は国民学校初等科一年生と三年生だった。

「非国民、スパイの子供」といじめられながらも、「ご真影」に最敬礼するのはお父さんを悲しませることになる、と悩む兄たち。故郷の親元へ身を寄せたけれど、事情を語れないまま苦労を重ねる母。

時代の波に飲み込まれそうになりながら、父を信じて懸命に生きる母子の姿に思わず胸が熱くなる。子供と一緒に読んでみたい本である。

国土社 一六〇〇円(N)

女性のための漢方マニュアル

漢方薬・指圧・薬膳・民間療法



木下繁太郎 著

女性ならだれでも内心、心配だなあと感じたり、気になったりする体の症状を何かしら持っているものではないだろうか。病院に行くのも億劫だし、かといって薬局に駆け込んで売薬に頼るのも抵抗がある。その点漢方薬は体全体の調子を整え、

自己治癒力を高めることで治すことは知られてきている。使ってはみたいが名前は難しいし、何をどう使えばいいのか、見当もつきにくい。この本の面白いところは、女性特有の心配ごとを症状別に「漢方薬」「つば」「食べてなおす」

「生活の中で」といった項目だてをし、リアルなイラストをふんだんに使って、具体的に教えてくれる点にある。とても分かりやすい。試してみようという気になる、とても身近なマニュアル書だ。

大月書店 一五〇〇円(S)

ドミノ倒しは止めにして



春野弥生 著

子育てを通して現代を問う本。子育ての失敗？というどん底からはい上がって光明を見出す体験をつづった本である。子供自身の幸せよりも、産業界の戦士として子供を仕立て上げていく教育のカラクリ。他

人を排除して孤独な子育てにはまり込んでいく親。その構造の中で、子供たちは登校拒否や拒食、非行など、親の心をさいなむ行動に走っていく。親と子の葛藤の中から、それまでの自分の価値観を放棄し、

ほとんど死と再生といえるほどの壮絶な体験をつづったこの記録は、社会的・心理的な自己形成史としても興味深く、読者の心を打つ。

明石書店 一六〇〇円(K)

デンマーク・スウェーデンで見た在宅福祉

福祉の専門家が44時間で見た
福祉大国の現場



小川政亮・西澤秀夫ほか著

経済大国日本が福祉大国たり得ないのはなぜか？
本書は、デンマーク、スウェーデンの在宅福祉を中心とした視察旅行のレポートである。福祉の専門家あり、主婦あり、様々な立場の人たちが様々な視点から

北欧の福祉の現状をとらえ、わが国の福祉の問題点を探っている。
「障害を持った単身者がなによりも個人の尊重を第一と考え

る北欧の福祉。それに対し、福祉機器も満足に手に入らない、画一化された日本の福祉。北欧に学ぶべき点は何か？高齢化社会にあって、顔を背けることのできない問題である。

明文社 二〇〇〇円（H）

少年期をいきいきと

九・十歳は飛躍台



小林信次 著

九・十歳（少年期）は「キャングエイジ」と呼ばれる。親よりも友達を選び、そのかわりの中でいざこざ、対立を経て、仲間や集団の中の自分を確かめ、やがて自立に向かう大切な飛躍の時期である。今この少年期に活気のある生活ができず、仲間の

中での自分をはっきりつかめないままの子供が増えているといわれている。
この時期の子供たちの心のゆがみ、いじめ、問題行動などを学級という集団の中で、現役の小学校教諭である著者は解決しようとした。子供たちにどのよう

に乗り越えさせ、その生活をどう立て直したのか、一人一人の例を挙げ、体験を通して述べている。
現役の教師に実践で生かしてもらいたい本である。

日本書籍 一六〇〇円（K）

海を渡った盗聴事件



菊地原英二子 著

一九八六年、東京都町田市で現職警察官による共産党幹部宅電話盗聴事件が起きた。証拠品押収にもかかわらず、事件は不起訴。真相究明をと、市民による「盗聴事件を考える住民の会」が活動を始め、国連への提訴が

計画される。そして、九一年、国連小委員会での発言が実現。
本書は、住民の会のメンバーである著者の手記の形をとり、併せて運動の中間報告をしている。自分史、事件、大きな感動であった「国連要請への旅の様

子が生き生きとつづられている。堅い内容でありながらすんなり読めるのは、「歌詠む主婦」である著者の感性によるものか。
一九八八年上梓された「町で起こった盗聴事件」の姉妹編。リベルタ出版 一五六〇円（F）

読・ん・で・み・ま・し・た

幼年記

かがやく大気のなかで

笹山 久三 著

東京都八王子市 和田 好子



最近の子供の生活はひどく人工的で、テレビとファミコン、車で外出、遊ぶ場所は室内が主、というようなことらしい。何と日本は変化の速い国だろう。

一九五〇年、今から四十年ほど前に生まれた人の子供時代、高知県は四万十川のとおりとはいえず、一家はいろいろを囲んで暮らしていたのである！

いろいろという縄文時代さながらの、原始的な暖房、炊事器具がまだそのころまで広く使われていたのだ。

五〇年生まれの著者が、いろいろを囲む幼年時代を懐古した自分史の一冊である。そのころの子供は山や野を駆け回り、

深い谷にかかったハシゴのような橋を四つんばいになって渡り、一日中様々の冒険に出会いつつ遊んでいた。

親が教えるのは勉強でもお行儀でもない。マキ割りや飯炊き、四万十川でのウナギ取りなど、労働と生産の方法である。山仕事で生きる貧しい両親だが、子供に対しては権威と教育力をしっかりと持っている。子供は両親を愛し尊敬しているのだ。

父親は肺病にかかって、営林署の勤めを辞めたような人で、地位もなければお金もない。それでも一家を率いる家長としての力を持っている。家族は彼を中心

に、固く結ばれて生きていく。

物語は「イタンボ（イタドリ）」「アカイコ（沢蟹）」「イモリ」「虹色の魚」など、自然の動植物との触れ合いをタテ糸に、病気が悪くなって父親が入院、家計を支えて母親が働き、小学生の子供たちが家事を受け持つというような、苦しい一家の歴史をヨコ糸に展開していく。

近所の人に「ホイト（乞食）の子」と言われるような貧しさの中に、「かがやく大気のなかで」と懐かしむ子供時代が、どうしてあり得たのか？

豊かな現代は反省を迫られる。

農山漁村文化協会 一三〇〇円

らくだ式学習法

主婦が出会った〈押しつけない〉学習法の秘訣

間瀬 中子 著 平井 雷太 協力

東京都新宿区 田中喜美子



子供に学習を押しつけない、命令しない、強制しない。自分で毎日何枚のプリントをするかを決め、自分で採点をするというらくだ式システム。あくまでも子供の自発性を尊重するというこのシステムは、学習法としては画期的である。しかしほんとうに子供が、このやり方についてくるのだろうか。

この一冊を読んで、疑問が解けた。らくだ式とは、ただ子供の自発性に任せて子供を放っておくのではなく、要所要所で子供のやる気を引き出し、自分で物事を選ばせていく、真の教育に必要な機能が存在しているのである。

例えば一日に何枚のプリントをやるかということ、子供にしっかり約束させる。「六枚持って帰って五枚やってくる

より、四枚やってくる約束をして、四枚きちんとやってくるほうが大切」というらくだ式は、自分で決めたことをきくとやりぬくことの大切さを子供に伝える。自分の言動に責任を持つということ、現代の子供たちにとりわけ大きく欠けている部分なのだ。

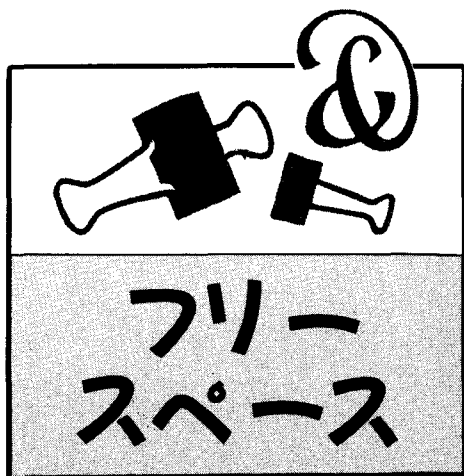
やったことの内容を記録する記録表のつけかたも、自学自習のためには大切だ。またいやなときはいや、という自由を子供に認めながら、話し合いを重ねる中で、自分で選択させ、責任を持たせるやりかたは、子供に与える「自由」が単なる見せかけであったり、逆に甘やかしであったりする現実反省を迫る。「強制でも放任でもない」らくだ式を説明するこの一冊は、解説書の域を越えて、子

育ての真の秘訣を私たちに伝える貴重な作品だと思う。

著者はらくだ式の指導員として主婦から社会復帰を実現した女性。一步一步、試行錯誤を重ねながら学んでいった内容は、一人の女性の成長の記録としても興味深い。

押しついたり、干渉したり、やたらに心配したり、知らず知らずのうちに子供のやる気をそいでいる私たち母親。らくだ式を知るためばかりでなく、子育てを考える一助として、絶対に読んでほしい一冊である。

日本評論社 一五〇〇円



かたつむりの日々

(一)

東京都練馬区●関根裕子(40歳)

私の今年の運勢は最悪だということだが、今までだって、最悪と思える年は多くあった。

今から十五年前のことだ。短大卒業までは、順調に平凡な娘だった。ところが就職してから、仕事を転々とし、新しい仕事を

探すのにも飽きて、家にいた。

家について、本だけ読んでいた。「何か」をしたかったけれど、それが「何」なのか分からず、手も足も出すことができなかった。

人生への漠然とした疑問で一杯で、あまり外出もせず、自分の殻に閉じこもっていた。

友人と話をしても私の孤独は深くなり、一人旅に出てみても、帰宅後は前にも増して、虚無の感情にとらわれるのだった。

昼近くに起き、朝昼兼用の食事をする。ご飯・味噌汁は、母が朝食用に作ったものを温める。食後は、自分の部屋で読書さんまい。夕方、母に聞きながら夕食の用意をし、テレビを見ながら母と食事をする。

母は、私のことに対しては、もう何も言わない。仕事を転々としていた当時は注意もし、色々言っていたが、何を言っても私の生活態度は変化しないので、あきらめているようだ。朝は起きなくて、夜はいつまでも起きている娘の生活に内心では困惑していたと思う。別に不良になり他人様に迷惑かけているわけではないので、黙認して

いるようにも感じた。父は、仕事の関係で週末しか帰宅しない。私のことより仕事で頭が一杯らしく、顔を合わせても何も言わなかった。

私は、夕食後、自分の部屋でテレビを見る。視覚を通して、世界中の出来事を知る。映画を見て感動できる。深夜には、ラジオの深夜放送を聞くのだ。音楽を聞きながら、本を読む。幸福なことに、読む本はたくさんある。古本屋で見つけてきた本が本棚に入りきれず、山と積まれている。文学、宗教、哲学、旅、映画、芸術、ほか…子供時代から、小遣いの全部を書籍代に使ってきたのだから、当然かもしれない。

私は、「かたつむり」のようにまるまっている。まるまって本を読んでいる。「私だけの至福の時間」である。

このような生活ができるのは、父母のおかげである。それが、深い理解とは異なる、単なるあきらめによる放任主義であっても、当時私の甘えを許してくれたことを感謝している。

私は、地球上、真実一人ぼっちの気持ちがして、どうしようもなかった。このまま

生きていても、どうせ人間は死ぬのだ。どんな仕事も、人生も、恋愛も、生活も、無意味に思えた。自分自身が、何のために生き、何をしたいかを問い続けていた。周囲のことを考えられなかった。父母の気持ちも、知る余裕はなかった。ただ朝が来るのが、怖かった。

(二)

私が『かたつむり』の生活から脱出できたのは、三十歳になって一つの出来事があったからだ。

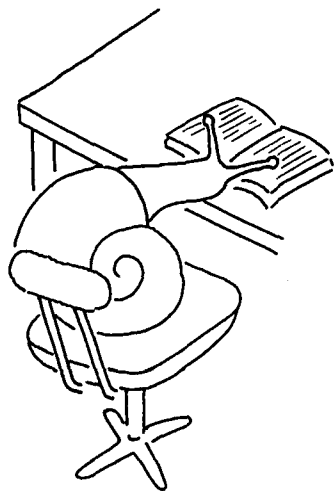
時々会っていた男性との間に、子供ができた。二月の寒い日、相手の男性と区役所に婚姻届を出しに行き、法律上の結婚をし

た。二週間後、私は、自分の部屋の荷物を小さなトラックに積み、隣のアパートへ引っ越した。

結婚式も、指輪も、なかったが、新しい生活はうれしかった。母が、カーテン、洋服ダンス、ガスレンジを買って、祝ってくれた。父は、突然の出来事にぼうぜんとしていた。

生まれた赤ん坊は、放つといでは死んでしまうのだから、必死で世話をしなくてはいけない。

私は食べたくなくても、子供には食べさせないとうるさい。外出したくなくても、公園で、ほかの子供たちと遊ばせないわけ



にはいけない。早起きしないと、子供を学校へ送り出せない。つまらない家事をして、一日が過ぎる。もう、深夜放送を聞くことはできない。『かたつむり』のように、まるまって本ばかり読んでいた日々がなつかしい。

叔母の死

東京都板橋区●山本雅子

平成四年四月八日、叔母が亡くなった。明治三十八年生まれ、八十六歳だった。

叔母と私の関係は、血縁という以外にはほとんど何もなかった。六年ほど前のある日、軽費老人ホームから印鑑を持って会いに来てくれというハガキを受け取って、「ああ叔母が生きていたのだ」と思い、何か大変なことを頼まれそうな予感を感じながら、その老人ホームに行った。

案の定、印鑑は老人ホームの入居の保証人になるのに必要だった。すでにそのホームで十五年過ごしていたのだが、保証人に

なっていた人が最近亡くなり、代わりを立てないと出なければならぬという。八十歳という高齢ではあるし、父も母も（私の）そのほかの兄妹もすでになく、子供もいない彼女には、血縁は私たち兄妹四人しかない。

多分あの兄たちはきつと断ったのであろう。断るつもりなら私も行かなかった。だけど私にはどうしても断れなかった。今までだれにも迷惑をかけまいと一生懸命生きてきて、余命いくばくもなくなってきたから、住むところを追われる生活が、あまりにも気の毒に思えたからである。

自分の家庭も大切にしていたから、名前は夫のを使わずに私の名前を署名した。幸い、私が公務員だったので通用した。

それから六年、自分の子供たちもみな巣立ち、私も勤めをやめ、知恵遅れの子供を預かっていたのんびりした第二の人生が訪れた。その子とともに月一回くらいの割合で老人ホームに行き、いっしょに外食したり、温泉に行ったり、ほのぼのとした人間関係が出来上がった昨年の夏、急に心臓発作をおこし、救急車で入院したのである。



早速見舞いに行くと、もう元氣を取り戻して、「早くホームに帰りたい」と言い、高齢であるということで付添婦が付けられていたが、「何もやってくれない。お金を払うのがもったいない」と文句を言っていた。

十日めくらいであつたらうか、病院からの電話に駆けつけると、叔母が、自分でできるからと言って付添婦を帰してしまったこと、一人でトイレに行くのはおぼつかないで、家の人が付き添ってほしいこと、病院内にお金や貴重品を持ち込まないこ

と、を言い渡される。私の家から三時間以上離れた病院、いつ治るか分からない病人、もちろん老人ホームは病人は引き取らないとすると……。私は保証人の重さに頭がクラクラした。

まず病院にわがまま言って付添婦を帰したことをわび、ほかの付添婦を至急探してくるよう頼むとともに、叔母には病院に銀行員を呼んで預金をおろすのはまずいから、預金通帳・印鑑を私が預かり、私が付添婦に支払う、何年かかるようなことになっても、私が支払うから、安心して養生するようにと話をする。

私のほうは、その支払いをするために、十日に一度病院に行かなければならないハメになる。

往復で六時間余、一日がかりの仕事である。そして病人はといえば一進一退を繰り返して、いつ退院できるとも分からなかった。付添婦、病院の入院費、老人ホームの在籍費と、通帳の残高はみるみる少なくなってくる。

もう老人ホームには帰れそうもないから、引き上げようか。だけどその荷物はど

こに持っていくの(和・洋ダンス、茶ダンス、テレビ、コタツ、長もちなど)。私の家にはそれらを収容するスペースはないし、かといって、まだ亡くなってもないのに粗大ゴミとして処分することもできないし、ほんとうに私が支払うことになったら、あまりにも負担が大きいいし(ここでも保証人の重さを痛感)……。夫にも相談せずに勝手にした保証人では、だれにも尻のもっていくところがない。

ホームの庭の梅の花見を楽しみに冬を越したが、三月末、とうとう排尿が教えられなくなり、オムツをあてられることになる。醜く老いさらばえた老人には、羞恥心などないと思うのだろうか、カーテンも引かずのオムツ交換に私は思わず目をそらせた。

そしてその日から叔母は、食事をとらなくなり、口もきかなくなった。話しかけても表情を硬くし、口を固く閉じてジュースなどの汁ものも一切口に入れない。点滴も体全体で拒否。

衰弱が激しく、昼も夜もトロトロとしているようになって、唇をぬらそうとした

だけで口を一文字にひき、足から点滴を入れようとしても、どこにそんな力があるのかかと思えるほどの力で拒否した。人間としての尊厳を失ったときには、自ら命を断とうと、武士の血をひく明治の女がすっかり決心している様子に、私は言葉もなく、ただ見守るしかなかった。

叔母は白菊会に献体登録がしてあり、遺体はそこに引き取られた。「あの先生にホレちゃったからあそこに行くわ」と登録したそうである。

主婦たちの二十万円

横浜市港北区●織田裕子

昨年の夏、立て続けに聞いた話が友人たちの二十万円話だった。

その一は、夕方、友人が仕事から帰ったばかりのところへ、セールスマンが来て、フライドチキンの骨まで砕いて水に流せるという器械を説明するので、便利だとい取り付けたという。妹さんが関西にいる彼

女は関西弁の感じのよいセールスマンと話しているうちに、自分が焼いたクッキーまでごちそうして、「そういうことになったのよ。どうしよう」と言う。値段は二十万円弱。

昭和四十五年に上京した私は、夫の伯母のマンションでゴミをコーヒーのカス状にして、そのまま流せる、デイスポザーという器械を初めて見た。アメリカでは一般に普及していると言っていた。当時、マンションも珍しかったが、その器械にはつくづく都会を感じた。それ以来あこがれていたが、数年後、海を汚すので行政で勧めていないという新聞記事を読んだことがある。そのことを話すと、区に聞いてみたら禁止はしていないけれどやめるようにとの話だったと友人も言った。

その後、話し合いではずしてもらったというが「セールスマンにだまされた」という言葉には私のほうがムツとして「禁止はしていないから、だましたわけじゃないでしょう」「でも……」という一戦のおまけがついた。

その二。夏休みに帰郷した際に、友人に

会ったら、小中高と一緒だった同級生が下着のセールスを始めたけれど、二十万円もするセットだという。

「○ちゃんも○ちゃんも買ってくれたとい
うので、付き合いだと思って買ったら、み
んな利口なのよ。○ちゃんたちに聞いた
ら、下着は要らないから出資金という形で
定期預金くらいの利息をつけてもらうこと
にしたというのよ」と言う。「フーン、それ
はそれが利口よね」と私もうなずく。

その三。田舎のお土産を持って友人に会
いに行った。彼女は大学時代の友人数人と
会ったとき、「仕事したいな」と話した
ら、後日その中の一人から電話がかかって
きて、よい仕事を紹介するからと日にちと
場所と時間を指定されたという。出向くと
すでに何組かの人が来ていて、人数制限で
会場で商品の紹介があったという。

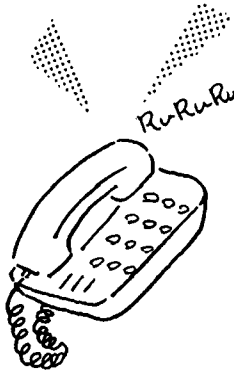
「何だと思う」と言うので「鍋でしょう」と
言ったら浄水器だという。確かによい水は
体によいことは分かるけど、二十万もする
商品は自分には売れないと思い、時間がな
いからとその後の喫茶店での話は断って帰
ってきたそうだ。

一カ月もしないうちに三人の口から二十
万円という話を聞いたもので「フーン、二
十万円ネ」と感心してしまった。

あれから十カ月はど過ぎ、バブルの崩壊
だ、株の暴落だという字や声が飛びかっ
ている今は、二十万円話も耳にしないが、あ
の当時は生活が便利になったり、健康によ
いことだったら、友人との付き合いに二十
万円は主婦が自分で決断できる金額だった
のだと思う。

だけど、その額が期せずして一致したの
は、どこかでだれかが主婦の出せる限度額
をはじき出した結果なんだろう。

バブル崩壊の今は、主婦の二十万円話も
やはり減額されているのじゃないかと思っ
ている。



夫婦逆転

茨城県つくば市 ● 山田永子

夫とけんかをした。原因は、どこの家にもあるようなほんとにささいなこと。夫が言うには、最近、夫婦の会話が少ないから不満なのだそうだ。（まるで妻が言いそう
な不満）

冗談じゃない。仕事から帰ってきたら
ずーっと私の後ろについてきて、話してい
るのはどこのどなたでしょう。私もそれに
合わせて話すので、普通の夫婦よりは、か
なり会話があるはずだ。これ以上、話をし
たらあごがだるくなってしまう。子供が寝
た後、やっと一人の時間になってあれこれ
しようと思うと、夫が「話をしよう」と、か
かわってくる。

ここ二日はかり、私は自分の趣味に没頭
していたので、それが気に入らないらし
い。ムスツとして口をきかずに、わざと、
まだアイロンのかけていないワイシャツを
着て仕事に行った。

私はけんかが大の苦手だ。人と争うのは好きではない。たいていのことは「ごめんね」と、こちらから折れるので、今まで大きなけんかはしたことがない。今回も「ごめん」と言ったが、かなり怒っているみたいで返事もせずに行ってしまった。困ったなあ、と思いつつ、まあ、仕方ないや、と開き直ってコーヒーを飲む。途中、何度か仕事場に電話をするが、(個室なので、他人に迷惑はかけないですむ)全然出ない。こりゃ、相当怒ってるわ、と暗い気持ちになる。

そうこうしている内に夕方。玄関のドアの開く音に「ドキン!」として出てみると、手にはスイカを持ち、にこにこした夫が立っていた。(あれえー、おかしいな)と思いつつ、「おかえりなさい」と言っただけでスイカを受け取った。帰りに近所のスーパーで買ったらしい。

次に、私に続いて台所に入ってきた夫がうれしそうに「お前、今日おれを自転車で追っかけてきただろ?」と言ったので、一瞬、何のことか分からなかったが、すぐ思い出した。

朝、忙しくてごみを八時までに出せなかった私は、夫が出た後、ごみ捨て場にごみ収集車が来たかどうかを確かめに自転車に乗っていった。二度手間になるといやなので、ごみは自宅に置いたまま。そのとき、必死の形相で自転車をこいでいた私のそばを、夫の乗ったバスが通りすぎた、というわけだ。

「いやあー、追っかけてくるほど気にしていたかと思ったら、怒るのバカバカしくてさ」

(どうやったら、そういう考えが浮かぶのよ)

「でも、電話、出なかったじゃない」

「あ、やっぱり電話もしたの? 今日とは別のところで仕事してたから」気のせいかわからないうきしている。

あなたを追いかけていったんじゃないくて、実はごみが……と、言いそうになったが、せっかく機嫌よくしているんだから、(ま、いいか)と、ほんとは腹の皮がよじれそうなのを必死にこらえ、うつむいていた私です。

(え・奥島千恵子)

想像して下さい!
30年後の日本を!



団塊の世代が高齢者になる頃
年金は? 国保は? 人手は???
今、うてる手はうっておきたい!
——**独立介護費用保険**です。

保険料(例)
女性60歳一時払保険料
¥2,866,680(Sタイプ標準たきりのみ)
保険期間終身
70歳時長寿祝金300万円+配当金
お受け取りになれます。

火災・自動車・海外旅行など 損害保険のことは

■くわしくは「わいふ」あて
電話で資料請求して下さい

おいふ指定代理店
東京海上火災保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771



連載小説 4

契約結婚

山影 冬彦

障害は意外に小さかったのだ。そういえば、怜子が定職について完全二馬力の共稼ぎを始めてからは、時間的な忙しさとは逆に経済的には生活もだいぶ楽になり、といって、生来の質素な生活を維持して浪費に走らず、折をみては長期債務の繰上げ返済をこなしてきた成果がそこに現れているに違いなかった。予想外に少ない残高に心弾んで、道也は自分の現時点での退職金を計算してみた。その計算は単純で、月々の基本給に勤めた年数を掛ければよかった。すると、その弾き出された数字は、長期債務の予想外に少ない残高に届くものだった。道也は内心歓喜の声をあげた。一見して無謀と思われた選択が無謀ではなくなる可能性が出てきたからだだった。

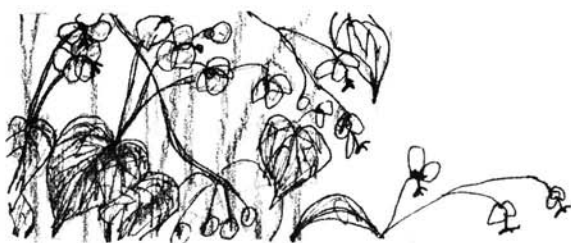
自己の退職金で長期債務の残高を精算出来れば、家計の細かい出納項目をいちいち調べるまでもなく、自分が教師をやめても経済的破綻を招く恐れはないだろうということが予想できた。住宅長期債務返済の重圧さえなければ、教師一人の稼ぎで家族をどうにか養っている例は身近にさらにあるからだだった。怜子も教師になって十年以上過ぎていた。十年も勤めれば、毎年黙っていても昇給する年功型賃金のうま味が少しは出てきて、怜子の月々取る給料も結構な額に達していた。住宅長期債務返済の重圧がなくなれば、贅沢を言わぬ限り、怜子一人の給料で自分を含め子供二人の計四大家族が食って行けない道理がなかった。



道理は道理でも、それだけでは道也は不安だった。自分でも思いの外の思い切った選択ではあるし、交渉相手となるのが、十五年も連れ添って道也の弱点をすかさず見抜く技量に磨きがかかった怜子だった。道也は、住宅長期債務返済の重圧がなくなれば怜子一人の給料だけで一家四人が何とか食って行けるという道理を、月々の出納の具体的な数字に照らして確かめる必要を感じた。

数字を弾く上で、収入については、とりあえず怜子の給料の現状をそのまま使うことにした。支出については、銀行の預金通帳を基に、銀行振込みになっている光熱水費その他の費用の年間を通じた月々の平均額を算定し、これとは別に、日々の買物や新聞代等の現金での支払い費用を家計を預かってきた経験から概算して弾き出し、更に、怜子と自分の小遣いをも現状通り計上してみた。すると、月々支出が収入を五万円程上回る計算となった。この五万円の赤字ならば何とかなると道也は思った。まず、共稼ぎを始めて以来自分の小遣いとして二万円計上していたのを一人稼ぎ時代に戻して零にすれば、赤字は三万円に減る。この赤字三万円は、退職して無職となった道也が怜子の扶養配偶者として認められ、彼女の給料について、道也分の扶養手当が付くと同時に、所得税率が下がって所得税の減額が生ずれば、どうにか解消できる金額だった。その上、子供分の扶養手当が加われば、お釣りが来る程だった。

殊更ボーナスを当てにしないで月々の怜子一人の給料だけで生活が維持できるという計算結果は、道也を大胆にした。道也は改めてこの計算書を見やすく書き直した。計算書を見やすく書き直すのは、それを怜子に見せるためだった。この時、創作活動に打ち込むために教師をやめたいという要求を、怜子との約束された第二回交渉時に持ち出そうという決心を、道也は既に固めていたのだった。これならば、子供に手がかからなくなって浮く時間などといううち臭い限定を取り払う形で怜子の勉強意欲を満足させてやることもで





きるし、自分の創作意志を呼び起こすこともできて、誠にいい案だと、怜子の反応などはろくろく思い浮かべずに、道也は思い込むまでになっていた。

19

だが、道也の思惑は、またしても当てが外れた。再びもたれた契約交渉において、勇んで提示された道也の着想は、怜子によってけんもほろろに撥ねつけられた。

「一体何を言い出すかと思つたら、まあ、呆れたわよ。教師をやめて、創作に打ち込みたいですって。創作に打ち込むのは結構よ。それは大いにやってちょうだい。夏休みでも冬休みでも暇を見つけてやればいいじゃないの。でも、それと教師をやめるのと、どう繋がるの？　そもそも子供の手がからなくなつて浮いた時間をどうするかという話、どこへ行ったのよ。そこから教師をやめるところまでどう繋がるの？　この前の時は、別に要求などない、現状に満足している、めでたいなんて言っていたんではないの。それがころっと變つて教師をやめたいですって。一体どうなっているの？　全くミチって極端から極端に突っ走るんだから。四十にもなつて、二児の父にもなつて、こんな極端ころころでは困るじゃないの。もっと思慮分別をもつて物事を考えてよ」

「でも、説明したように、レイの稼ぎがあれば、わが家は何とかやっていけるっていう計算が成り立つものだから。確かに多少は苦しくなるに違いないが」

「何をおっしゃる兎さんだわよ、全く。だいたいミチの計算では退職したミチがわたしの扶養配偶者に認定されて扶養手当てが支給されるって当て込んでいるけれど、そんな保障はどこにあるの？　世の中妻は簡単に扶養配偶者になれるけれど、夫についてはそうは問屋が卸してくれないってこと、知らないの？　男の給料には扶養手当てが想定されているけれど、女の給料にはそれが想定されていないのが普通なのよ。それは、確かに論理的にはおかしいことよ。おかしいことだから、支給しろと要求はできるわよ。でも、相手がそ



20

れにに応じてくれなければ、それまでよ。後は裁判にでも訴えるしかない。けど、裁判には費用がかかる。共稼ぎならそんな出費にも耐えられるけれど、一馬力では無理よ。この点、どうしても一馬力にして創作活動をやりたいというのであれば、教師をやめるのは、ミチではなくて、わたしの方が合理的よ。わたしなら確実にミチの扶養家族になれるし、だいたい給料だって後から教師になったわたしの方が低いんだからやめて損になる度合いが少ないし、おまけにわたしの方が通勤条件が悪いんだからやめて浮く時間は多くなるし、そうじゃない？ そうでしょうよ」

「それはそうかもしれないが、まさか俺が創作活動をしたいからってレイに職をやめさせるわけにはいかない。それではいかにも自分勝手だ」

「あら、いいのよ。わたし、どうあっても職を続けて行きたいなんて思っていないんだから。もともとミチによって無理に働きに出されたという感じだし、特に今の高校教師ではね、はやくやめたいって思っているくらいだよ。さあ、どうする？」

「……」

「どっちがやめるかもめるようでは、やっぱり現状維持で二馬力で行くしかないな、当面は。二馬力は何と言っても一馬力よりは安定していて馬力があるんだから。いざという時心強い」

「それはそうかもしれない、でも——」

「でも、何よ。それなら伺いますが、だいたいわたしの大学院への進学はどうしてくれるのよ。確かに時間の配慮はしてくれてあるようだけれど、費用はどうなるの？ 入学金は？ 学費は？ 大学院の学費って馬鹿にならないわよ。その費用、月々の支出の中に計算してある？」



「えーと、いや、それはなかった……」

「ほら、そうでしょう。その費用どうしてくれるのよ？ だいたい大学院への進学が躊躇いなく考えられるというのも、二馬力だったからよ。費用を心配しなくて済んだからよ。一馬力ではとても無理、話にならないわ」

「でも、ボーンスを当て込むという手がある」

「ボーンス！ ボーンスをそんなことに遣う気？ ボーンスにはもっと大切な遣い道があるわ、全く。だいたい子供らの将来の学費はどうする気？ 高校・大学が控えているのよ。それにこのマッチ箱のように狭い家、もう限界よ、全く。だいたいわたしたちの老後の生活だって決して安泰ではないんだから。それに一馬力でどうやって備える気？ 備えようがないじゃないの、全く。車だって、もうポンコツよ。だいたい馬力がないんだから。もう替え時よ。まさか乗り潰す気ではないんでしょね。もっと馬力のある車でなくちゃ、坂道で止まったりしたらどうする気？ 事故の元よ。だから、やっぱり二馬力よ」

「恰子の口から「全く」と「だいたい」が連発されるにつれて、事は次第におお事になってきた。道也は藪蛇という言葉を思い浮かべていた。

21

「見てよ、あのレオのずうたい。あんなのに家の中でごろごろされたんでは狭苦しくて目障りで仕方がないって、日頃こぼしているのはミチでしょうが。ミコもそのうちあなるわよ。今のところ二人仲良く一つ部屋で満足しているけれど、男の子と女の子なんだから、そのうちめいめいの部屋を要求するに決まっているわよ。そうしたら、二階の六畳二間は子供らによって占領される。今ミチとわたしの本置き部屋としてある空き部屋はいずれ占領される運命にあるのよ。そのわたしたちの本をどこに持っていく気？ 一階にはわたしたちの寝室兼居間の六畳一部屋とこの台所だけ。本の行き場なんてないのよ、全く。」



本なんかもう処分してしまう？ でも、創作を始めるといふのなら、本も今以上に必要になるでしょう。わたしの勉強にだって必要よ。

だいたい創作をやるにしても、どこでやるのよ。今まで我慢していたけど、欲を言えば、わたしの勉強部屋だって欲しいわよ、全く。だいたいそんな贅沢な空間、この狭いわが家にはどこにもないのよ。創作は創作で結構だけど、住宅事情の方ももっと真剣に考えてよね、全く。ミコはピアノを習いたいって言い出しているわよ。ピアノを置く空間なんか、もうありはしないわよ。建増する？ 建増するにも五百やそこいらの金はすぐ飛んで行く御時世なのよ。でも、わが家の場合は、敷地が狭く、もう建蔽率一杯に建っているから、違法建築をでも覚悟しない限り、とても建増は無理。敷地を買い足すなんてことも、隣近所に全然当てがない。後は思い切って買い換える以外ないわね。そうならば、二千や三千の金はすぐ飛ぶわ。いや、二千や三千の金でも無理かもね。とにかく、共稼ぎを続けていれば、そうした出費にも対応できるかもしれないけれど、一馬力ではとても無理。やっぱり共稼ぎを続けていくしかないのよ」

「……………」

怜子の話はとんだ方向に逸れてきた。多額の長期債務返済の重圧を新たに作る話題には道也はぞっとして身を竦めた。道也の口からは漏れる言葉も失われた。道也はただただ押し黙る外なかった。

22

「この際だから、とくと伺いますが、だいたいミチは子供の将来をどう思っているのよ。わが家の子供らは、まあ勉強は嫌いではないようだけれども、頭の出来はそんなによくはないわよ。それでも、大きくなれば大学へは行きたいって言うでしょうね。子供にその気があれば、ミチだってその希望を叶えて上げたいでしょうが。でも、費用の安い国公立は



なから無理よ。私立しか入りようがないから。その費用をわたし一人の稼ぎで賄えと言われたって、土台無理だから。ことによったら、高校の段階からして公立は無理で、私立に通わせなければならなくなるかもしれないわよ。これだって馬鹿にはならない額だから。今はまだ二人とも小・中学生で費用もかからず、高校はとにかく大学なんてまだまだ先のことのように思えはするけれど、そんな時期はあつという間に来てしまうから。さあ、伺いますが、そうした子供の将来のことを、教師をやめたいと考えた時、考えに入れましたか？ 入れていないでしょうよ。だいたい働き盛りの真っ最中だつていうのに教師をやめたいだなんて、自分勝手もいいところよ。もっと家族のことを考えてちょうだい」

「ねえねえ、おとつちゃん、教師をやめるの？」

「えっ！ おとつちゃんが教師をやめるってえ？」

怜子の道也に対する説教の中で自分たちのことが話題になっていることを聞きつけて、二人の子供が親の話し合いに隣の居間から首を突っ込んで来た。

二人の登場に道也は嫌な顔をしたが、怜子はむしろ二人を自分のいる台所の方に招き寄せた。

「やめるっていうのじゃなくて、やめたいっていうのよ。それにしたって、おまえたちのおとつちゃんて、自分勝手と思わない？ 思うでしょう」

「ねえねえ、おとつちゃんて、なぜ突然教師をやめたいなんて言い出したのさ」

男子中学生のレオが言った。

「ふんにゃあ、おとつちゃんが教師をやめたらわが家の暮しはどうなるんだあ」

女子小学生のミコが言った。

二人の子供はめいめいの疑問を勝手に持ち出して、台所の空いている席に腰掛けた。事態はどうやら、怜子と道也の契約更新交渉から、子供らを含めた家族会議へと移り変わりつつあった。いずれにしたところで、道也の形勢不利はもはや挽回しがたかった。

— つづく —

(え・鳥居禎子)

女たちの情報紙

ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 650円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

さべつ・おんな・はたらく・がつ・にう
アジア・たべもの・せつけん・げんぱつ

「わいふ」の新刊

子育てはつらい!

●こういうと叱られる時代が長く続きました。

紙おむつ、離乳食、いろいろ便利なものだらけ、ちっともつらくないじゃないか、という人もいます。でも、そうじゃないんです。

●楽な世の中で、つらい子育てに母親を追い込んでいるものは何か。母親の現場を知っている「わいふ」なればこそ生まれた一冊です。

市販していませんので、直接「わいふ」に電話でご注意ください。四六判二百ページ・千五百円

核家族のための子育てガイドブック

●幸せな子どもは幸せなおかあさんから生まれます。子どものために、と自分自身の飛ぶ力をなくしたおかあさんがどんなに多いことでしょう。

●何がしつけないのか、人間らしい母子関係とは何なのか。この一冊は、まったく新しいかたちの子育てのガイドブックです。A5判三十二ページ・三百円

ご注文は(株)グループわいふへ

〒162 東京都新宿区市谷加賀町二一五―三三

☎〇三―三三六〇―四七七二

わいわい がやがや

椎名誠さんに だまされました

岡山県津山市●餅原ひろ子(43歳)

ある日何気なく雑誌をめくっていたら、作家の椎名誠さんの写真とインタビュ―が出ていた。椎名さんのことは、知りつくしているつもりですが、たぶん何も目新しいことは出ていな

いだろうと思いがちながら、読んでみた。

そして私は、「エーッ、ウッソォー」と叫んでしまった。彼が「僕の娘が」と娘のことを話題にしているのだ。かの有名な「岳物語」の岳君の上に姉がいるらしい。

「犬の系譜」で吉川英治文学賞の新人賞をとって以来、親しみやすい言葉で書かれた私小説や、エッセイのすべてを私は愛読している。特に「岳物語」は、好きな私小説だ。作家で冒険家のシーナ氏と、保母さんの奥さん、たくましい一人息子、岳君、カヌー犬のガクは登場するが、女の子なんて、チラとも姿を見せない。

兄弟げんかの仲裁をするのが私の長年の夢だったのに、とうとう今春大学に入學した息子は一人っ子で終わってしまった。子供のいない人たちと同じく

らい、一人っ子の親は、無念さをかみしめている。今の世の中、女の子はまだしも、男の子一人なんて、これから先の長い人生を考えると、ほんとうにわびしい。

そんな思いの中、「岳物語」に出会った。

一人っ子の岳君も、両親である椎名夫妻もたくましく、雄々しく世の中を生きている。それを読むと、「まっいいか。人生、



子供の数じゃないもんね」と大いに勇気づけられたものだった。

それが椎名さんに女の子がいたなんて。えーっ、ずるい。それじゃあ椎名さん、よいとことりじゃありませんか。

それにしても一連の「岳物語」にチラとも姉の姿を見せないのは、一切の無駄を省いて、対象を的確に主題に近づけるプロの技術だろう。

そして分かったことだが、やはり私小説はあくまでも小説であって、ノンフィクションではないのだ。

椎名氏は女性ファンが多いらしい。文章の魅力はもちろんだが、いつまでも少年らしい風貌を失わない彼に魅せられて、私もつい力を入れて読みすぎたらしい。

私、椎名誠さんに、すっかりだまされてしまいました。

一人で食べるとき

横浜市泉区●原 眞智子(56歳)

一人で外食を楽しめるようになったのは、ほんのここ数年のことにはすぎない。だいたい専業主婦が一人で外食する機会が平均でどのくらいあるか知らないが、以前私は一人で外で食事するなどとは思ってもよらなかった。食事時間を過ぎて帰宅して食べるか、やむを得ないときはドーナツ屋のすみで急場をしのごくらいだった。

六年前、この地に戻ってからそれが変わり始めた。理由の一つは、昼食を毎日夫とともにしなくてもよくなったこと、もう一つは、首都圏の女性たち、たくさんの女性たちが一人で落着いたレストランなどでゆう然と食事をしていくことである。以前に住んでいた中京地方では女性一人で食事する姿などはほとんど見かけたことがなかった。私の見聞は限られたものだし、あれから月日も経ったから現状は分からないけれど。食事に關しては習慣が大きな力を持っていると思うが、私の

変化にも時間が要った。ドーナツ屋のすみそば屋のいすになり、洋風のレストランでも中華料理でも相談相手は財布の中身だけになるには二、三年かかっている。そして初めて私は、以前自分がどうだったのかを意識した。

いや、お金の問題とは違ふと思う。もっと大きいのは慣れの問題、それに社会的合意とでもいえるものの存在ではないだろうか。店の入口で一人であることを告げる。店によっては案内を待つて席に着く。メニューを検討する。

し、好きなものを選ぶ。料理は味わって食べる(私は残すことはほとんどない)。回りの人々の食べるのをながめ、会話の端々を耳にする。凝った、あるいはシンプルなインテリアを鑑賞する。いずれにしても食事のために用意された空間を一時占有する気分を十分に味わう。

自然食通信53

元祖エコロ

ジスト・百姓から言わせてもらえば

■隔月刊(奇数月下旬発売)
定価五七〇円

文字通り自然のたなごころの中で生産と暮らしをいとなんできた農業者、また都市から田舎へ、消費するだけの暮らしへの異和感、生命への危機意識から、自然とともに生産する側へ生き方を転じた人たちから届けられたメッセージと、都市にも流通にもこびないしたたかな戦略。
七月二十五日発売

写真集

定価2266円

発売中

せんせい
はほーっと
宙に舞った

宮澤賢治の
教え子たち

撮影・塩原日出夫 文・鳥山敏子

自然食通信社

東京都文京区本郷2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026

眠れなかった夜

横浜市港南区 ● 加納礼子

二度めに目を覚ましたときも夫は帰宅していなかった。午前二時を過ぎている。心配を通り越して怒りが込み上げてくる。電話はリンとも鳴らない。二度めに目覚めたとき、玄関のほう

で人の気配がした。起きていこうかと思っただが顔を合わせれば



けんかになりそう。どうせ酔っ払っているのだらうから。

これで安心して休めると思ったのにまた目が覚めてしまっ

た。いびきなどには驚かない私

だが今夜は少し違う。深いため息が繰り返している。暗や

みの中、声をかけるタイミン

グが見つからない。陽気な性格

の夫にして初めて接すること、何

か重大な事でもあったのだらう

か。もしかして……辞表を出し

たか……。

夫が会社に対して不満のある

こと、特に上司と反りが合わな

いらしいことは薄々感じていた。

これは社内結婚の利点で何

となく分かるのだ。遅々とした

昇進ペースから察しても私のカ

ンは当たっているのだらう。だか

ら冗談で転職をそのかしたり

もしてみた。

今失業したとしても少しの蓄

えと失業保険金で何とかしのげる

はずだ。私も働く。大会社だ

けが会社じゃない。ゆっくり次の

仕事を探せばいいのだから。

人脈もある人だし才能もある

(これは妻の欲目かしら)。

正直言って、私も今の生活に

飽き飽きしている。仕事に追わ

れ、夢のなくなった男との暮らし

はどつまらないものはない。

当然会話も少なくなってきたい

る。ただ困ったことが一つ、わ

が家は目下わけあって社宅暮らし

しなのだ。退職したら引っ越さ

ねばならない。

夜逃げとまでいかずともすぐ

出たほうがよい。そうだわ!

田舎に一人暮らしの私の父と同

居することにすればよい。急に

同居する必要性ができたという

わけ。

朝になった。のっそり起きて

きた夫は神妙な顔で何か話した

い様子。私は胸の高鳴りを静め

次の言葉を待った。「ゆうべ電

車の中で居眠りしていて財布を

すられた……」私の体の中から

スーッと力が抜けていった。

(え・小宅昌枝)

自費出版は

“わいふ”へどうぞ!

“わいふ”編集部では自費出版

の製作をしています。本をお出

しになりたい方はぜひご利用く

ださい。

自分史、回想録、旅行記、童

話、特集、歌集、同人雑誌、絵

本、コミックまで、何でも作れ

ます。

費用はモノによりいろいろ違っ

てきますが、市販よりは確実に

お安いです。ご事情を伺いご相

談に応じますので、ぜひお問い

合わせください。

イラストも用意できますし、

文章をお書きになれる方のため

に、聞き書きのまともいた

します。

人生の記念にご計画なさって

はいがでしょう。

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二三八号のテーマは「給食体験」です。

今、豊かな日本は、エチオピアやバングラディッシュの飢えた子供たちに援助を、などと言っていますが、遠くない昔、敗戦直後にアメリカから食糧援助（確かウラ物資といいました）をもらったこともあったのです。それが学校給食の始まりでした。

缶詰のパイナップルを初めて口にして、大感激した子供もありました。そんなおなかのすいた子供のいたところから四十余年、今や、グルメだの飽食だのともったいないことをいう世の中です。

ウラ物資以来続いている学校給食も、見直しを迫られる時期に来たのではないでしようか。

折から埼玉県庄和町というところで、町長が「給食を廃止して母の手づくり弁当を」とブチ上げ、賛否両論のあらしが巻き起こった形です。「わいふ」は全国誌で読者の年齢層も幅が広い。様々の地域、様々

の年代の方に「給食体験」を語ってもらったら、こうした問題に対する答えもおのずから出てくるのではないかと思います。

ご自分の子供時代の経験、親として見た子供の給食、つくる側の立場から、先生の立場から、改善運動にかかわって、などなど、多様な体験談をお寄せください。

四百字詰五枚〜十五枚程度

●ワンポイント情報

「わが家の園芸」です。

グリーンインテリアや、ベランダのフラワーボックスが普及しつつあります。

缶詰の花のタネとか、ゼリー状の土で水やりが間違でも育つものとか、変な小道具もたくさん売られています。

子供の宿題のアサガオ、ヒマワリもあるし、ちょっと園芸に手を出してみた、という方は大勢いらっしゃるでしょう。

今回はその成功談、失敗談を募集します。夫が園芸家でも、子供など家族がやっている場合でもけっこうです。こんなものを植えて、こうなったという話をどうぞ。四百字詰一枚程度。

締め切りはどちらも八月二十五日。

△氏名、住所を秘密にしたい方▽

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

△仕事をしたい方▽

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事があったのですか）というアンケートをお送りしたことがあります。その後の新会員、以前と状況が変わって、勤めるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部まで一報下さい。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

エッセイスト・クラブ

(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれる
よい文章をお待ちします。

ズバリ一言

(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービスその他
目にふれ耳にきき手にするものに、どうし
てもこれだけは言わずにいられないという
「もの申す」の欄。改善への具体策の提言
もどうぞ。

奥さんから外さんへ

(一六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんど
ん進出しています。どうして、どうやって、
何のために、あなたは奥を捨てて外へ出た
のか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、
どんな目的のためでもよいのです。家族の
反響、得たもの失ったものetcをお書き
ください。

マイ・ジョブ／マイ・

プロフェッション

(一六〇〇字まで)

あなたのしていらっしゃるお仕事の内容、
どんな技能、どんな適性が必要とされるの
か、などをレポートしてください。保険の
外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも
サブプレシープ

(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載
せします。感想、反論、何でもどうぞ。

人間マンダラ

(一六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描
いてください。もちろん家族の一員でもよ

いのです。

親の言い分・教師の言

い分

(一六〇〇字まで)

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向
かっては言えない関係。教師から親へ、親
から教師へ言いたいことを率直に言いあっ
てみましょう。抽象論でなく、それぞれが
抱えている問題を具体的ににお書きください。

フリースペース

(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条
にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自
由のある「わいふ」ならではのコラム。

わいわいがやがや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコ
ラム。

読んでみました

(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視
野の広い読書体験を。

情報コーナー

(三〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交

換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

サークルだより (八〇〇字まで)

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたい、というよびかけ、こんな活動をしました、これからですからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号までとなりま。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思ひます。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

コラム以外の投稿募集

特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の

情報の徹底収集。テーマはそのつど設定しますで、募集欄をごらんください。

特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適合と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。

●ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。ただし次のコラムへのご投稿とはだぶってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サブレシープ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです。で、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直

すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいの

よろしく。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきたい、ということ

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

編集だより

●セックスストレスの現実について、編集部でも驚くほど多くの投稿が集まりました。これは最近の現象なのか、それとも実際は、以前から存在していたのに、表面化しなかっただけなのかもしれません。

●それにひきかえ、ワンポイント情報には一件しか応募がなく、企画がぼしょってしまいました。残念です。

●「子育てはつらい！」というタイトルの単行本を「わいふ」から自費出版しました。若い投稿者七人の筆で、様々の面から現代の子育ての難しさを浮き彫りにしています。「口があるならものを言え」の立花さん、「みんな悩んでママになる」の結木さんなど、そうそうたるメンバーが執筆、こんな面白い読み物はめったにありません。市販はしていませんので、直接編集部へハガキか電話でご注文ください。一五〇〇円（送料別）です。

また子供の小さい方のために編集長田中の筆になる「核家族のための子育てガイド

ブック」(A5判三二ページ)ができてきましたので、よろしかったらご注文ください。こちらは三百円です。

●「子育て会議」の座談会を今回で打ち止めにする、とこの前の号でお知らせしましたが、出席者から体罰問題を取り上げてほしい、という強いご要望が出ましたので、もう一回行なうことにいたします。

次回は八月二十八日(金)午後二時から編集部で。出席ご希望の方は、二十六日までに電話で編集部にお申し込みください。

暑い盛りで申し訳ないのですが、まとめの関係上、どうしても八月中でないと無理なのです。どうぞよろしく。

●さて座談会は、各号一つは載せたのですが、二二九号からはみなさまのご希望のテーマで開くことにしたいのです。取り上げてほしいテーマを、ハガキか封書で編集部までお寄せください。毎回偶数月の二十五日を締め切りいたしますのでどうぞよろしく。

●ではお元気で、よい夏休みをお過ごしください。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

わいふNO.237.

(隔月刊)

1992年9月1日発行

編集・わいふ編集部

定価460円(本体447円)

(年間購読料送料共4020円)

印刷・平河工業社

発行所・(株)グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

〒162 TEL (03) 3260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……

必ずお申し出下さい。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひ葉書か電話を。

らくだ式学習法

主婦が出会った(押しつけない)学習法の秘訣

いつでも、どこでも、セルフラーニング。

間瀬中子 ◆著 平井雷太 ◆協力

いま子育て真っ最中の親たちは、子どもが強制されずに学習したらどんなにいいかと思っている。本書は、そんな母親の一人だった著者が体得した、子どもがすすんで学習するようになるユニークな指導法のメッセージ。

◆四六判……………定価1500円……………好評発売中◆

常識福祉のウソ

大人たちの忘れ物、見つけて下さい。

◆社会福祉法人「湘南学園」理事長

中澤弘幸 ◆著

湘南学園で著者が行ってきた実践は、近代社会の福祉・教育に対する考え方を根底からくつがえすことになった。人と人が本気で向き合うとは、家族とは、人が育つとは……、これからの時代を生き抜くヒントにあふれている。

◆四六判……………定価1500円……………好評発売中◆

◆あなたとともに考える出版社……………〒170 東京都豊島区南大塚3の10の10

☎03(3987)8621(販売)



日本評論社

ベストセクション①

あの戦争のなかに ぼくもいた

石浜みかる 著 ◆ 垂石眞子 絵 ◆ 定価1600円(税込)

——歴史を語ることは
新しい時代への愛となる

クリスチャンのお父さんは治安維持法違反で警察に連行されていった……。

●「天声人語」(朝日新聞)で絶賛!

——周囲の人々も巻き込んだ戦争が、いま忘れられがちだ。日本の針路を考える上で過去を学び直すことは不可欠だ。改めてそれを痛感する。

●毎日新聞「子どもの本」欄でも絶賛!

——作者は、日本の国家が歩んだ歴史に、ヤソのスパイと言われた家族の小さな歴史を重ね、暗い時代をよく書き伝えています。



こどもの
本の

国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6 (各定価は税込み)
●ご注文は…☎03(3943)3721 / FAX03(3943)3740へ

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1
☎03(3585)1141 各税込定価
●内容案内呈!

●爽やかで、味のある新刊!

新東京の自然水
早川 光孝 写真・イラスト・東京の自然水を、増補・全面改訂・こ
んなにもある「マイ名水」名水・温泉・蔵元・豆腐屋…… *12000円
●**絵とき 土と遊ぶ** ●**かたてで感じる 地球のいのち**
松尾 隆・奥田 博子 著 かわいイラスト満載のドロドロ62巻 五感を
いっばい使って、さあ!ドロドロノ生活科にも良いよ! *13000円
ガンとたたかうガンと向きあう
草間 悟 監修・藤井 博子 著 ひとはなせガンになるのか? ガン研究の
現在と告知問題などを医者と新聞記者が平易に解説 *13000円
ヒナオ 今、こどもたちが危ない!
●**こどもの体と食生活の危機** 子どもの成人病肥満・食品添加物と骨・
体温低下現象などを専門家が平易に解説 ●全1巻26分 *10000円

お産がゆく ●**少産婦時代のこたわりマタニティ**
きくちさかえ 著 ゴージャスにもナチュラルにも産めるようになった
今だから、産む側の立場で分娩室の中身をレポート *12500円

●あそび
シリーズ
第3弾!

あそびが
ひろがる!
楽しさ
いっぱい!

刊行
開始!
●毎月1冊刊



なやるとき、ひみつにいども楽しさを / 自分の力や
知恵を使い、工夫をこらさおもしろさを全10巻に満載!

あそびの大星雲

全10巻 幼児~小学校低学年向
A 日割上巻・各48ページ
●全10巻箱入セット定価13,000円

●楽しい全10巻 各巻構成

- 1 ひみつの なやとき あそび
(生活習慣の伝達の巻) 最新刊
- 2 とびきり ぱっちり あそび
(生活の力、動物の心しる) 1月刊
- 3 ゴ かなやかな あそび
(なぜ花や葉がつかくの) 8月刊
- 4 かくの ぼうけん あそび
(おとし化学の魔術世界)
- 5 がくしゃも おをむく あそび
(物と地球の科学の巻)
- 6 やすくて おとくな あそび
(おとくをのからくり)
- 7 くしみや おへきの あそび
(はと翼のなやみしる)
- 8 いまはむかし れきしの あそび
(昔の暮らし、生活の巻)
- 9 のこぎり とんかちの あそび
(のこぎり工作、巨大な巻)
- 10 えとちから わきえる あそび
(いのちをいよりの巻)

船瀬俊介 著

自然流 OL健康 読本



*12500円

●快適ライフは、からだと地球にやさしいエコ・ライフノ
流行・CMにとられず、
からだの中からフィット
ネス・ダイエット法を解説
健康・便秘・冷え症・肩こ
り・OA機器症候群・他
美容・肌荒れ・若シヤン
肥満・化粧品・朝日製・他
「快適ライフのヒント」など

聞き書 神奈川の食事

最新刊発売中

和・洋・中・なんでもこい神奈川
浜っ子のハイカラ料理と相模野の恵み

●日本の食生活全集シリーズ 第46回 配本ノ
みなと横浜のハイカラ料理、古都鎌倉の精進
料理、三浦半島・相模湾の新鮮魚貝料理……
大正末期から昭和初期の洋風化される以前の
日常食を、おぼあさんから聞き書きで再現!
●毎日の朝晩の献立から行事食も、食材料
作り方も写真添えて、●冠婚葬祭、行事他、



▲けんちゃん汁の“元祖”
建長汁(鎌倉)

●既刊・好評発売中 ●定価各2900円 ●A5判 ●カラー写真豊富
1 北海道 2 青森 3 岩手 4 宮城 5 秋田 6 山形 7 福島 8 茨城 9 栃木 10 群馬
11 埼玉 12 千葉 13 東京 14 新潟 15 富山 16 石川 17 福井 18 山梨 19 長野 20 岐阜 21 愛知
22 静岡 23 愛知 24 三重 25 滋賀 26 京都 27 大阪 28 兵庫 29 奈良 30 和歌山 31 鳥取 32 島根 33 岡山
34 広島 35 山口 36 徳島 37 香川 38 愛媛 39 高松 40 福岡 41 佐賀 42 長崎 43 熊本
44 大分 45 宮崎 46 鹿児島 47 沖縄 ●8月29日発行予定

隔月刊予定 29 奈良 48 アイヌ 49・50 索引